

馬場孤蝶著

明治文壇回顧

協和書院發行



昭和四年六月九日星ヶ岡茶寮にて島崎藤村氏が著者の爲めに催したる還暦祝賀會

土岐善麿
岡野馨
岡野知十
小山内薫
田中貢太郎
森下雨村
戸川秋骨
水上瀧太郎
生方敏郎
久保田万太郎
森田草平
著者
田山花袋
島崎藤村

序

經統をもう少し立てることができると宜しいとは思ふけれども、論議めいたものにする氣はないのだから、自然頁數が多く增すことになる譯であるので、先づこれだけのものにした。僕の著書などは餘まり賣れはしなからうから、これまで公になつた僕の隨筆集などから、本書のなかの記述に關係のあるものを拔いて、本書のなかへ加へたところで、必らずしも讀者の多數は二重讀みをするといふ譯にはなるまいとは思ふのであるが、それもやはり前記の通りの頁數の關係で思ひ止まらざるを得なかつた。

本書の各項を書いた時の僕の心持は、傳聞だけに止まる事柄は成るべくそれを避けるといふやうにしたのであるが、實際はさうばかりも行つて居らぬやうなところもある譯であらうけれども、大體のところ、先づ〳〵著者のさういふ心積りは表はれて居るであらうと思ふ。

讀んでくださる方には直ぐ分かることであるが、各項皆、これまで新聞、雜誌へ寄稿したものゝみである。僕の考へでは、なかの『何年前』とかいふやうなところも少しも直さずに置て、執筆の

年月を終りへ註して置きたいと思つたのであるが、書肆の方では、さうしないで、本文のなかの年月だけを直してくれといふ話であり、それから、又あとでは、執筆年月を記入してくれとも云つたので、再校ぐらゐの時分から、執筆年月を註することにしたのであるが、書肆の方の校正者はそれを消して、入れることを承諾しなかつた。僕ももう一度掛け合ふことも面倒臭いので、そのまゝにしてしまつた。少しヘンなところもできたらうけれども、事情はさういふ譯であるのだから、讀者に於て諒せられたい。

今『文藝春秋』の八月特別號を讀むと、瀬尾武次郎氏の隨筆のなかに左の如き一項がある。

『序だから云つて置くがマルクスの學問をやつた人々の文章は馬鹿に晦澁で、どうしてアンナ六かしい文章を書き下すのかと鼻持がならぬ。慶應義塾の小泉總長の著書で見ると、御本尊のマルクスと云ふ人は明快なる文章で名の通つた人であると云ふことだ。かく言ふ小泉氏は數ある經濟學者の中にても最も明快なる文章を書く人だ。思へば、文章家が少くなつた。飴を引き伸ばしたやうな文學ばかりとなつた』

マルクスの早き祖述者としては、堺利彥、高畠素之、山川均の諸君を擧ぐべきであるが、これ等の諸君は確に明快なる文章を書いた。殊に堺君などは小説まで書いた人で、文章家として老手とい

ふべきであつた。堺君の文章は平明であつたがために、誰にも解かるからいかぬといふので、他の人のものなら見遁されるものまでも、發賣禁止を食つたことがあるとまで傳へられたくらゐであつた。高畠君のものも確な明晰な文章であつたことはいふまでもないのであるが。現在の山川均君の文章は全く名文と云つて宜しからう。荒畑寒村君は小説も書いた人なので、筆の自在に動く人である。

瀬尾さんは東京帝國大學國文科出の學士でおいでなさうだが、吾々の友人の故生田長江、森田草平兩君などゝ殆ど同時代の方のやうであるから、生田、森田の兩君が如何に明快な良き文章を書いたかを知つて居らるゝであらうと思ふ。

さういふ風に、前代の名ある人々は皆それ〴〵の意味に於ての名文家と云つて宜しいのであるがこれは此れ等の諸君の修行に基づいて居るのであらうと思ふ。それ等の人々は誰も彼れも、その前代からの文章といふものゝ傳統に通じてゐたやうに思ふ。前代では、文章を書くといふことが大變な仕事であつた。殊にそれを公にする場合などになると、非常に心を用ゐたものであつた。要するに文章に於ては前代の人々は楽屋に於ける修行が可なり行きとゞいてゐた氣がする。

前代の人々は一體に考が素直で着實であつた。だから、文章も傳統の格を外さない程度に於て、

新味を加へたいといふ風に思つて居た。その上に又、同じ事なら、自分の云ひ度く思つて居る事が讀者にはつきりと解かるやうにしたいと思つてゐた。さういふ風で、その時代には若い人々でも、自然々々に、うまい事を云ふことを考へる前に、先づ物を明快な言葉で言ひ表はすことに力を盡くしたのではなからうかと思ふ。

まだその外に、次ぎのやうなことが云へるであらうと思ふ。

今から、三十年程前までは、まだ首府としての東京の權威が種々の點に於て嚴存してゐた。例せば、瀬尾さんの二十歳代頃には、地方から出て來た學生などは、あらゆる點で、東京化されることを自ら進んで求めるのが一般傾向であつたと云つて宜しからう。殊に文學などに志した人々は先づ第一に東京言葉が自在に話せるやうに骨折つたのであつた。その他の風俗等に於ても成るべく都會人にならうと心掛けたのであつた。詰まり、それ等の人々は、學問と共に社會人としての修行をも併せてやつてゐたと云ふべきであつた。從つて、その時代の若い人々は、物の釣り合ひといふものが善く解つてゐて、常規を逸した行動に出さうな人々は殆どなかつたと思ふ。

だから、今から三十年ぐらゐ前の二十歳代の人々の方が今の地方出の同じ年頃の人々よりも一體に話がうまかつたやうに思ふ。

生田君などはあの通り能辯な人であつたが、森田君も座談は若い時からも、うまかつた人である。

さういふところが文章の上にも表はれてゐて、その時代の人々の書いたものが、何はともあれ、明快といふ點では、現代の人々の書くものよりもはるかに優つて居るのであらうと思ふ。

ところで、吾々の年頃の者になると、氣取つたやうな文字を使ふことが氣恥かしくなつて來て、先づ第一に讀者に解かるやうにといふことを心がけるやうになる。尤も書くことが書くことであるのだから、ヘンに感傷的な書き方をしたらば、尚可笑しからうと思はれるからでもあるのだ。

此の書中に收めてあるものでも、可なり古いものもある。さういふものを比らべられたら、著者の物を觀る心持、物を書く心持の今日までの經過も大體分るであらうと思ふ。

速記によるもの、談話筆記によるもの、さういふのが二三項ありはするが、當時を物語るものとして、そのまゝにして置いた方が宜しからうと思つたので、別に筆は加へなかつた。

昭和丙子夏日

馬場孤蝶

目次

一、自然主義を育ぐくむ文界

一

教科書以外の書物と云つたところで、少年の時分のことだから、もとより娯樂の爲めの讀書であるのは勿論だが、さういふ書物を何時頃から讀みだしたものだか、時々大凡のところでも思ひ出してみやうとするけれども、何うもまるで記憶がない。しかし、推定して行けば、大抵明治十四、五年頃からのことだらう位には考えられぬことはない。そこで、それは先づそれにして措いて、一體何んなものから讀みはじめたものであつたらうか。

今日のやうな少年向きの單行ものとか、同じ向きの雜誌などのある時代でなかつたことは勿論であるのだから、大人の讀むもの――と云つたところで、少年が讀むのだから、小說とか、それに類似の物語り本に限るのだが――を讀むより外しかたがなかつたのだ。

その時分には、所謂る大新聞と小新聞といふものゝ區別が形の上に判然と表はれてゐた。大新聞

――東京日々、郵便報知、朝野など――は四號活字で殆ど振假名の部分はなく、論說が全く主要部であり、次ぎには、法令とか、政治記事などが重要事項として、取り扱はれて居つたといふ風で、挿繪などは絕對にない、全くの政治新聞と云つていゝ位の體裁のものであつたが、小新聞の方は、五號の總振假名で刷つてあつて、續き物――小說と云へば云へるもの――のなかには、極く俗な挿繪があり、雜報――今でいふ社會記事――には、市井の出來事が幾分の文飾を加へて書いてあつて、全體の振り合ひから見れば、何うしても娛樂的の讀み物であつた。所で、僕のうちなどへは『繪入新聞』――これが一つの新聞の名であつたのだから、唯これだけでも、當時の大新聞と小新聞との差違の一端が窺へるだらうと思ふ――といふのがはひつて居つた。僕は何うもそれなどから讀み始めて、娛樂的の讀書の習慣にはひつたのではなからうかと思ふ。

その時分には、前代出版の古い木版ものを重ねて高くしよつて、家庭を廻はつて步るく貸本屋があつたので、さういふ貸本屋の本を何時の間にか讀みだした。

父は決して學者と云ひ得るほどの讀書人ではなかつたのだが、若い時分雜書は可なり讀んだことがあるやうであり、母も假名だけしきか讀めなかつたのだが、それでも古い小說は少し讀んでゐたやうであつた。僕には直ぐ上に兄があつて、これは十九歲位で死んだのだが、それが貸本屋からい

ろいろ借りて讀んだ。父も、母も、さういふ種類の本を讀むことには反對しないどころではなく、すべて書物を讀むといふことはいゝ事で、さういふ小說類を讀むのでもそれはそれで相當の益はあるのだと考へてゐたらしく、時々は斯ういふ本が面白いとか、これ〳〵の本を昔讀んだことがあるとかいふやうな話さへする位であつたのだから、僕等のうちでは讀書の自由だけは十分にあつた。其所で、僕も何時とはなしに、兄の借りた貸本を讀みだしたのだ。兄は繪が好きであつたからかとも思うのだが、『三國志』、『水滸傳』、『八犬傳』、『弓張月』といふやうなものがうちへ入つて來たので僕はそういふものをぽつ〳〵讀んだやうに思ふ。一九だの、三馬のものもはひつて來たのだらうと思うのだが、その時分それを讀んだといふ覺えはない。恐らくは讀みかけても、少年にはその面白みが解らなかつたので、讀まずにしまつたのだらうかとも思ふ。兄の死後、遺物のなかから活字本の『滑稽和合人』を發見して、讀んで大笑ひをしたことは、それから何うしても三四年後のことであつたらう。

因みに云うが、僕の此の兄は、僕に小說を讀む機緣をつくつて呉れたのみならず、本鄕の若竹へ度々僕をつれて行つてくれたのも、此の若い兄であつた。僕のやうな三文文士になることにさへ、何等かの家庭的感化が必要であるといふのであるのなら、さういふ感化の可なりの部分をば、僕は

此の兄から受けたものと思はなければならぬ。

兄が死んでから後、少しの間は、僕自身が貸本屋から本を借りて讀んだやうに思ふ。馬琴の『三七全傳南柯夢』を借りたことだけは確に覺えてゐる。

二

さて、その時分からは、活版本を買つて讀みだしたのだが、それらは大抵古い本の飜刻ものであつた。日本紙へ活版で刷つて、色刷の表紙をつけたもので、半紙版のものもあれば、四六版位の大きさのものもあつた。中には、原版の方の繪を縮寫か何かしていれた立派な飜刻などもあつた。『八犬傳』『南柯夢』などが、さういふ本で出て居たのだが、その當時の代價では一冊五十錢にはついてゐなかつたと思ふのであるが、今あんなものを出せば、一冊何うしても二圓位にはなるであらう。さし繪だけでも『水滸傳』『三國誌』などの飜刻は立派なものであつた。前者の口繪は芳年であつた。『弓張月』は四六版位のものであつたが、繪は芳年門下の年恒であつた。その外、三十間堀の榮泉社といふのから、『古今實錄』といふ叢書が出た。半紙版の一冊二十丁（頁にすれば四十頁）餘位の本で、これは、『大岡政談』とか、『伊達顯秘錄』とか、『天草軍記』とか、『箱崎文庫』といふやうな講

釋の種本であつたやうである。その外に『時代世話劇種本』といふ叢書もあつた。これは、『忠信藏』、『妹背山』、『伊賀越乘掛合羽』といふやうな義太夫の丸本の飜刻で、色刷りの表紙の裏に、役役に當時の役者をあてたものが刷つてあつた。なかにもさし繪がある。繪は落合芳幾の筆になつたものであつた。これも半紙版の本であつた。その外に『やまと文庫』と云つて、義太夫の丸本が合冊になつて出たことを覺えて居る。これは四六版の洋紙の可なり厚い本であつた。

要するに、明治十四年位から明治二十一、二年位までは、出版界では、飜刻が大勢力をしめて居つたと云つて宜からう。

明治十五、六年頃には、創作とか、新刊とかいふものは全く無かつたかといふに、全く無いのではなかつたが、その數は僅であつたのみならず、その質に於ても、前代——德川時代のものとは比較にならぬものであつたので、その方から云つても讀書界の渴を醫するためには、前代の書物を飜刻するより外はなかつたと同時に、當時次第に發達しかけて居た印刷界の印刷能力の方に十分の餘裕があつた爲めもあつたらうと思はれる。尙それ以外に、中學以上の文科教科書は大抵漢文であつたので、それ等の需要を滿たす爲めにも、前代の木版物を活版で刷る必要があつたことは勿論である。詰まり、庶民が前代のやうに本とあまり關係のない生活は送くつて居られなくなつたところ

が、その需要をみたすには前代に印刷した本だけではトテモ足りないので、その飜刻を急ぐといふ譯であつたのだと思ふ。

今その時分の本を出してみるのに、總振假名つきのものであるに拘はらず、本文は勿論のこと、振假名にも、誤植が殆どないと云つていゝ位だ。何と云つても當時はまだ印刷業が今日のやうな大商業になつて居なかつたので、文字の素養の幾らかあるやうな人間でなければ、活版工には採らないといふやうな風で、熟練工のみを使つて居られたのであらうと思ふ。それから又、何と云つても、活版所も今日のやうな大規模のものはなかつたのであるから、一體にさう忙がしくはなかつたので、自然仕事が丁寧にし得られたのであらうと思ふ。

斯ういふところにも、近代的工業の發達の狀態があり〳〵と窺はれるのは、聊か興味ある事柄である。

三

ところで、その時分新作をした作者は何ういふ人々で、且何ういふ風な作物を公にしたかといふことも一言する必要があらうと思ふ。

徳川時代に於て既に作物を公にしたことがあるとか、さなくとも徳川時代の作家の作風を多分に傳へて居るとかいふやうな人々が可なりあつたらうと思うのだが、吾々の聞いたところでは、その代表者として、染崎延房、山々亭有人、假名垣魯文の三氏を數へるのが至當であらうと思ふ。

染崎氏は爲永春水の弟子で、二代目か三代目の春水に當たる人であつたらうと思はるゝ。『繪入新聞』の社員であつたやうである。春水の『いろは文庫』は『梅曆』よりも廣く讀まれたやうに思はれるし、『梅曆』よりも作風その他がこみ入つて居ることは明であるのだが、饗庭篁村氏の考證では『いろは文庫』は春水自身の作ではなくして、染崎氏の代作だといふのである。『いろは文庫』は今日のやうに活版で刷れば大して長いものではないのだが、あれでも木版物としては可なりの長篇であつたらうと思はれるので、或はその一部分などは、明治時代にはひつてからではないにしても、明治に近い時代に書かれたものかも知れぬと思はれる。さうすると、饗庭氏の說のやうに『いろは文庫』は全部、染崎氏の筆になれるものではなかつたにしても、終りに近い部分位は染崎氏の作であつたことは確かかも知れないであらう。それはともかく、明治十年代になつては、染崎氏の名で公にされた作物はもうなかつたやうに思ふ。或は『繪入新聞』に出た讀物卽ち准小說のなかに、染崎氏の筆になつたものが幾つかあつたのだけれども、作者の名が表はして無かつたか、又は表してあつ

ても、僕などは氣がつかなかつたかで、僕などは知らずにしまつたのであるかも知れぬのである。

山々亭有人氏のものも、僕などは記憶してない。氏が後になつて條野採菊の名で書かれたものゝ方を記憶して居る位である。

猫々道人假名垣氏にも纏まつた小說といふやうな作はあつたやうだか、今一寸それを何れとも指示し得るだけの材料が手近に出てゐないので、何ともいふことはできないが、何うもさう大したものがあつたらうとは思はれない。假名垣氏は、滑稽文とか、引札といふやうな短文を書かせては、全く獨步の雄であつた。殊に引札に至つては、こと〳〵く稀有の名文であつたと傳へられるのであるが、その性質上皆散逸してしまつて、後に傳はらぬのは、好事の士の痛惜措かざるところであら

明治十年前後の短文家としては、成島柳北氏を數へざるを得ないのであるが、氏にも後にまで感化を及ぼすといふやうな作物のなかつたことは確である。

此の時代の文藝的作品といふ點から云へば、よし、それは雜文といふ形式のものであつたとして如上の四氏のものを擧げるより外はないにしても、形式の上からいへば、又長さの方からもこれを云へば、小說と云はなければならぬ作品をとにかく新作した人々が外に數氏あつたにはあつたので

ある。

兄の借りた貸本を讀んだ時代のことであるが、その時分位に出た新しい草双紙式の小說を讀んだことを記憶する。一つは『冠松眞土夜嵐』といふ神奈川縣の眞土村といふに起つた農民暴動のことを書いた一編三冊續きで、三冊位になつてゐるもので、作者の名は竹田某とあつたかと思ふ。それから、も一つは河竹默阿彌の『霜夜鐘十字辻占』であつて、これは一編が三冊づゝで五編位にはなつて居たかと思ふのだが、兩方ともさし繪は芳年であつた。草双紙と云つたところで、總假名ではなく、版下流の字ではあつたが、大抵字でそれに振假名がついて居たと思ふ。草双紙型の本では、これ等などが最後のものではなかつたのではあるまいか。明治十六年頃の赤本的小說の作者としては伊東橋塘を先づ擧げなければならぬであらう。敢て優れたる作家といふ意味ではないが、とにかく作物の多かつた點に於て、沿革的の觀方に於ては、その名を逸する譯に行かぬと思ふのだ。その作は大抵七五調で書いた通俗小說であつた。相政の名で通つてゐた相模屋政五郎の傳記とも見るべき『花春時相政』、日本橋邊の商人某——吉安(よしやす)とか云つた——が同じく日本橋の藝者——歌吉といつたかと思ふ——と情死したことを書いた『日本橋浮名歌妓(うたひめ)』、それから、五明樓玉輔の續き話を書いた『寫眞の仇討』といふやうな作があつた。これ等は皆半紙半切位の日本紙の本であつた。柳亭燕枝

の續き話を書いた『鳥衛沖津白浪』、春風亭柳枝の續き話を書いた『唐模樣倭撫子』、何れも伊東氏の名で出たものであるが、これは半紙版の本の日本紙であつた。

此の時代に於て、注目すべき出版界の現象は所謂る小新聞の擡頭である。所謂る繪入新聞の發展である。自由黨の結黨以後、その主義の宣傳機關として『自由新聞』は大新聞として有識社會に對してアッピールする用に供せらるゝと共に、別に民衆に訴へる機關として『自由之燈』なる繪入りの小新聞を其後發行することゝなり、それより少し後になつて、『朝野新聞』と何れだけの關係になつて居たものかそれは知らぬが、『繪入朝野新聞』といふのが、朝野新聞社の向ふ側――尾張町の北角、震災前山崎洋服店になつて居たところ――から發行せらるゝに至つた。『改進新聞』の創刊も大凡それに近い頃のことゝ見て宜しいであらう。これ等の小新聞は、大新聞では無かつたに相違ないが、それでもそれ以前の小新聞即ち繪入りの新聞よりはその體裁内容とも、ずつと進歩したものであつたのである。だから、從來の小新聞に比すれば、これは謂はば中新聞ともいふべきもので、小新聞が大新聞の領地へ一歩踏み入りかけたものと見ることができるであらう。思うに、これ等の小新聞即ち繪入りの新聞は大新聞より比較的發行部數などは多くつて、營業としては成功の望があつたので、次第に今日のやうな新聞にまで發達してしまつたのであらう。大阪の『朝日』、『毎日』とい

ふやうな新聞は大新聞でありながら、始めから小新聞の形式を採つたのだらうかと思ふ。『自由之燈』は、續き物に芳年門下の芳宗の筆になる可なり大きな繪を入れてゐた。沿革的に云へば、形式では小新聞――繪入りの新聞――が大新聞を侵略して現今の如き體裁の一般新聞を作りあげた譯である。

四

所で、『自由之燈』――直きに『繪入自由新聞』になつたかと思ふ――には、花笠文京（渡邊氏）の小說が幾つか出たと思ふ。『身を知る雨』『濱の松風』とかいふやうな續き物が出たことを覺えてゐるのだが、作者の署名は無かつたかも知れぬが、大抵渡邊氏の作であつたらうと思ふ。宮崎夢柳氏の『鬼啾々』といふやうな露西亞虛無黨の時代のことを書いた小說やうのものも『自由之燈』若くは『繪入自由新聞』に出て居た。

さて、こゝまで擧げて來た作家も作物も、そのうちに柳北氏などを除けば、德川時代の戲作家及びその作物とさうした差違のあるものではないのであるが、明治十六、七年頃からは、もつとずつと知識階級即ち學者と云ひ得る人々の筆から小說若くはそれに類似の作品が世に問はれることにな

つたのである。さういふ作品の早いもの丶一例としては、坂崎紫瀾氏の『汗血千里駒』を擧げるべきであらうと思ふ。これは、幕末の志士坂本龍馬の外傳と見るべきものであつて、土陽新聞か何か新聞の續き物で出たものを、更に東京で、半紙半切位の日本紙刷の二冊本にしたものであつた。但し、作そのもの丶傾向としては、その時分から萠芽しかけて居た明治前期の新文學にさしての影響を及ぼし得べき性質でなかつたことはいふまでもあるまい。

けれども、學者の著作に就て書く前に、一般讀書界の知識程度若くは傾向を大凡指示するものとして、飜譯書の小流行を錄して置くのが宜しからうと思ふ。

井上勤氏の飜譯が一番多かつたやうに記憶する。ジユール・ヴエルヌの『空中旅行』『海底旅行』ラムの『沙翁物語』——これは『マアチヤント・オブ・ヴエニス』が『人肉質入裁判』といふ名で出で——それから續いて袖珍本で數種の劇が物語として譯されてゐた。外には『狐の裁判』と『亞剌比亞物語』（アラビアン・ナイト）が井上氏によつて譯されてゐた。その外、牛山某氏のスコツトの『アイヴァンホオ』の抄譯が『梅蕾餘薫』の名で出てゐたと思ふ。

その外、ベカンフイールドのものや、リツトンのものなど一二飜譯されたやうにも思うのだが、さしかゝつて、判然といふことのできるまでの記憶がない。

唯こゝで一言して置き度いことは、これ等の飜譯書は皆四六版の洋紙刷りのものであつたことである。

科學、政治、などの書は既に洋紙になつてゐたのだが、文學ものゝ書が洋紙に刷らるゝやうになつたのは、これ等の飜譯書から追々一般に及ぼしたものと見られよう。

斷はつて置くが、これ等の本は出版年月は、多分伊東橋塘の作品その他當時でさへ舊派と見なさざるを得なかつた作者の著作の出版年月といろ〳〵に入り組んで居るので、年月だけで劃然と區別ができるといふ譯には行かなからうと思ふのだ。

例へば、速記をもとにして作つたもの、或は速記そのまゝのものといふやうな小說は、その內容に於てはさまでの意味はなかつたにしても、速記といふ割合に新しい技術の一般的應用といふ謂はば新しい著作方法によつたものであるといふ性質上、從來の著作方法によれるものより幾らか後になつて出たのは當然であらう。

桃川如燕の講談を速記か筆記かしたものに基いて書いたらしい『曉星五郎』――執筆者は伊藤橋塘――は、前記の燕枝の續き話、柳枝の續き話によつて同じ人の書いた『冲津白浪』『倭撫子』などよりは少し後で出たものゝやうに思ふ。若林玵藏氏速記の圓朝の『牡丹燈籠』が出たのはまたそれ

よりも少し後かと思ふのだが、若しそれが前後して居つたにしても、年月の違ひは何れにしてもいふに足る程の隔りはないに違ひない。圓朝の『松操美人生埋』や『業平文次』の出たのは、そのまた少し後であつたらう。『松の操』は本を見なかつたが『業平文次』と『曉星五郎』とは半紙判の本で幾冊にも分冊されて出版された。『牡丹燈籠』も分冊で逐次に刊行された點は前二者と同じだが、型は半紙半切位の大きさであつた。何れも半紙本のことであるから、厚くなることが印刷能力などの關係からも不便であつたのと、代價――當時一般のかういふ娛樂的の書は精々一冊二十錢位なものであつたらう――の關係などでさういふ風に分冊することになつたものであらう。本の體裁から云へば、『曉星五郎』のは、表紙挿繪等に、その前の赤本の體裁が――色刷りではなかつたけれども――まだ殘つて居り『牡丹燈籠』にも表紙は餘程單純になつてゐたとはいへ、幾らか赤本だちのところがなかの挿繪の風に殘つて居たのたが、『業平文次』になると體裁がもう一層單純で裝飾がずつと減つて居つたやうに思ふ。

五

坪内逍遙氏の春の家朧の名で公にせられた『書生形氣』、『內地雜居未來之夢』の二小說は確に明

治前期の新興文學——硯友社の勃興から明治二十五、六年位迄の時代のものを指してさういふことにして——に對しての曉鐘であつたものと見るべきであらうが、その出版年月は前記の舊傾向の出版物の勢のまだ衰へぬ最中であつたらうかと思ふ。少くとも本の體裁は半紙全紙の分冊もので、圓朝の速記本の系統に屬するものであつた。その發刊が何うしても明治十七年より後ではなかつたことだけは確である。

坪内氏の『書生形氣』には、所謂る文政、天保時代の傳奇的趣向が全く排けられて居たといふのではないが、殺人とか、强盜とかいふが如き日常生活にはさう度々は起らない事件を趣向のなかゝら全く排除したる點や、學生としての日常生活を可なり如實に描いた點や、それまでの普通の小說とは異なつて、作中の人物をば何れを主人公とは定め難いといふ描法を執つて居た點や、作中の人物にはそれぞれ幾分かのモデルがあつた點などで、當時の作物としては確に異彩あるものであつたと共に、從つて可なり新味のあるものであつたことは疑ひない。それで、さういふ新味のある點、即ち謂はゞ幾分の前期的寫實傾向が、その後に表はれた諸小說——例せば、硯友社同人の初期の作物など——に多大の影響を與へたことは拒み難いであらう。

氏の小說はさういふ風に、小說の主義、技功の點に於て著るしき影響を當時の文壇に及ぼしたこ

とは疑ひを容れざるところであると共に、坪内氏の如き當時の最高學府に於て修學を卒へた謂はゞ學者がまだ當時では何處までも戯作と考へられてゐた小說なるものを書いたといふ事實だけが、讀書界――それは今日の讀書界に比べては霄壤も啻ならざる位極く狹いものであつたことはいふまでもないが――に及ぼした影響は決して輕視するを得ないものであつた。

當時の帝國大學は名實共に確に最高學府であつたし、その課程を卒へた人士は、當時の智識界の水準から云へば、確に學士であり、學者であつた。これは世間もさう思つて居り、當人等も自らさう任じてゐた。男は十五歲からはもう大人として扱はるゝことになつてゐた封建の時代を去ることまださう遠くはなかつたので、當時二十四五にでもなるやうな若者は對世間的にも、今日の同じ年齡の人々よりずつと大人者びてゐたので、世間から如上のやうに厚く遇されることがさう可笑しくはなかつたのだ。當時要路にゐた人々も大抵五十以下であつたのを見ても、その時代が何の方面に於ても若者の世であつたことは想見するに難くはないであらう。

さて、さういふ風に世間から尊重せらるべき位地にゐた若き學者が小說を書きだしたのであるから、小說といふものに對する讀書界の考に多少の影響を及ぼすに至るのは自然の數であつた。平俗な言葉を以つて之を言へば、あゝいふ學者ですら小說を本氣になつて書くのであつて見れば、小

說なるものは決して輕んずべきものでなく、從つて、相當學識ある者が小說を書いても決して自ら恥づるに及ばぬ譯である。といふやうな考が讀書界に起されたものと見て宜しからうと思ふ。

坪內氏が『小說神髓』を著して、氏の小說に對する主義を闡明せられたのも、小說の著作後さう年月を隔てたことではなかつたと思ふのであるが、これは當時生れ出ようとしてゐた若き文學者に取つての小說作法教科書の役を勤めたことは疑ひを容れざるところであらう。

卽ち作家としての坪內氏の出現は、後の靑年文士の出現に對しては、春の靑草をはぐくむ慈雨の如き觀があつた。山雨の來らんとするに先だつて、樓に滿つる凉風の趣があつたと云つても宜しいであらう。

作風その他の點に於て、坪內氏の先蹤を追つた硯友社の勃興は、坪內氏の諸作の刊行に對しては殆どその直後と云ひ得る程までに、年月に於て相接してゐるのではあるが、硯友社の勃興を叙するに先だつて、便宜上、所謂學者の筆になれる小說――これは坪內氏の場合とは事かはつて、何れも素人わざと見ざるを得ざるものではあつたけれども――に就て、數言を費して置かうと思ふ。

先づ思ひ出づるのは矢野龍溪（文雄）氏の『經國美談』のことである。これは、古希臘のテエベがスパルタと戰つて、民主國が專制國に勝つといふ傳奇であつて、小說と云はんには餘まりに事を

語るのが主だつた作物であつた。しかし、作中の大立者たる民主主義の政治家エパミノンダスの言行などが、當時の民主主義的傾向の思想を持つてゐた青年等の人氣に投じて、可なりに廣く讀まれたものであつた。本の體裁は四六版の洋紙で、挿繪の有無は記憶せぬが、あつたにしてもさう多くはなかつたらうと思ふ。

末廣鐵腸（重恭）氏の、所謂る政治小説『雪中梅』、『花間鶯』の二連小説が出たのは、少し遲くなつてであつて、多分明治十九年か二十年であつたと思ふ。國野基といふ民間政治家が、政府の壓制と戰つて、遂に立憲の時代を來して、議會の大立者となるといつたやうな趣向のものであつた。作中の人物にも幾分のモデルがあるやうに想像せしむるやうな描法を用ゐたものであつたので、可なり讀書界の人氣を集めたと傳へられた。二十年頃になつての末廣氏の洋行費が此の二連小説の印税から出たといふ巷説はあつたものゝ、四六版の洋紙で一冊精々一圓にはならぬ定價の本であつたのだから、何れ程よく賣れたところで——當時の本の賣れ高で見て——とても、著者にそれほどの收入はなかつたことは明である。此の二連小説は四號活字で刷つてあつたやうに思ふ。

文章に於ては確に明治の文章であり、題材に於ても、確にその時代のものではあつたのだが、技巧に於て何等の新味の殆どないものであつたので、純文學史的に之を見れば、さまでの價値のある

ものではなかつた。唯題材の點から云へば、須藤南翠氏が『改進新聞』に書いた所謂る政治小說に幾分の影響を及ぼし、作に對する暗示を與へたことなどはあらうかと思はれるまでゞある。

東海散士（芝四朗）氏の『佳人之奇遇』は何うしても明治二十年より早くはなかつたらうと思ふ。漢文崩しの如何にも華麗な文章が讀書界の人氣を呼んだ。これは、半紙へ四號活字で刷つた裝飾の少しもないものであつた。何年もの間に亘つてぽつ〱と卷を逐つて出版されたのであるが、遂に未完に終はつたかと思ふ。

これも元より傳奇的の作であつて、純文學としては價値を認めがたいものでもあつたことは勿論である。

須藤南翠氏が『改進新聞』へ連載した長篇小說は、その水準に於ては矢張り『雪中梅』程度のものと見て宜しからうと思ふ。趣向に於ても、文章に於ても、末廣氏の二連小說よりは、小說としての資格が幾らか多く備はつたものではあつたが、要するに矢張り事を語るのが主になつて居つて、作中の人物の心理とか、場面の描寫などに注意を拂うといふやうな傾はまだ少しも見えてゐなかつた。須藤氏のさういふ小說のなかには、デイツケンスの『オリヴアー・ツイスト』の飜案などもあつたやうに思うのだが、それとても、原作とは餘程違つて、話の筋を運ぶのが主になつて居たやう

である。

これ等の諸作は皆舊時代の傳奇の臭味の多分に殘つたものではあるが、それでも尙、題材とか、文章などの點では、その時代の色彩を可なりにもつて居つたので、舊き傳奇には飽きはてゝ、何等か幾分でも新しいものを、前時代の系統を追つたものとはとにかく幾分でもかはつたものを求めてゐた讀書界からは可なりに歡迎されたのである。何時の時代でも俗衆には餘まり新しくては迎へられない。實體は古くつて、外觀だけが新しく見えるといふやうなものが一番一般には迎へられるものである。前記の諸作の迎へられたのは善く此の間の消息を語るものと云はなければならぬ。

社會何れの方面を問はず、新しい改革が起る場合には、新しいものと、その前からあつた制度などとが、重なり合ふやうになつて、新しい物と古い物とがしばらくは幷存して行くものであつて、思想とか藝術とかいふものゝ世界にあつては、尙一層さういふ傾向が常であるのだから、明治文學の初期の新興時代にあつても矢張その通りで、坪內氏に始まつたと見做し得べき當時での新興文學の進行即ち硯友社の諸氏その他の活動などが可なり顯著に始まりだした時代に於てさへも、前記の如き舊套を脫しきらざる文學が可なりに並存して居たことは已むを得ない現象である。

六

硯友社の勃興は、坪内氏によつて始められたと見るべき謂はゞ明治の新文學の運動を直ぐに受けて起つた現象と云つて宜しからうと思ふ。創作の主義は坪内の主義と全く同じな客觀主義、前期寫實主義と云つていゝものであつた。その社中の重なる人々が皆當時大學豫備門に籍を置いて居た點などから云つても、かくも坪内氏が當時の最高學府卒業者の位置から身をその當時では世人から全然度外視されてゐた小說の創作界へ投じたことの影響を受けたものであることは明だと思はるゝ。

硯友社が團體となつたのは何年頃であるのか正確には今知るを得ないのだが、僕自身が『我樂多文庫』といふその機關雜誌――四六四倍版位の折りツぱなしの新聞形のもの――を手にしたのは、明治十九年以後ではなかつたやうに思ふのである。それはその雜誌の十號とか二十號とかいふやうなのではなく、少くとも印本になつてから僅に數號たつたものであつたやうに記憶してゐる。その號には、何ういふ人々が執筆してゐたのか、それも今はもう何等の記憶もないのだが、唯山田美妙齋の『夏木立』か何かの批評が載つてゐたかと思ふ。硯友社創立の當初には美妙齋もその加盟者の一人であつて、間もなく何かの事情で脫退したといふ譯ではなかつたらうか。

とにかく『夏木立』は美妙齋の短篇小説集のやうなものであつたやうに思ふ。武藏野で討死する武士の話などがあつて、その挿繪か何かのところに『古里に今宵限りの生命ぞと知らでや人の我を待つらん』といふ歌が引いてあつたやうに思ふ。序に一言して置くが美妙齋は、長谷川二葉亭と共に、我國小說界での言文一致の創始者として、歷史的には忘るべからざる人である。二葉亭は『だ』とか『のだ』といふやうな章尾で、一種の文章體を採つたのだが、美妙齋の方は『ます』『です』といふやうな口語體を用ゐたのであつた。

勿論二葉亭も明治の新文壇へは早く出た作家の一人であつて、飜案の趣き――ツルゲエネフの『餘計者の日記』などからの――のあらはな『あぢけなし』といふ小說の出たのは、矢張り明治十八、九年の頃であらうと思ふ。系統――親近した先輩から筋を引くとだけのものだが――から云へば、二葉亭と嵯峨の家おむろは坪內氏の系統に屬する人々と云つて宜しいのであつて、硯友社とは別派であつた。當時不知庵と云つた內田魯庵氏も、坪內氏の方へ近い人で、硯友社とは別派であつたと思ふ。

所で、硯友社では、尾崎紅葉、川上眉山、江見水蔭、石橋思案、巖谷漣山人、春亭九華、などゝいふ人々がその重なる作家で、刑法學者の岡田朝太郎氏も虛心亭といふ號で、その一員であつた。

廣津柳浪氏の加盟は少し遲かつたのではなからうかと思ふ。

『我樂多文庫』は間もなく、四六四倍判位の、赤で落款の形を幾つか刷つた表紙つきの雜誌になつて、數號刊行されたと思ふ。紅葉の二宅basicといふ女學校の習字の敎師が女生徒のうちの美人――少し足りない生れの娘――に懸想するといふ筋のものが載つてゐたことを記憶する。他の小說も大抵男女の學生の生活を題材にしたものであつた。その時分でさへ、紅葉の作物は、その筆致に才氣の溢れてゐる點や、固よりまださう太したものではなかつたが人生知識ともいふべきもの丶、社中の人々よりは幾分多かつたらしく見える點などに於て、一派の主領たる勢を可なりに示してゐたやうに思ふ。

『我樂多文庫』は、やがて『文庫』と改題して、菊判になり、それが又『閨秀文學』となり、『江戶紫』――これは別紙の表紙を用ゐない折りツぱなしの菊判位の大きさの雜誌――になつた。

ところで、淡島寒月氏なんださうであろが、愛鶴軒といふ名で西鶴のことが紹介されたのは『文庫』の誌上であつたやうに思ふ。

井原西鶴の諸作、續いて江島屋其磧(自笑)などの所謂る八文字屋本に、當時の新文壇の人々が接觸した結果が、それ等の諸作から殊に西鶴の忌憚なき人生に對する觀察及び人間の肉慾に關す

る透徹せる描寫からは固よりのこと、その含蓄に富める簡潔――時には遒勁の域にも達したる――の筆致から、當時の文壇に於ける俊秀の人々が學び得たるところの多かつたことは、今更こゝに贅するには及ばぬと思ふ。

さういふ風な所謂る元祿文學が創作家の思想及び文體に影響を及ぼし得る力は、明治二十八、九年頃までは、確にその勢を持ち續けたことは明である。

七

硯友社の『我樂多文庫』によつての旗上後は明治小說界の行路は殆ど坦々たる平路の如き觀があつたと云つて宜しからう。

硯友社の外の文學團體としては、可なりルーズな團體ではあつたらうが、饗庭篁村、森田思軒、條野採菊、前田曙雪（健次郎）、南新二氏などの『新小說』派を擧げて宜しいであらう。

雜誌『國民の友』の發刊が何時頃であつたか明には記憶せぬが、大抵二十年頃であつたらうとは推定せらるゝ。始めは勿論、政治の論議專門のものであつたのだが、直きに發行者德富氏の烱眼は當時長足の進步を示し始めた純文學が我文化の現象の一として決して輕視し得べきものでないのを

看破したる爲めか、それとも、當時の正典派とも目すべき森鷗外、落合直文氏等が、英國流進步派の機關として、靑年間に可なりの勢力を有してゐた『國民之友』の一部をば、文學的機關として活用するの目的を以つて、森氏等の方からして、進んで德富氏を動かしたものであるのかその孰れであるかは、此所では判じ得ないが、森氏、落合氏などの筆になつた譯詩集『おも影』『新聲社韓』といふやうな署名の下に、『國民之友』の附錄のやうな形で出たのは、明治二十二年頃のことかと思うのだが、それには、ゲェテの『ミニョンの歌』バイロンの『マンフレッド』などが譯出されてゐたことを記憶する。

鷗外氏の『しがらみ草紙』の旗上げは、確に此の『おもかげ』を先驅としたものと見て宜しからうと思ふ。

坪內逍遙氏を盟主とし、島村抱月、後藤宙外、水谷不倒等の諸氏に加ふるに、遊擊の意味で饗庭篁村氏を加へた『早稻田文學』の發刊も『しがらみ草紙』と殆ど同時位と見て宜しからう。

小說專門の雜誌『都の花』が金港堂から發刊されたのは、明治二十二年頃であつたらうかと思ふ。初號には、美妙齋の『花車』といふのが卷頭に出て居たと思ふ。二葉亭の『めぐりあひ』、『あひゞき』嵯峨の家の『初戀』が出で、露伴氏の『露團々』が出たのは、此の雜誌であつた。ずつと

後になつてのことであるが、二葉亭の創作小説『浮きくも』が矢張り此の雜誌に出た。

硯友社の諸氏の作物は『都の花』には殆ど出なかつたやうに記憶する。饗庭氏等の據つた『新小說』が春陽堂から出たのは、幾分『都の花』に對抗したやうな意味かとも思はれるのだが、後者の方が新進の作家を紹介する主義であつたやうなので、後者の方がはるかに賑かであつた。そんなところを見ると、前者の執筆者の方では、別に對抗といふ程の心持もなかつたらうかとも思はれる。春陽堂が饗庭氏が讀賣新聞へ書いたものだらうと思はれる短篇を集めた『むら竹』を刊行したのも、大凡その時分であつたらう。

工學士（？）吉岡氏經營の吉岡書店から『新著百種』といふ創作小說の叢書が出たのは、二十二年より遲くはなかつたやうに思ふ。第一卷は、紅葉の『色懺悔』であつた。筋は傳奇的の戀愛物語の部に屬すべきものであつて、當時に於てさへ決して推賞すべき程のものではなかつたが、文體——それも未だ熟したものとは云ひがたかつたけれども——に於て、如何にも若々しい華やかさと、氣鋭の作家に共通な幾分新味の試みの含まれて居る點に於て、若き讀者の心を魅した傾があつて、作家の文壇に於ける位置がこれでよほど確保されたことは疑ひないと思ふ。

『新著百種』の第二卷は饗庭氏の『堀り出し物』であり、第三卷が巖谷氏のものであり、廣津柳浪

氏の『殘菊』はそれから少し後になつて出たと思ふ。これは肺病の女か何かを取扱つた極くヂミな小說であつたと記憶するが、柳浪氏の文壇への出現は大凡此の作の發刊からと見ても宜しいであらう。岡田虛心亭（朝太郎）氏のものもそのうちの一卷として出たのであるが、今はその內容は勿論、表題までも憶ひ出し得ない。

『新著百種』は四六判の、色刷りの紙表紙二百頁かこらの少さい本であつた。『むら竹』も同じ型であつたが、『むら竹』の方が先きであつたやうに今は記憶して居る。その時分には、さういふ型のものが新小說界では稍流行を始めた傾きでもあつたのだ。

八

少し話が後戾りする嫌ひはあるかも知れぬが、明治二十五、六年頃から以後の文壇の新潮流を語らんが爲めには、こゝで是非とも言及して置かなければならぬ出版界の現象がある。

明治十四、五年から始まつた飜刻のことは前に擧げたのだが、明治二十一、二年頃からもまた盛に飜刻が行はれだした。前の時代の飜刻は、文學の方面で云へば、主として、文化、文政頃の小說であつて、先づ民衆に娛樂的讀物を供するといふだけ位の目的を以つてしたに過ぎなかつたのだが

後の時代の飜刻は、出版者が讀書界の進歩に着眼して、謂はゞ日本文學の研究資料となり得るやうなものを供給するといふやうな意味があつたと見做して宜しいと思ふ。固より、なかには稍や稀覯書になつて居るものを飜刻してみるといふやうな考の出版者のあつたことはいふまでもないことではあるが。

それらの有意義な飜刻のなかで、吾々の今も尚記憶して居るものゝうち、第一に擧ぐべきは、神田宮本町の武藝屋といふ小さい本屋から出た近松門左衛門の丸本であるが、これは四六版で大抵一篇が一冊になつて居るのであつたから、極く薄いパンフレツトであつた。大近松のものゝみならず『大塔宮曦鎧』とか『心中二河白道』とか『末廣十二段』といふやうな出雲、海音の曲も二三篇出た。西鶴ものゝ飜刻も武藏屋が一番早かつたと思ふ。『五人女』と『一代男』が小冊型で出た。挿畫はなかつた。

『一代女』は大阪の本屋から出た。其所からは『西鶴置きみやげ』の外に『古著百種』の表題で、其碩の『傾城曲三味線』、『傾城禁短氣』その他の收められたものが刊行された。これは、四六版假り綴ぢの本であつたが、表紙にも何か模様のやうなものがあり、なかには原畫が複刻してあつた。『文反古』も、少しも飾りのない四六版の本で出たが、今出版者を記憶してゐない。

春陽堂からは、紅葉の校訂で『本朝若風俗』(男色大鑑)が出た。無論、四六版の假綴ぢの本であつたが、印刷、校正の具合など可なり丁寧なものであつた。

當時文學青年であつた吾々はさういふ飜刻を通して、所謂る元祿文學に接したのであつた。尤も、熱心な人々は、もう既に原本の蒐集を始めてゐた。物價の安い時分であつたので、今日數百圓を以つてせずば何うしても手に入らないやうなものが、五圓足らずで大威張りで買へたのであつた。現に西鶴の好色本が一部(五冊もの)が五圓だといふのであつたが、その時分にはその五圓が吾々には可なりな金高であつたので、買ひ兼ねたのであつた。今日になつては全く夢のやうな話ではないか。

それでも、島崎藤村君などは、原本を買ひ集めてゐたやうであつた。藥研堀あたり、あれはもう濱町何丁目かになるのであらうが、小柄なコチ〳〵と痩せた爺さんの京屋常七といふ店主の小さい和本屋があつたが、島崎君はそこから古い和書をよく買つたやうであつた。

島崎君から『武士義理物語』の一冊缺けた本を貰つて、今尙保存してゐるが、この本も右の濱町の京常爺さんのうちから出たものではないかと思ふ。

僕自身もその店で、丸本を少し買つたことを覺えてゐる。

日本の古典の飜譯が安い叢書になつて出始めたのも、矢張り明治二十一、二年頃からだと思ふ。博文館から出た『日本文學全書』『續日本文學全書』『日本歌學全書』『續日本歌學全書』――前二者は落合直文、小中村（池邊）義象二氏校訂、後二者は佐々木信綱氏校訂で、各四六版の十二册から成つてゐた――は當時の讀書界に取つては、極めて便利なものであつた。

大阪からであつたと思ふのだが、『湖月抄』――これは二三他の註釋書の加はつたものであつたやうだ――が四六版の五六册本で出た。

『萬葉集略解』――これは菊版――が飜刻されたのも、大凡同じ頃であつたらう。

『百家說林』（正續）――菊版で――十二册が吉川書房から出、『溫知叢書』――四六版で十二册が博文館から出たのは、それより幾らか後になつてである。

俳書の飜刻も幾つか出た。これは四六版で無論洋紙に刷つたものではあつたが、大抵和書の體裁を模したものであつた『芭蕉一代集』『俳諧七部集』はまだそれ程和書型ではなかつたが、『本朝風俗文選』、『俳諧寂栞』、『鶉衣』、『俳諧畸人傳』などは、更紗の帙に入つて居た。

念の爲めに、記して置くが、明治十四、五年の德川文學の飜刻は大抵日本紙であつたのだが――當時の文學的新刊書が大抵日本紙刷りであつたと共に――こゝに云ふ明治二十一、二年頃以後の一

般書籍は洋紙刷りになつてしまつたのであるから、以上に擧げた飜刻書は皆洋紙刷りであつた。此の時代では、餘程特殊な書籍でなくば日本紙には刷らなくなつてゐた。又之を裝釘の方から云つても、前代の文學書の表紙に彩色畫を用ゐるといふやうなことはなくなつて、精々のところで、模樣を描いた表紙を用ゐる位なことになつてゐた。尙、さういふ風な裝釘に進歩を來した結果、クロッスの使用が廣くなり、念の入つた裝釘の書にあつては、前代よりはズツと良質のクロッスが用ゐらるゝと共に、小說書の口繪――これのみは日本紙刷り――に刷り彩色に手數の加はつたものが附けられるやうになつた。尤もさういふ美裝小說は大抵春陽堂から出版されたのであつた。本文なかの挿繪はさういふ譯はゞ高級出版物では最早廢されてゐた。要するに、本文のなかへ幾つも挿繪を入れる代りに、口繪に念を入れるといふ譯になつたのだ。

九

序に記して置くが、春陽堂からは、紅葉の『此のぬし』、篁村の『勝鬨』などを收めた木版刷りの日本紙の叢書、それから紅葉の『七十二文生命の安賣り』綠雨の『かくれんぼ』などを收めたもう少し薄い叢書――これも日本紙の木版刷りが出た。

讀賣新聞が改進黨の機關紙となつた關係上、高田早苗氏が同新聞の幹部になつた爲めであらうと思はれるのだが、同新聞が文學に重きを置くことになり、坪内氏先づ一臂の力を貸し、次いで大學出身者であつた紅葉を社員として聘したので、硯友社の人々が自然讀賣新聞に據ることになつたのは、明治二十三年頃のことであつたらうと思ふ。

因みにいふ。尾崎紅葉、川上眉山、石橋思案（當時は思案外史と署してゐた）の三氏は、硯友社創立の當時は大學豫備門在學であつたのだが、石橋氏は退學し、尾崎、川上の二氏は大學の法科に進んでから、やがて文科（國文科？）へ轉じたのだが、直きに退學してしまつたと聞いてゐる。當時の文學者では、内田不知庵氏と石橋忍月氏とが豫備門に學んだ人であらうと思ふ。内田氏は中途で退學したが、忍月氏は法科に進んで卒業した。山田美妙齋も豫備門にゐたのではなからうかと思ふのだが、これは確には知らない。漣山人（巖谷小波氏）は獨逸協會の出身だと聞いてゐる。

硯友社の諸氏が文壇に於て十分に地歩を占めると共に、その作物發表の壇上としては讀賣新聞を有し、出版書肆としては、春陽堂をその藥籠中に收めるといふ勢になつて來たのであるから、前日の如く『我樂多文庫』その他のやうな意味の機關雜誌の必要はなくなつたのではあらうが、尚硯友社の風を望んでその傘下に集り來たらんとする後進の爲めとでもいふのでもあつたらうか、一、二

の小雜誌が發行された。その一つは『千紫萬紅』といふので、會員組織といふやうな風になつてゐたので、僕は或る日、金富町の石橋思案氏を訪ふて、入會の申し込みをしたことがある。何でも三ケ月分か、六ヶ月分かの雜誌代を持つて行つたと思ふ。誰だか先客が座に在つたやうに思ふのだが、石橋氏から

『何かお出來ですか』

と云はれたことだけは覺えてゐるが、何んな話しをしたのだか、何ういふ風にして、別れたのだか、その邊の記憶になると唯座敷から瞰下する町の眺めのよかつたことの外には何も彼も全く夢のやうに朧氣である。多分さしたる事は語り得ず、又問ひも得せずに引きさがつたに違ひなからう。

尾崎氏との初對面の方はそれよりはズツと明に記憶してゐる。

時は明治二十四年の八月上旬、場所は相州の酒匂の松濤園に於てゞあつた。

親類の者が病氣であつたので、その附添ひに行つて松濤園の離れの二階に泊つてゐた僕は、病人が晝寢のひまに、ゾラの『ナナ』の英譯を持つて、松濤園の母屋の庭の松の根方に腰をかけて、頁をめくり出したが、一寸と一間位離れたところに二十六七位に見える、眼の鋭い、如何にもキリヽと引き締まつた顏だちの若い男が、蹈がんで、砂を握つては指の間から滾ぼし、又握つては滾しゝ

て、如何にも無聊らしい風で居る。着てゐるのは宿の借し浴衣か何かで、別段注意を引くやうなものではなかつたが、締めてゐたしごきは當時の僕のやうな全くの書生には、一寸眼につくものであつた。濃い納戸色か何かの豆絞りであつたが、何うも縮緬ではなく、羽二重のやうなものではなかつたかと思ふ。

『ゾラをお讀みですか?』

と先きから言葉をかけられたので、

『えゝ、面白いものだと聞きましたもんですから、友達四人程で云ひ合せて「ナ、」を四册取つて讀むことにしたんですが、私は今それを讀み始めたところです』

と、答へると、

『それは惜しいことでしたな、同じものをお買ひなさらずとも、皆さんがちがつたものを一册づゝお取りなすつて、交換してお讀みなすつたら、よかつたでせうに』

と、いふやうな意味のことを云つてから、ゾラの作物の話をいろ〳〵してくれた。坪内氏からもゾラの諸作物の話を聞いたのだが、何とかいふ作は斯うといふのださうで、又何とかいふ作は母子の不倫の戀を取り扱つたものだといふやうな話であつたと記憶する。

話しの様子で考へると、その人は文學の知識を可なり豐富に持つて居るらしいのであつたが、何ういふ人であるのか、まだ一寸と見當がつかなかつた――當時はまだ新聞は勿論のこと、雜誌にも文學者の肖像などの出ることはなかつたのだ。

勿論、話はおもに先きからのみ語り續けられるのであるが、それでも、何となく親しみは加はつて行くやうな感は增して行くので、それが如何なる人であるか、此方から聞くか、先方から名乘るかしなければならないやうに、だん〳〵なつて行くのであつた。

此方からも『貴下はどなたですか』とブッキラボウに聞くのも、何だか我殺なやうな氣がしたし先きも又『實は私はかういふ者だ』とぢかゞけに名乘るのも何だか不遜のやうな感じを起すかもしれぬといふやうな遠慮もあつたものか、自分の身の上を暗示するやうなことはなか〳〵云はなかつた。さうなつて來ると、此ちらからは少しづゝ話を進めて、先きの身分を言ひ當てる範圍を次第に縮少して行つて『あなた誰それ君でせう』と云ひ得るやうな點に達することに骨折り、先きは先きで、又少しづゝ此方からさう云ひ得る點に達するのに便利な材料をそろ〳〵と供給しなければならないやうになつて行くのであつた。

文壇の話が始まつた序に、僕は『千紫萬紅』のことで石橋氏を訪うたことを話した。けれども、

それは話の始まつたずつと始めの時なので、その時はまだ先きを誰だとも少しも見當のつかなかつた時であつたと思ふ。

そのうちに、或る新聞から頼まれて、奥州の方へ或る史實を調べに行つたが、その史實に就ての重野（安繹）さんの意見はかう〳〵であつたといふやうなことを、先きから話しだした。

『では讀賣に御關係ですか』

と僕がいふと、先きは

『えゝ、さうです』

と、答へた。

もう大抵分つたやうな氣がしたけれども、まだ何とも云はずにゐた。

やがて、話が西鶴の作品のことに轉じて、西鶴の好色本に淫畫の挿繪のあるものがあつた。それは可なり高價なものであるといふ話もしてくれた。それから、西鶴が作中の人物の肉交に至るまでの描寫の段取りともいふべきものゝ見事なのを激賞した末に、遂にかう云つた。

『西鶴の文中には師匠の西山宗因の俳句が大分使つてあります。私が或る本屋から頼まれて「男色大鑑」の校訂をやつた時にも、方々に宗因の句が使ひ込まれてゐるのに氣がついたので、註でも入

れて置かうかと思つたのですが、私の氣の着かぬのが若しあつては、それもせんのないことだと思つたんでやめました』

共所で、僕は笑ひながら、

『あなたは尾崎さんですね』

と云ふと、先きでも、

『えゝ、さやうです』

と、云つて、快く笑ひ出した。やつと、それで双方とも重荷をおろしたやうに感じたのだ。

その晩、尾崎氏の部屋――母屋の二階の一室――を訪うて、雜談をしたが、尾崎氏はサイフホンのラムネを飲みながら、僕の質疑に答へてくれた。正直正太夫の名で、短文の諷刺を讀賣へ書いてゐた齋藤のことを聞いてみたのだが、

『あれは唯あゝいふ皮肉なことを書くだけの男で、何でもありません』

といふやうな答へであつた。綠雨がまだ眞伎倆を發揮しない時分のことであつたので、此の評はさして無理ではなかつたであらう。

その外の話しでは、越路と綾瀬との優劣論とでもいふやうなことを一寸やつたことを覺えてゐ

る。尾崎氏は、ひどく綾瀬を擧げたが、僕は承服しなかつた。

翌朝になると、病人に附いて箱根へ行くことになつたので出發の挨拶に來た女中頭のやうな女に

『母屋の二階のお客さんに宜しく云つてください』

と頼むと、その女中頭が、

『彼方は一體何ですね』

と云うので、僕は唯、

『新聞に關係のあるエライ人なんだ』

と、云つて置いた。

僕は八月末に東京へ歸つて來ると、職業をさがすのに忙殺され、それからその年の十二月に、高知の私立の英語學校の敎師の口を得て、土佐へ行つたので、尾崎氏を訪ふ機會がなかつた。

一〇

時代は大方飛ぶことになるけれども、序だから、尾崎氏に關する話だけを此所で書き終はつて置かう。

僕はもう一遍尾崎氏に逢つたことがある。

明治二十九年の一月であつたが、川上眉山君のその頃住まつてゐた小石川の上富坂町の家へたづねて行つて、訪なうと、內で『來た、來た』と、云つて二三人の笑ひ聲がする。座敷へ通ると、尾崎氏が年始廻りらしい袴羽織の出で立ちで、戶川秋骨、平田禿木などゝ、笑ひ話の最中であつた。

松濤園では何か事件があつたことは、兼ねて大體川上氏から聞いてゐたのだが、もつとくわしく尾崎氏の口づから聞いてみたかつたので、その話を持ちだすと、

『イヤ、あの時は大しくじりさ』

と、尾崎氏は輕く笑つて、それから、翌朝になつてみると、財布が紛失してゐる。隣りの部屋に何うも怪しげな者が泊つてゐたのだが、そのことを尋ねると、もうとつくに立つてしまつたといふ。實は讀賣新聞のかういふ者だが、勘定は東京へ歸つて送くるまで待つて貰らひ度いと云つたが、宿では承諾しない、それでは昨夜來たむかうの離れの客が、私の身分を知つてゐる筈なんだから、あの人の證明を得て吳れと云つたところが、あのお客はもう立つてしまつて居ないといふ、それで何うにもしやうがないので、持つてゐた時計をかたに置て、宿を出た。といふ話しをして、

『イヤ、その宿を出て來る時なんぞは騙りの面をよく見てやれといはんばかりの風で、家ぢう帳場まで出て來ましたね』

と、云ふ、

『それでね、あんまり癪に觸はつたので記行を書いて、あの宿屋をこツぴどく退治てやらうと思つたんだが、後でこつちの身分を誰れかに聞きでもしたものと見えて、むすこが菓子折を持つてあやまりに來ました。』

と、話を結んだ。

それから、讀賣新聞社の關如來君が折角自分の好みを盡くした正月着が出來後れたので、社の二階か何かに引つ込んで何處へも出ずに居たのだが、着物が出來てくると、早速まんべんなく年始廻りを始めたといふ話をし、

『着物が出來たら、やつさぞ方々廻るだらうと思つてゐたところが、果せるかな、知り合ひを一軒殘らず廻はつてゐる』

といふ口調で、一座を笑はした。

そのうちに、戸川氏が揮毫を頼んでゐたと見えて、

『僕に書けといふのは何ですか』
と云つて、戸川氏が『マアロオ詩集』――昔しの版のマアメエド叢書の分――を出して、これへ願ひますといふと、
『よし、早速書かう』
と、如何にも勢好く早口に云つて、焦茶色のズツクの革鞄のなかゝら、籐巻の筆と銅の墨池を出して、詩集の見返へしへ、
『お目出たいものを書きますぜ』
と、云うが早いか、直ぐすら〳〵と、如何にも達筆に書いて、戸川氏の前へ詩集を軽く突きやつて『狼の人喰ひし野も若菜かな』
と、讀んで聞かした。
遒勁と優美を兼ね具へたクリストフアー・マアロオの詩集の見返しに書いたものとしては、如何にも適切な句だと云つて、戸川氏はひどく喜んだ。
僕は此の時きり尾崎氏に逢ふ機會がなかつた。
右のマアロオ詩集は、平田氏の手もとへ行つてゐて、明治三十一、二年頃、神田明神裏の平田氏

の下宿が火事に逢つたのでその時燒けてしまつたとか聞いてゐる。

此所まで書いて來ると、『新著百種』のなかに幸田露伴氏の出世作と云つて宜しい『風流佛』が入つてゐたことを書き漏らしたことに氣がついた。當時の讀書界は露伴氏のあの作をあの叢書の光りと見なしたのであつた。

博文館から『日本之文華』といふ菊判の雜誌が出たのは、矢張明治廿一、二年頃だらうと思ふのだが、露伴氏の『緣外緣』が載つたのはその紙上であつた。その作は後で『對髑髏』と改題されたのだと思ふ。『五重塔』はもう少し後になつての作であらう。露伴氏は新聞『國會』の社員になつたやうに聞いてゐる。

二

明治二十五、六年頃の文壇は勿論小說が中心であつて、その小說壇の中堅となれるものは硯友社の諸氏であつたのだが、客觀主義に基いて作くらるゝ紅葉氏の小說にあきたらずして、もう少し主觀を以つて讀者に臨み得る文學の他の形式はなからうかといふ風な考を持つた文學青年がだん／＼出來だしたと共に、文學者の評傳とか、作品の批評とか、思潮に對する評論などをもとむる氣運が

讀書界に生じて來た。『早稻田文學』創刊の當時に於て、坪内氏が唱へた『沒理想主義』、これに對して森鷗外氏が『しがらみ草紙』に於てなしたる駁論、さういふ論爭は評論界に非常な活氣を吹き込む効果のあつたものである。坪内氏の『沒理想論』は勸懲主義排斥といふ位の意味のものであつたので、議論の陣立が十分でなかつた爲めに、森氏との取り組みではとかく受太刀の觀なくばあらずであつた。その他森氏が『しがらみ草紙』に據てなしたる諸種の美學的論議は、當時の文壇に取つて多大の刺戟と指導になつたことは疑ひなきところである。

所謂る新體詩即ち新邦詩の曉明期も此の時分であつたと見て宜しからう。

中西梅花道人は專門の新詩人であつたが、專門でない人々の間にも、新詩に對する努力が致され始め、山田美妙齋氏の如き、前記の『おも影』に執筆した諸氏の如き、十分尊重すべき態度を示してゐた。

北村透谷氏の劇詩ともいふべき『蓬萊曲』といふ長篇が刊行されたのは、明治二十五年頃であつたであらう。

第一に擧ぐべきは、前に云つた硯友社の一團、次ぎは、早稻田文學の一團、それから、春陽堂の『新小說』を機關誌としてゐた森田、饗庭、條野氏などの一團、新聞派ともいふべき半井桃水、右

田寅彦、村井弦齋、村上浪六、遲塚麗水などの諸氏、遊星とみるべき內田魯庵、幸田露伴、山田美妙齋、齋藤綠雨――もうその時分には、綠雨の『かくれんぼ』も『油地獄』も出てゐたと思ふ――長谷川二葉亭、嵯峨の家おむろの諸氏、森鷗外氏の『しがらみ草紙』の一團、それから最後には、民友社の『國民之友』の文學的色彩が濃くなつて其所に集まつた山路愛山、人見一太郎、塚越停春樓などの評論家諸氏の一團、先づ大凡さういふ風に分れて居つたと思ふ。

所で、當時の思想界ではまだ基督敎界の人々が新思想家であつたのだから、准基督敎文士と云つて宜しかつた德富蘇峯氏の傘下に集まつた山路氏等の意氣はなか〳〵盛なるものであつたが、當時の基督敎界での花形の觀のあつた巖本善治氏は明治女學校を經營する傍『女學雜誌』を發行してゐて、巖本氏はその雜誌を以つて『國民之友』に並んで、基督敎界の思想兼文學雜誌にまで發達させよう――『國民之友』よりももつと深みのある、もつと情味のある雜誌にしよう――といふ考があつたのだらうと思はれるのだが、明治二十四、五年頃から、基督敎に關係ある若い人々を明治女學校の敎師として迎へ、傍ら『女學雜誌』への執筆を奬勵するやうにしたのであつた。

『文學界』の同人のなかでは、星野天知氏が一番早く明治女學校へ迎へられたのではなからうかと思ふ。島崎藤村氏は巖本氏には少し前から接近して居つたやうであるが、明治二十四年の秋頃から

『女學雜誌』に執筆し——僕の記憶してゐるのは、アデイソンの『ヴイジョン・オフ・マアザ』の譯と、セキスピアーの『ヴイーナス・アンド・アドオニス』を近松振りの淨瑠璃體に譯したるものとであつたが——て居るうちに、明治女學校で教鞭を執ることになつた。所で、島崎氏が二十五年の秋になつて、教師を辭したあとへ、北村透谷氏が入り、二十六年になつて北村氏が退いてから、戸川秋骨氏がその後を襲つたとでもいふ順序かと思ふ。

それはとにかく、二十五年になつては『國民之友』の純文藝に對する態度が極まつた——鷗外氏の創作小説『舞姬』が『國民之友』で發表されたのはその少し前であつた位で、夏期附錄と云つて當時の一流の文人の作を三四篇程集めて載せることはまだ始めてゐなかつたかも知れぬが、何れにしても、純文學を誌面へ取り入れる意向は顯著になつてゐた——のであるから、それに對抗の意味もあつたのであらうが、『女學雜誌』でも文藝欄を豐富にしたし、それが次第に進んで、星野、島崎戸川、平田の諸氏に戸川殘花氏を加はへて、一大活動をしやうといふことになり、矢張り『女學雜誌』の一部をその機關に使うといふ議に始まつて、中頃から別にた新なる雜誌を女學雜誌社から出す方がよからうといふ議になり、最後にはとうたう社名も別にして、發行所をも外に設けることに決してしまつたのだと聞いてゐる。

『文學界』創立の諸氏は、みな一度は基督教信徒であつたのだが、文學をやり出してからは、基督教の信條とか、基督教の道徳觀などの範疇外へ、思想がだん〳〵踏みだして行つて、殘花氏を除いた他の諸氏の書いたものは、『女學雜誌』に載つたものでさへ、既に巖本氏が基督教界の名士である立場からいふと、極めて迷惑なものがあつたらしいので、新たな雜誌發行の時分になつては、尙一層累を巖本氏に及ぼす慮が深くなつたらしかつた。されぱと云つて、巖本氏に遠慮して、おだやかなもののみを書いてゐるといふ氣分なぞには到底なれようはなかつたので、一同『女學雜誌』とは袂別して、『文學界』といふ雜誌を發行することになり、出資と經營とには、星野天知、星野夕影（男三郎）の兩氏が當ることに決したのは、二十五年の末頃であつたらうと思ふ。

雜誌『文學界』の初號が出たのは、明治二十六年の一月の末だと思ふのだが、同人の重なる人々は、この結社は、單なる文藝の創作を目的とするのではなくして、文藝をとほして、精神界への突入、物に生きずして靈に生きる努力といふやうなことを主義とし、主張するものであるといふ意氣であつたやうに見える。

島崎藤村君は當時は古藤庵無聲といふ號であつたが、同君は不意に、同じ年の二月に、高知にゐた僕のところへたづねて來て、『文學界』發行の主旨や、藤村君自身の藝術及び人生に對する態度を

詳細に物語つてくれた。

露西亞の作家アレクサンドル・クウプリンの評傳を見るといふと、その小說のなかに、『今日までに王國と王があつた。けれども彼等のものとして殘つてゐる遺跡は唯沙漠の風のみである。多くの長い無殘な戰ひがあり、その終りには、將師の名が星のやうに輝いた。けれども、時が彼等の記念をこと〳〵くかき消してしまつたけれども葡萄園の哀れな娘と大なる王との戀は、決してかき消されずに、常に人間の心のうちに生きるであらう、何となれば、戀は眞正に美くしいからである。何となれば、戀するところの有らゆる女は女王であるからである。何となれば、彼女は死よりも強いからである』

といふ言葉があるといふのだが、藤村君のその晩の言葉が餘程それに似たものであつたことを記憶する。

『文學界』の始めのうちは、島崎君は隨分よく書いた。初號から二三號は確に續いた『秘曲琵琶法師』といふ詩――一行十七字のもの――から同じく劇詩の『茶のけむり』『朱門のうれひ』外に『かたつむり』『馬上人生を懷ふ』『刀工堀井胤吉』の如き散文といふ風に、驚くべき健筆であつた。けれども論爭家としては、北村透谷が最も世人の注目をひいた。山路愛山氏の『文學は人生に相

涉るを要す』といふ、文學功利主義、物質主義の論議に對して、北村君が駁擊を加へた『人生に相涉るとは何の謂ぞ』といふ論文などは、今日これを見ても、唯少しく用語が古いと感ずるのみで、尙その力は少しも失つてゐないものであると思はざるを得ない。

愛山君が、文學は事業なり、何となれば、第一、爲すところあるが爲めなり、第二、世を益するが故なり、第三、人生に相涉るが故なりと云ひ、文章の事業たり得ざるものゝ條件を擧げて、第一空を擊つ劍の如きもの、第二、空の空なるもの華辭妙文の人生に相涉らざるものと云ひたるに對する駁論のうちに、北村君の次のやうな言がある。

『極めて拙劣なる生涯の中に尤も廣大なる事業を含むことあり、極めて廣大なる事業の中に尤も拙劣なる生涯を抱くことあり、見るを得る外部は見るを得ざる內部を語り難し。盲目なる世眼を盲目なる儘に睨ましめて、眞摯なる靈劍を空際に擊つ雄士は、人間が感謝を拂はずして恩澤を蒙むる神の如し、天下斯の如き英雄あり。爲すところなくして終り、事業らしき事業を達することなくして去り、而して自ら能く甘じて自ら信じて、他界に遷るもの、吾人が最も多く同情を表せざるを得ざるところなり。

吾人は記憶す、人間は戰ふ爲めに生れたるを。戰ふは戰ふ爲めにあらずして、戰ふべきものある

が故に戰ふものなるを。戰ふに劍を以てするあり。筆を以てするあり。戰ふ時は必ず敵を認めて戰ふなり。筆を以てすると劍を以てすると戰ふに於ては相異るところなし。然れども、敵とするものゝ種類によつて戰ふものゝ息を異にするは其の當なり。戰ふものゝ戰の異なるによつて勝利の趣も亦た異ならざるを得ず。戰士陣に臨みて敵に勝ち、凱歌を唱へて家に歸る時、朋友は祝して勝利と云ひ、批評家は評して事業と云ふ。事業は尊ぶべし。勝利は尊ぶべし。然れども高大なる戰士に斯の如く勝利を携へて歸らざることあり。彼の一生は勝利を目的として戰はず、別に大に企圖するところあり。空を擊ち虛を狙ひ、空の空なる事業をなして、戰爭の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。

斯の如き戰は文士の好んで戰ふところのものなり。斯の如き文士は斯の如き運命を委ねてあるなり。文士の前にある戰は一局部の原野にあらず。廣大なる原野なり。彼は事業を舁し歸らんとして戰場に赴かず。必死を期し、原頭の露となるを覺悟して家を出づるなり。斯の如き戰場に出て斯の如き戰爭をなすは文士をして兵馬の英雄に異ならしむる所以にして、事業の結果に於て大に相異なりたる現象を表はすも之を以てなり』

所で、此の一節は、今にして思へば、透谷君自身の數奇な生涯を說明したものゝやうになつてし

まつたので、今日これを讀んでは感概いとゞ深きものがある、明治二十六、七年頃は、まだ出版界も讀書界も極めて狹いものであつて、新文學の師徒が唯一枝の筆のみで生活しようといふには、實に困難な時代であつた。妻あり、子ありといふ透谷君の生活上の苦心は察するに餘りがある。北村君は外、には思想の爲に戰ひ、內にあつても生活の爲に戰はなければならなかつたのであらう。僕は北村君の夭折をば、北村君のさういふ苦しい戰いの爲の疲憊の結果と思はざるを得ない。

二

平田禿木君は『文學界』での花形の一人であつた。藝術の技巧の微細な點にまで感觸が及ぶのであつた銳敏な感覺の持主であつた禿木君の、當時の文壇の諸作品に對する批評は、文界の注意をひくことが少くなかつた。『西洋料理と日本料理とを一緒に食つてヘドを吐いたやうなものだ』と云つた尾崎紅葉氏の評は『文學界』全體にあてたものだか、禿木君の評論をさして云つたものだか、今は記憶しないが、『三人妻』か『隣の女』であつたか、何か新刊を評してくれといふ手紙をわざ〳〵禿木君のところへよこしたことがあつた。

柿色の太い線で緣を取つた大きい封筒――確に半紙の幅より少し長い位の竪で、橫幅も四寸位は

あつたらうと思ふ――であつたのだが、あとになつて、その話しを川上眉山君にしたら、尾崎氏は原稿を横に折つたのみで封じることができるやうにといふので、そんな大型の封筒をこしらへたといふのであつた。

硯友社の人々は、皆並みの半紙の下へ罫を引いた紙を入れて書くのであつて、罫線のある原稿紙は用ゐなかつた。勿論、原稿紙は一般に半紙若くは唐紙に罫線を印刷したものであつたのだから、皆毛筆で書いたことはいふまでもないであらう。

樋口一葉君が『文學界』に作を載せ始めたのは、二十六年の二月の『雪の日』からであつた。一葉君の處女作は二十五年の春に、半井桃水氏主宰の雜誌『武藏野』に載つたといふのだが、僕の見た一葉君の作は、二十五年の秋頃に『都の花』に出たと思ふ『埋れ木』であつた。その次ぎが同じ雜誌に出た『曉月夜』であつた。

『雪の日』も、その後で出た『琴の音』もさして、文壇の注目に値ひする程のものではなかつたのだが、二十七年になつてから『文學界』へ載り始めた『闇夜』からは、一葉君の筆が可なりに自在に動き始めた。『花ごもり』にも、後の名作の光となつたやうな鋭い筆つきがところ〴〵見えだして來てゐたのだがその作風の大體が本當にきまつたのは、二十七年の暮に出た『大つごもり』からで

ある。

二十六年の夏から翌二十七年の春位までは、一葉君の大音寺前時代であつたのだ。一葉君が菊坂町の家を捨てゝ、一時下谷龍泉寺町へ移つて、荒物駄菓子といふやうな小あきなひを始めたのは、自分の文學的才能に對する信念が更にできて居なかつた爲めであることは明である。僅に二年後位にあれ程までに優れた賦才を發揮し得た一葉君にさへ、已れを信じ得なかつた時代が直ぐその前にあつたといふのは、餘程面白いことだと思ふ。一つは、文學が職業になし難い時代であつた爲めもあるには相違ないのだが、前代の人の方は概して、今の人々よりも、己れを信ずることが薄かつたやうでもあるのだ。一葉君の傑作『たけくらべ』は二十八年の春頃から『文學界』へ載り始めたのだが、廣くそれが世に知られて、鷗外、露伴氏等から激稱さるゝに至つたのは、二十九年になつて全部が一遍に『文藝倶樂部』に再掲されてからであつた。勿論、それは、一葉君の『にごりえ』と『十三夜』が前の年の秋に同じ『文藝倶樂部』に載つてから後のことであつた。

一三

二十六年の八月頃になると、その年の始めに東京を出たきりで、近江に滯在してゐた島崎藤村君

が東歸することになつたので、透谷、秋骨、禿木君などが、東海道吉原まで出迎へに行つた。藤村君の『春』が其所から筆を起してあることは、人の知るところであらう。

一行は元箱根の靑木といふ宿屋まで來て、其所へ藤村、秋骨の二君だけが殘つて、月末近くまで滯在してゐた。高知の學校をやめて歸つた僕が兩君をたづねて行つたのは、その月の十日頃であつたらうかと思ふ。

兩君とも學校時代は極く眞面目であつて、うつかり女の話などをしやうものなら、顏をしかめられさうに思へた位であつたが、しばらく振りで元箱根で逢つてみるといふと、さすがに猥談をするまでにはなつてゐなかつたけれども、平氣で『艶福』などといふやうな言葉を口にするまでに、兩君ともさばけてゐたので、一寸勝手がかはつて少し瞠若たらざるを得なかつた。

『文學界』へ僕の作を載せて貰つたのは、二十六年の十一月號からで、それは『酒匂川』といふ極めて幼稚な長詩であつた。その次ぎには、『想海漫渉』といふ論文と感想文との合ひの子のやうなものを載せて貰らひ、翌年の一月號位には『片羽のをし』といふ小說めいたもの、續いて『流水日記』といふこれも先づ小說といふよりほかなかりさうなものといふ風に、續々拙劣を極めたものを載せて貰らつた。

けれども、二十六、七、八の三年間位は誰も彼れも、文壇へ足を踏み込んだ當座であつたので、とにかく熱心だけは十分にあつたのだ。不才僕の如きさへとにかく熱の籠つたものだけは書き得たのだ。その時分の作物を今日若し眼先きへ突きつけられたら、全體としてのその拙劣さに冷汗背をうるほすことになることは必せりだとは思うけれども、部分的に云へば、今日ではとても書けぬやうなところが一二ヶ所位はどうもありさうな氣がするのだ。

まして、他の才分多き人々の當時の作などのうちは、沿革的の資料としては勿論のこと、作そのものゝ價値から云つても、保存に堪ゆるものが少くなからうと思ふ。全集のなかへも何も入らずじまひになるのは、如何にも惜しいと思うのだ。

支那との戰爭の後を受けた二十八年頃からは、文壇の勢がます〳〵盛になつた、とにかく出版界だけでも、活氣を帶びて來た。

博文館が『文藝倶樂部』と『太陽』を出し始めたのは、その頃からであつたであらう。前者の卷頭には、川上眉山君の『大盃』が乘り、後者の小說は紅葉氏の名で『取り梶』が出た。これは既に『豫備兵』と『義血俠血』の作者として、批評家の注目をひいてゐた泉鏡花君の作だと消息通人間には認られてゐた。

その前から『文學界』に加はつた上田敏君が、文科の選科へ入學した戸川秋骨と共に、大學の若い文士の間に勢力を持ちだしたのもこの頃からであつた。

もうその頃には、正岡子規氏の俳諧の結社ができてゐたらうと思ふ。その社中に加はつた大野洒竹氏は、秋骨君の從弟であつたといふ關係で、『文學界』の同人のやうにもなつてゐたのであつた。

尾崎紅葉氏は『三人妻』の長篇から、『心の闇』、『隣の女』といふ風に續々尊重すべき作品を公にして、當時の大家たる實力を十分に示してゐた。

露伴氏の『新葉末集』は何うであつたか今一寸確言し得ないが、とにかく、氏の文壇の重鎭たる位地も動かしがたくなつてゐた。

森氏の『めざまし草』に集まつた人々は、露伴、綠雨、篁村の諸氏であつたのだが、何にしろ、當時は既に坪内氏と共に文壇の元老格の位地を占めてゐた鷗外氏の威力は偉大なるものがあつた。

年月などの不正確であることや、前後したところなどもありさうなことなどは、殘念であるが、本も何も殆ど見ずに唯思ひ出す儘を書いてみるといふ此の回顧記のことであるのだから、さういふ不正確な點もまた一興かと思ふのだ。

二、明治時代の閨秀作家

上

明治文壇への女作家の出現は大凡何時時分であつたらうか、手許には今何等の書類もないのだから、何とも云ひやうはないのだが、無論男の作家の出現よりは少し遅いことは確であつて、何うしても二十二年位から後のことだとは云つてよからうと思はれる。

年代は勿論確ではないが、木村曙女史などが早い方ではなかつたらうか。此の人は木村莊太、同莊五、同莊八君などの姉さんのやうに聞いて居る。尾崎紅葉君の門下ではなかつたらうかと思ふのだが、何ういふ作物があつたのか、今一向に記憶がない。唯讀賣新聞などでその人に關する消息を讀んだことだけは、朧氣ながら覺えて居る。此の人は若くして死んだらしい。莊五君などは覺えて居らぬやうだ。

その次ぎには、田邊花圃女史卽ち今の三宅龍子君の名を聞いた。同君の『藪鶯』が坪内大人の推

薦的序文つきで發售されたのは、これもはつきり何時だかは記憶に止まつて居らぬが、二十四年頃でゞもあつたらうかと思ふ。

その次ぎには、小金井きみ子、若松賤子――前者は故鷗外大人の令妹で、醫學博士小金井精良氏の夫人、後者は、當時基督教會の名士で教育家であつた巖本善治氏の夫人――の兩君ぐらゐな順にならうかと思ふけれども、世間では此の兩君に就ては、明治二十八年秋の文藝俱樂部の『閨秀小説號』なるものが出るまでは、餘り多くは知らなかつたらうと思ふ。兩君のものは大抵飜譯物であつたやうに思ふ。何か創作があつたかも知れぬが、僕などの記憶には止まつてゐない。前者の筆になつたものは『しがらみ草紙』に現はれ、後者のものは『女學雜誌』に現はれたと思ふ。

田澤稻舟女史の名を吾々が聞いたのは何時頃であつたらうか。大抵明治二十六七年頃であらう。山田美妙齋氏に結婚しないうちに既に幾分の名聲はあつたのではなからうかと思ふ。前記の『閨秀小説號』であつたと思ふのだが、稻舟女史の『白薔薇』とか何とかいふ作が出てゐた。今はその梗概さへ記憶しないが、唯そのなかに、男が女に對して魔睡劑を用ゐる條下があつたので、女作家としては、可なり大膽なことを書いたものだといふので、當時の人々の噂に上ぼつたことだけは記憶してゐる。けれども、小説そのものは、當時の標準から見ても、餘り藝術的に完備したものではな

かつたやうに覺えて居る。無論そんなにくわしい寫實的なものでもなかつた。

稻舟女史はもうその時は、美妙氏とは別れて居つたのではなからうかと思ふ。此の人は、秋田か何處かのお醫者の娘さんであつたといふ話であつた。自殺したのは、その『白薔薇』とか何とかいふ小說が出てから間もなくであつたらうと思ふ。

當時の世評では、美妙が稻舟女史との別れ方が無情であつたといふのであつて、これが爲めに、美妙の人氣はすつかり落ちてしまつた。大橋乙羽の話では、美妙齋のものを載せると承知しないぞといつたやうな脅迫狀が博文館あたりへは盛んに舞ひ込んだので、雜誌へ美妙氏のものを載せるわけにいかなかつたといふのであつた。

當時の『早稻田文學』には――ほかの雜誌も無論さうであつたが――美妙の不德なるものを大に攻擊した短評のやうなものが出た。平田秀木がそれに對して『わけ知りの坪內さんもいらつしやることだし、さうまで美妙をやつつけなくてもよからうぢやないか』といふやうなことを『文學界』の月評欄へ書いたところが、早速翌月號で『文學界のやつ等はけしからん』ことをいふ。あゝいふ不德が見のがせるか。あれを何とも思はぬやうでは、文學界派の者どもの道念の存在が疑はしい』といつた意味のお叱りを蒙むつて、一同大に閉口した。

それから少しあとになつてからだと思ふのだが、川上眉山君から、山田氏のおつかさんといふのは、なか〳〵行儀作法のことなどのやかましい人で、山田氏の朝寢などにも小言をいふのださうだといふ話を聞いた。山田氏と田澤女史との絕緣は實際已むを得なかつたのであらう。

僕等は事情を――唯世間話で聞いただけで――直接何も知らなかつたので、何もいへなかつただけであつたのだ。

北田薄氷女史の作も前記の『閨秀小說號』に出て居つたと思ふ。此の人は日本橋の辯護士北田正董氏の娘さんで、紅葉門下であつたと聞いて居つた。後に畫家梶田半古氏に嫁したのも、紅葉氏などの媒酌ではなかつたかと思ふ。

大塚楠緒子――文學博士大塚保治氏夫人――の作も何か『閨秀小說號』に出て居つたらうかと思ふ。此の人は明治女學校へ通つて、透谷、藤村、秋骨などの人々の講義を聞いたのではないかと思ふ。

北田女史は餘り作を遺さずに夭折したけれども、大塚女史の方は割合にあとまで生きて居つたためもあるのだらう、が可なりな量の作品を遺して居ると思ふ。大塚女史の逝いたのは、或は大正へ入つてからではなかつたらうか。明治四十一二年の頃、一度夏目漱石君のところの新年會で見かけた

ことがある。

『閨秀小說號』では、若松賤子女史の『小公子』が大分評判であつた。小金井女史のものも可なり長い飜譯ものであつたやうに思ふ。

中

以上、まことに取り留めもない話で、こんなことなら、今日多念に當時の新聞、雜誌などを調べられる人々の方が、よつぽど確なことを書かれることゝ思ふのだが、僕としてはこんなこと位しきや知らないのだから、しかたがない。

樋口一葉女史以外の古い女作家のことで、僕の今端的に思ひ出せるものはこんなものであるのだが、一葉女史のことになれば、可なり詳細に書き得る。それは、女史はなか〳〵くはしい日記を遺して居るのだから、女史のこと――殊に作家となつてからのこと――を書くには、あの日記を拔き書きさへすればいゝからなのだ。

此頃の何處かの雜誌に『文學人國記』といふやうなものが出て居つて、それには樋口一葉は甲州の人だと書いてあつた。けれども、樋口女史は明治五年に麹町區山下町で生れたのみならず、一度

も甲州へは行つたことがなかつたらうと思はれる。
樋口女史の父母は甲州の鹽山から一里程山の方へ入つた大藤村の人であつたが、侍になる積りで夫婦一緒に安政年間に江戸へ出て、お父さんの方は旗本菊池家、お母さんの方は同じく稲葉家へ奉公して、間もなく與力の株を買つて、八丁堀衆に加はり、幕臣となり、維新後東京府の役人となつて、前記の山下町の官舎に居て、其所で一葉女史が生れたのだと聞いて居る。だから、齋藤綠雨が全集の卷頭に序したやうに一葉女史は東京の人なりと云ふ方が宜しからうと思ふ。昔は三代住まはなければ江戸ッ子ではないと云つたさうなんだが、東京になつてからは、二代位で東京ッ子でよからうではないか。
第一、『人國記』などゝ云つて、唯生れた場所ばかりで、同じ日本の人間を一樣に分類することが何の意味があるのであらうか、現に僕などは土佐人といふことになつて居るのだが、土佐で生れたには相違ないにしても、土佐を出たのは十歲の時で、東京の生活の方は何うしても四十年以上になる。その四十年の方へは何等の考慮も拂つてくれずに、十歲までしきや暮らして居らなかつた土地の方ばかりを重い關係に見られるのは、ヘンなものであると思ふ。さういふ例は外にも幾らもある。戸川秋骨君なども肥後人となつて居るのだが、これは、父祖からして定府で、唯維新後一寸藩

地へ引き篭つて、其所で秋骨君が生れ、その後直きに東京へ定住してしまつたのだから、殆ど東京人と云つていゝ位である。

さて、話を戻して、一葉女史のことをいふことにするが、女史は若い時分に父を失ひ、兄を失つて、戸主になつた。それは女史の十八の時であるといふのだ。教育といふのは、それまでに、小學校――池の端仲町文海小學校――揚げ出しの筋向う位の池に面したところにあつた私立小學校であつたと思ふ――を先づ卒業したと云つて宜しいのであらう。

日記に據ると、明治十九年八月に、小石川安藤坂の歌人中島歌子の門に入つた。だから、一葉女史の教育は國文教育を受けたと云つていゝのである。今全集に入つてゐる女史の日記は、二十四年の四月十一日から始まつてゐる。さうすると、それは一葉女史の二十歳の時であるのだが、それにしては、雅語の驅使などいかにも自由で、可なりに馴れた文體である。教育の具合も無論ちがひはするが、今の二十歳位な女の人などにあれだけの文章――雅文――の書ける人は全く絶無であらう。當時でも何うであつたらうか、兎に角所謂眞の才媛であつたにちがひない。

それまでに、一葉女史は文化、文政からしての德川期の和かい文學、當時の新聞、單行本などで小說といふやうな讀書は可なりやつて居たのであらう。

生活の爲めといふ意味もあり、また學問的の仕事に就くといふ意味もあつたであらうが、一葉女史はその時分から小説を書き習ひはじめようと思ひ立つた。野々宮きく子といふ友達が、半井桃水氏を知つて居つて、紹介してくれたので、一葉女史が四月十五日に始めて、桃水氏を芝南佐久間町の寓居に訪問して、入門したことは、日記にくわしく書いてある。その時は、女史は書いて持つて行つた小説一回分を批評を請ふため置いて來た。

同じ月の二十一日のところには、桃水氏に見て貰らうために、前の小説の續稿を五回書いたとある。此の小説は今全集のなかに收められて居る題のない小説らしいのである。二十二日には、その小説を持つて半井氏のところへ行つたところが、半井氏から左の如く云はれたといふのだ――

『先の日の小説の一回新聞にのせんには少し長文なるが上に、餘り和文めかしき所多かり、今少し俗調にと教へ給ふ』

一葉女史の筆になれるものは、始の方のもの、即ち『おほつごもり』――二十七年十一月頃の作――以前のものは、小説でも隨筆でも皆此の和文めかしきところ即ち雅文調が勝つて居ることは人の知るところである。殊に『朧月夜』、『五月雨』、『經机』といふやうな作は、著しく雅文脈のものである。日記でさへ、二十七年位までのところは、雅文調が強くなつて居るやうに思ふ。

四月二十五日には、桃水氏から小說のことで相談があるから、表神保町の俵屋といふ下宿屋へ來てくれといふ手紙が來たので、一葉女史は二十六日の午前に、震災前まで南明倶樂部のあつたところの裏あたりの下宿屋に桃水氏を訪問した。日記に洽集館とあるのは、南明倶樂部になる前の勸工場である。後にその勸工場は燒けて、その跡へ南明倶樂部が建つたのだと思ふ。

五月十二日に桃水氏は麴町區平河町へ轉居したので、一葉女史は翌十三日に桃水氏を訪うて居る。

さういふ風にして、半井氏との交際が親密になつて、二十五年の二月四日には、雪の日に半井氏を平河町に訪うて、長く談話した。明治二十六年の一月頃になつて書いた『雪の日』――『文學界』所載――はその時の氣分を材にして書いたものらしく思はるゝ。

同じ月の十三、十四日のところには、一葉女史が小說を書いたことが出て居る。これは多分、女史の作ではじめて活版になつた『闇櫻』のことであらう。

三月七日には、一葉女史は半井氏を訪問して、半井氏等の同人雜誌『武藏野』創刊の前景氣の話などを聞いてゐる。このあたりの記述の調子は今から見ると、如何にも古風で、當時の文學者――謂はば舊派の人々――の口調などがよく出てゐて、甚だ面白いと思ふ。

一葉女史の日記の二十四、五年のところには、圖書館へ通つたことが度々出てゐる。その時分は上野より外に公開の圖書館はなかつた。一葉女史は圖書館へ通つて勉强をしてゐた。圖書館へ女はめつたに行かない時分であつた。

三月二十八日にも小說を書いてゐる。これは半井氏の紹介で、當時あつた『改進新聞』といふのへ出さうといふのであつたらしい。これは『玉だすき』で、淺香のぬま子といふ名で出たものださうだ。

六月頃になると、半井氏との交際に關し、知人間で飛んでもない噂が始まつたので、中島氏とも相談の上で、一葉女史は桃水氏との交際を斷つてしまつた。此の時分には、半井氏が左の如く云つて——

『君が小說のことよ、さま〴〵に案じもしつるが、到底繪入の新聞などには向き難くや侍らん、さるつてをやう〳〵に見付けて、尾崎紅葉に君を引合せんとす、かれに依りて讀賣などにも筆とらなばとく多かるべし、又月々極めての收入なくば經濟のことなど心配多からんとて、是をもよく〳〵計らはんとす……』

さういふ風に一葉女史を紅葉氏に紹介する筈になつてゐたのだが、右の絕交のために、一葉女史

の方から紹介を斷はり、又外のつてからも尾崎氏へ行くのは、半井氏に對して義理が惡い譯であつたのだから、そのまゝになつてしまつて、一葉女史は紅葉氏には逢はずにしまつたのであるが、此の時尾崎氏に逢つて居つたならば、一葉女史はもつと早く文名が出たらうと思はれる。

下ノ一

更に又日記を參照すると、一葉女史は九月十五日に小說『うもれ木』を脫稿して、田邊龍子氏のもとまで持つて行つた。これは、龍子氏の紹介で小さい本にしようといふ積りで本町三丁目の金港堂へ送らうといふのであつた。此の小說は陶器畫工の妹を主人公にしたものであるのだが、日記の二十四年の九月分あたりのところを見ると、花瓶の圖樣を書き留めたものがある、一葉女史の二番目の兄さん虎之助氏—が陶器畫工であつたので、それから聞いて書きとめたものに違ひないと思ふのだが、『うもれ木』のなかにはその圖樣及び燒きつけ方がすつかり使つてある。同じ月の二十三日に甲州の『甲陽日報』といふのへ小說を書いてやることにしたいといふ記入がある。脫稿したのは二十四日頃らしい。これは『經机』なのであらう。

十月二日のところに左の如くある。

『田邊君よりはがき來る。うもれ木一と先都の花にのせ度よし金港堂より申來りたるよし、原稿料は一葉二十五錢とのこと、異存ありや否やとなり、直ちに承知の返事を出す』

日記には何も書いてないやうであるが、大凡十月ぢう位に小說をもう一つ書いたらしく思はる。これは二十六年になつて『都の花』に出た『朧月夜』である。

十月から暮へかけて、金のことでひどく頭を惱ませて、原稿料のとゞくのを鶴首して待つてゐる有りさまが、日記の諸所で窺はれる。殊に十二月二十七、八日あたりの『朧月夜』の原稿料を受取るあたりが甚だ面白い。其所の記述には後年の『濁り江』の材料になつたかと思はれる一節がある。それは稻葉こう子の貧居を訪うた記述である。『濁り江』の源七佗住居のくだりと倂せ讀むべきものであらう。

二十九、三十兩日は『必死と小說に從事す』とあり、二十六年の一月二十日のところには『小說雪の日したゝめ終る』とある。

一葉女史のその後の生活は所謂る生活難に對する惱みであつて、直接文學に關することは餘り日記には表はれ居らぬやうである。

二十六年七月になつてからは、一葉女史の一家は小あきないを始めることに相談をきめて、十五

日から家さがしをやりだした。方々見て廻はつた末に、十七日に至つて、大音寺前――下谷區龍泉寺町三百六十八番地といふのに家を見つけた、それは、日記によれば、間口二間、奥行六間ばかり造作はなかつたが、店は六疊で、五疊と三疊の座敷があり、敷金は三圓で、家賃は月壹圓五拾錢であつたといふのだが、今日の相場からいふと、全く嘘のやうな話である。場末であつたにしても、何しろ安いものであつたと云はなければなるまい。

樋口家の人々がその家へ引き移つたのは、同じ月の二十日である。龍泉寺町が吉原遊廓の裏手であることはこゝにいふまでもなからうと思ふのだが、念の爲めにこゝに附記して置く。商なひでは荒物及び小兒のおもちや、駄菓子といふやうなものであつたので、一葉女史自身神田多町（たちやゝうと讀んで頂きたし）へ買ひ出しに行つた。

日記のこの邊の記述によると、當時の細民の生活狀態、物價等の一班が窺ひ得られて如何にも面白い。

樋口家の人々は二十七年四月一杯まで龍泉寺町に住まつてゐたのであるが、その時分の作物は二十六年十一月頃に出來た『琴の音』――『文學界』への寄稿――と二十七年の二月十八日、十九日に四回分二十枚ばかり書いたといふ『花ごもり』――同上――だけであつたやうだ。尤も此の『花ご

分らない。

もり』の原稿は龍泉寺町に居る間書いたらしく思はれるのだが、それが何時のことだか、日記では

樋口家の人々の本鄕丸山福山町四番地へ引き移つたのは、二十七年五月一日であつた。『家は本鄕丸山福山町とて、阿部邸の山にそひて、さゝやかなる池の上にたてるがありけり、守喜といひしうなぎやの離れ座敷なりしとて、さのみ古くもあらず、家賃は月三圓也、たかけれどもこゝとさだむ』とある。六疊二間に四疊半があつて、池があり、庭があつて、月三圓、それでも少し高いのであつたといふ時代なんだから、當時の物價の大體は窺ひ得られやうと思ふ。

此の家が一葉女史終焉の家である。しかし、家そのものは、明治四十三年の秋隣りの山の崖が崩れてこわれてしまつたので、今は存在して居らぬ。

一葉女史が福山町へ越してから、最初に書いたのは、小說『やみ夜』らしい。これも『文學界』へ出たものであるが、書き始めは何時であつたのか、日記にはない。唯七月十九日のところに『小說やみ夜の續稿いまだまとまらず、編輯の期近づきぬれば心あわたゞし、此夜馬場孤蝶子のもとにふみつかはし、明日の編輯を明後日までのばし給はらずやと賴む』とあるのみである。二十二日のところには『今朝やみ夜の續稿郵送』とある。

二十七年七月二十三日以後の日記がないのであるから、何時だか分らないが、とにかく十月頃に『おほつごもり』を書いたらしい。一葉女史の文體も考想もこの作で一轉機を來たし、要するに、驚くべきほどうまくなつたのであるが、これは次第に筆が熟してさうなつて來たのが主因であるには違ひないのだが、一つは、その夏頃から一葉女史が西鶴の好色本などを可なり丁寧に讀み始めたことは、それ等の文體等の變化に餘程の影響のあつたことだと云つてもよからうと思ふ。

一葉女史の傑作『たけくらべ』が何時起稿されたものだか、日記が前記の通りないのだから、確なことは分らないのだが、二十七年の十一月か、十二月に起稿したには違ひないのだ。あの作は人の知る通り、材を大音寺前あたりの子どもの生活に取つたもので、吉原の裏手といふ極めて特殊な場所の人生を描寫した點に於て、記憶すべきものがあるのだが、あゝいふものを書いてみようといふ考は、大音寺前居住の時代にも起つたものとは推定し得られやうと思はるゝに拘らず、それに關することは日記のなかにもなければ何等の記錄も樋口家には遺つて居ない。尤も、一葉女史は作に關する思ひつきとか材料といふやうなものを手帳とか紙ぎれとかいふものに、心覺えに書きとめて置くといふのではなかつたやうであるのだから『たけくらべ』に就ても日記のなかにそれに關して書いたところがない以上、外に記錄がないのは敢て怪しむに足らざることである。但し『たけくら

べ』のなかの或る章句などに就ては、その材料が大音寺前時代の日記のなかにあることは、誰でも氣づくことであらうと思ふ。

唯、あの作の始めの方の三枚ばかりのところの下書きが樋口家に遺つて居る。そのことに就ては、眞筆版『たけくらべ』の末の方へ僕が書いて置いたが、題は『雛鷄』といふやうになつて居つたかと思ふ。文章はあの作の始めとさう違つては居らぬ。

『たけくらべ』は『文學界』の一月號位から十月か、十一月號位まで完結したと思つて居る。『文藝倶樂部』へ出たのは、その翌年の一月頃である。

下ノ二

二十八年頃になつての一葉女史の作は『太陽』へ出た『ゆく雲』であるが、これに就ては日記のなかに何も記載はないけれども、三月頃に書いたものであらうと思ふ。

『濁り江』は同年の九月の『文藝倶樂部』へ出たのだが、日記六月十日のところに、『小說著作に從事す、全篇十五回七十五枚ばかりのものを作らんとす、いまだ筆おもふまゝに動かで……』とあるのだが、これが或は『濁り江』になつたのではなからうか。これは、福山町の一葉女史の住居の近

邊は銘酒屋の巣窟であつたので、さういふ家に居た女の一人をモデルにして、あのあたりの人間の生活を描寫したものである。

その次ぎの作は『十三夜』で、これと『闇夜』――此の方は二度の勤――とが、『文藝倶樂部』の『閨秀小說號』へ出たのであつた。その時には、旣に『濁り江』で讀書界の注意を可なり喚起して居つたので『十三夜』が出ると、一葉女史の名は可なり擧つたのだと思ふ。

二十八年ぢうでの作では、此の外に『軒もる月』――四月頃の作か――と『うつせみ』――八月頃の作か――とがあるのだが、『軒もる月』は、齋藤綠雨が讀賣に載せて居た『門三味線』を急に中止したので、一葉女史がそのあとを埋めるために大急ぎで徹夜で書いたものであつたと思ふ。『うつせみ』は、一葉女史の住居の隣りへ狂女が引越して來て、時々女史の家へなども飛び込んで來たさうであつたが、それからヒントを得て書いたものであつた。

一葉女史が博文館の通俗百科全書のなかの『女子書簡文』を書いたのは二十九年の始め頃であつたらうと思はるゝ。

日記の七月の十二日のところに『此ほど博文館の義捐小說中に隨筆やうのもの書けり、いとあわたゞしうてみぐるしかりしが』とあるのだが、此の隨筆やうのものといふのは、全集の隨筆中に

入つて居る『ほとゝぎす』であらう。三陸地方に大海嘯があつたので、その救恤のために、博文館が『文藝倶樂部』の義捐小說號なるものを出したのであつたやうに記憶して居る。同じ隨筆の『そゞろごと』は、二十八年の十月頃の作らしいのだが、これは『文學界』の連中で『うらわか草』とかいつた特別號のやうなものを出したので、それへ載つたのであつた。

書き洩らしたが、『われから』は二十八年の十二月頃の作らしいのだが、これは『文藝倶樂部』へ出た。あの作は、島田三郎氏の最初の夫人――その夫人とは一葉女史は中島歌子氏のところで同門であつた――のことからヒントを得たものであらうと思ふ。『わかれ道』も同じ頃の作である。これは翌年の『國民の友』へ出た。この作は『たけくらべ』と同じく材を大音寺前に得たものだと聞く。傘屋の小僧はその當時實在してゐたといふ話である。

斯ういふ風で、二十九年へ入つてからは、一葉女史の筆を取つたのは、斷片の『うらむらさき』と、前記の『女子書簡文』だけであつたやうである。

その年の四月頃から、一葉の病が進みはじめて、八月になつてます〳〵重くなり、遂に十一月二十三日になつて遠逝してしまつた。

丸山福山町へ引き移つてからの一葉女史の日記は『水の上日記』といふ名になつて居る。家の前

も後も池であつたので、それが爲めに日記にさういふ名をつけたのであつた。この日記の二十七年の末あたりから終りへかけてが、實に面白い讀み物である。僕の見るところでは、あの部分には、一葉女史の勘違ひが隨分多く表はれて居るやうであるのだが、人生記錄としては、さういふところが非常に面白いと思ふ。終りの方の齋藤綠雨との交涉なども如何にも面白い。

綠雨も一葉の死後あの日記を見るまでは、一葉女史によつてあゝいふ風に綠雨自身が書かれて居やうとは思つて居らなかつたらしいのである。明治三十六年の秋頃、一葉女史のあの日記を公にしやうかといふ話が起つて、その時は、齋藤が鷗外氏に主として相談したのであつたが、その時嘗て『めざまし草』の連中へ一葉女史を加盟させようとする鷗外氏側の運動に對して綠雨がその裏へ廻つて一々ぶちこわして居る經緯が日記では餘りに明になつて居るので、日記を鷗外氏に見せるのは少しきまりが惡るいと、綠雨は苦笑して居た。

一葉女史の日記は、その後綠雨が預つて居つて、三十七年の三月、醫者から絕望狀態であることを告げられると、僕を呼びに來て、僕が本所横網の綠雨の寓居へ駈けつけると、綠雨は、自分の命が旦夕に迫つて居ることを告げてから、樋口家へ返して吳れと云つて、日記を僕に渡したのであつた。

一葉女史が死んでからは、もう既に四十年もたつて居る。綠雨が死んでからも三十年を少し越えて居る。考へてみれば可なり古いことだ。その後でも、文壇では可なり多くの人々が死んで居る。僕などは、平凡無能のお蔭か、はたまたその祟りか、何うにか今まで生き延びて來た。氣の利いた化物なら、もうとつくに引つ込む筈であるのだが、未だにまご〳〵して居るなどは汗顏の外はないだが、しかし、世のなかゞ新しくなつたり、古くなつたりするので、僕等のやうな立廻りのうすのろな者は、引込みがつかなくなつてしまつたやうな氣もするのである。

拙稿は、一葉女史の日記を使つて、女史の實生活の方を示めしたいのであつたが、筆を取つて見ると、それをやり出すと、なか〳〵四十枚や五十枚の原稿では何うにもなりさうもないので、その方は思ひ切つて、こんなものを書いて、責を塞ぐことにした。

最後にいふ、本稿の『中』に、一葉女史が『改進新聞』へ書いた小說を『たまだすき』として置いたが、これは間違ひで『別れ霜』である。『たま襷』は『武藏野』へでも出たものではあるまいかと思ふ。

一葉女史のことを調べられる方は、全集中にある日記と、全集の末にある僕の跋と、それから眞筆版『たけくらべ』の後について居る諸家の一葉觀その他を一讀されんことを切望する。

北村透谷君

北村透谷君の處女作は「蓬萊曲」と云ふので、バイロン式の韻文戯曲であつた。同君が島崎藤村君と友達になつたのは、たしか二十五年頃だらうと思ふ。巖本善治氏の『女學雜誌』が、當時大分あたらしい派の文藝的作品を載せて居たので、其の雜誌に緣故の深かつた島崎君が、原稿のことか何かで、北村君と知り合ひになつたのであらうかと思ふ。二十五年の暮か二十六年の初めか、一寸覺えないが、島崎君が旅行に出る時に、其の時分同君がやつてゐた明治女學校の教師の後任に、北村君を推薦した。私は、二十六年の十月頃から翌年の春までに北村君と三四回會つたのみであつた。私は同君を何となく捌けない人だと思つた。妻もあり、子もある人としては、人生の智識などが割合に狹い人のやうに思つた。で、あんまり親しくもしなかつたし、眞面目な話もして見たことはなかつた。只其の時に氣が付いたのは、神經系統に幾らかの異狀があるに違ひないといふことであつた。で、二十七年の夏かと思ふが、北村君が死んだといふ知らせを得た時に、直に自殺ではなからうかと思つて『病氣ですか』と殊更に聞いたくらゐであつた。北村君の死んだのは、思想上の

原因もあらう。又、生活上及び家庭の關係もあらうが、單に自殺と云ふ行爲だけを引き離して見れば、肉體上、即ち健康上の異狀といふことを重な原因と見做さなければなるまい。私の知つて居る人で、自殺をした人は外に二人程あるが、それ等の人々は皆前から神經に異狀を來して居たらしく思はれる。神經に異狀のある人は皆自殺すると云ふ議論は成り立たないのであらうが、神經に異狀がなければ、大抵は自殺はしないと云へやうかと思はれる。尤も刑罰を受けるのを厭うて自殺する人の場合は特例であらうけれども。

斯う云つたところで、私は、詩人とか、思想家とか云ふ人々の自殺を、馬鹿なことだとか、笑ふ可きことだとか云ふのでは、決してない。さう云ふ悲しむべき行爲に達するまでの經路、さう云ふ行爲を實行する當時の心持には同情も表するし、或る場合には羨ましくも思へることがないではない。只しかし、事實として言へば透谷君の最後の如きは、どうも其の原因が神經系の病氣に關係があると云ふまでゞある。

北村君は小田原の生れだといふ。之れは全く傳聞であるが、北村君のお母さんは、同君の生母ではなかつたさうである。數寄屋橋外の四つ角のところに、小さい煙草屋が今もあるが、其處が同君の家であつた。私は其處へ一二度行つて、二階で北村君に會つたことがあるが、お母さんは小柄な

品のない並の町家のお内儀さんと云ふやうな人であつた。同君の細君の父親と云ふのは、自由黨の政治家であつたが、同君が其の細君と一緒になつたのには、いろ〳〵込み入つた事情があつたやうに聞いて居る。それで同君が生家の人々と別居してゐるのも變であるし、同居して居ても又うまく行かぬといふやうな有樣であつた上に、當時は原稿生活の未だ困難な時代であつたので、同君のやうなプライドのある、神經質な人には隨分厭なことが多かつたらうかと察しられる。そんなことも、北村君の身體には隨分應へたことであらう。要するに同君にとつては、時代も、境遇も、體質も皆不利なものであつたのだ。しかし、私は、前に云つた通り、北村君のことを餘り多くは知らない。島崎君の『春』の中の青木と云ふのが、北村君のことださうだが、私の傳聞したところでは大抵『春』に書いてあるところは事實に近いもの丶やうに考へられる。

それから北村君の、文學上の事業であるが、同君が『文學界』へ物を書いた時分には、中々人氣があつた。同君の一種の理想主義、强みのある文體などが、其の頃の新思想を求めると云ふやうな若い人々の間には、大いに迎へられて居たやうであつた。一言にして云ふと、在來の文學に籠つて居た因襲的な道學的觀念を破壞した。それまでの人々が持つて居た淺薄な、文學即實用主義と云ふやうなものに打擊を與へた。と云ふのが北村君の功績の一つであらう。又一方から見れば、當時の

狀態では、文學は洒落者の仕事、寧ろ道樂のやうに考へられて居たのであるが、それが、教育ある若い人の、眞面目な精神上の欲求を滿たすに足るものであるといふことを、若き人々に明らかに示したのは北村君の功績であらう。要するに今日まで進んだ、新しき文學の爲めに道を開いた人、文學が今日まで渡つて來る道の飛石の一つになつた人であることは、疑ひがあるまい。

尙ほ其の上に、形式の方から云へば、北村君は明治文學に對して認むべき貢獻をしてゐる。それは、同君の書いた韻文戲曲の形式である。今日の自由な詩形から見れば何んでもないやうに見えるであらうが、當時ではあゝ云ふ試みでさへ、非常に新しい物であつた。韻文で長いことを敍するといふことは、極く僅少な人の試みたことであつて、北村君のやうに廣い大きい範圍にまで、韻文を使つて進まうとした人は、さうたんとない時代であつた。さう云ふ點に於ても、同君の開拓者としての功績は沒すべからざるものであらう。

只、私どもの慾を云へば、北村君は淺薄な古い道學的觀念を破つたけれども、同君自身一種の道學的觀念に囚はれて居るやうなところがあつた。從つて文學者としては働くべき天地が狹くはなかつたか、生きてゐてもさう長く勢力を有し得る人であつたか、どうだか私には決し兼ねる。古い時代との間に立つ、情熱のある思想家と云ふのが、或は北村君の位地ではなかつたらうか。

齋藤綠雨君

齋藤綠雨と云ふ人は、つまり明治の文學者として誠に勝れた人の一人であらうと思ひます。勿論或る人々のやうに絶代の偉人とか明治文界唯一の巨人であるとまでは私は考へては居らぬが、兎に角に明治の時代が產出した文學者の中の勝れた人の一人であると吾々は信じて居ります。殊に吾々のやうな東京の事情に通じない者、また書物許りで世の中の事を知ると云ふ人間から見れば、齋藤君のやうな自分の身は東京に生れて、どちらかと言へば中以下の生活を送つて居つた人で、年齡の割合には善く世情に通じて居るといふ人で、一言して云ふと江戶式即ち東京式の文學者が無くなつてしまつたと云ふ事は心細く感ぜられる事です。あの人が嘗て一葉女史の事を評して『一葉と云ふ人は文才のあつた事は疑ひもないが、然しそれがよくあれだけにその才を發展させたと云ふ事は何う云ふ譯かと云ふと、自分の家へは東京生れの老人などで出入する人が多かつたので、またさう云ふ人々は見聞のなか〳〵廣いもので、よく世情に通じて居るのであるから、さう云ふ人の話をきくのは作物の爲めになる事が甚だ多い。それで一葉と云ふ人の作物を見、一葉の文才を評するのには

東京、江戸と云ふ事を離れては駄目だ』といつたことがあるのですが、同じ事を移して齋藤君の上にも言へやうと思ひます。齋藤君の生れたのは慶應三年の末頃で、伊勢の神戸で生れて、其後本所の綠町へ出て來てからは、地方には餘り出られなかつた人です。それで家の暮し向きも無論東京向きでやつて居つたのですから、飽くまでも、あの人の作品は東京式で出來て居ります。近來の文學者は大抵皆書物の上でのみ智識を得ると云ふやうになつて居るので、私ども始めさうなのですが、外國の書物を見、日本近代の書物、明治の初めの諸大家の書物を見て、小說は斯う云ふもの、文學は斯う云ふものと云ふ事を心得て、それから、筆を執つて文字を作くると云ふ事が多いのでありま す。さう云ふ處で綠雨君、紅葉君と云ふやうな、東京で生れて東京の事情に通じて居て、實地の觀察を基礎として文學を作る東京式の文學者がなくなつてしまふと云ふ事は、甚だ殘念な事で、吾々に取つてはさう云ふ人がまことに貴いのであります。その中にも齋藤君などは餘程東京式の作家として觀察が深かつた。その人の死ぬと云ふ事は吾々が東京と云ふ事を硏究する一つの道の栞が無くなつたやうにも思ふので、大變に殘念な次第です。——私は齋藤君の人物に就いて一應辨じて置きたいと思ひます。世間では如何にも冷酷な人であつたとか、如何にも意地の惡い人であつたとか思つて居るらしい。これはどつちかと云ふと、書物許り讀んでゐる今日の若い文學者の人々から見

れば、あの氣のきいた、如何にも皮肉な文章の調子を見て、あきれてしまつて、斯う云ふ文章を書く人ならば、定めし意地の悪い人だらう、冷酷な人だらうと思つて、且つ亦逸話として世間に傳つて居る一寸とした缺點から人物を判斷して、齋藤と云ふ人はいかにも悪黨でゞもあるかのやうに判斷してしまつたのでありませうが、決して悪い人ではない。隨分面と向つて人をヒヤカスやうな事もあつたが、私の目から見れば、思慮の綿密な人で、面と向つて話をして居る時は餘程容赦をして、人の感情を損ふやうな言葉は用ゐないやうにして、婉曲に話をする人で、また人に對しても祭しの深い、情に厚い所があつたやうに思はれるのです。それですから、極く親しい友達間では人の事を批評もするが、あの人はこれ〳〵の缺點があると云ふやうな事も言ふが、その言ひ方は、聽いた人から先方の批評された人に向つて機會でもあつたならば忠告でもしろと云ふやうに言ふので、只だその人を陰で罵つて快とするといふやうな事は無かつた人であります。一言すれば情に厚い人で、思慮の綿密な人です。作品を見れば分りませうが、細かい所まで思慮が行屆いて居つた人であつたのであります。一例を擧げて言へば、齋藤君は自分が死ぬと云ふ事を知ると同時に、手控とか手紙などは皆燒いてしまつたのです。あの人は自分の筆跡を人に見せる事を嫌つて居つたものですから、それ等の物を悉く燒いてしまつたのだが、兼ねて一葉女史の歌を集める事を托せられて居つ

て、尤も詠草はあつたが、その詠草以外のもので齋藤君が手控に書き集めてあつた歌が中々多かつたのですが、それだけは殘してあつたのです。死ぬ事が分つてから、兼て預かつてゐた一葉の遺稿を一纒にして遺族に渡してくれと云つた。私は氣もつかないで持つて行つた處が、樋口家では詠草に載つて居ない歌を齋藤君は書いて置いて下さつたのが添つてゐたと云つて喜んで禮を云ひました。これには、私は非常に感服したのです。自分の手跡は殘して置くのが厭やだといふので皆燒いてしまつたに關はらず、同じく自分の手跡でも、自分が死んでは他人の事が散逸して分らないといふ物だけは、殘して置いて向ふの人に渡すといふのは、感服せざるを得無い事で、平常ならば兎に角に、今夜にも知れない生命だと云ふ時に、その人が自分の筆跡は皆燒いてしまつてもそれだけは殘して置く、跡に殘して置かなければならないと思ふ、友人の遺物だけは殘して置くといふのは、思慮の極めて綿密であつた事と情に厚かつた事と云ふを見る事が出來やうと思ひます。

人物は先づさう云ふ風であつたが、容貌を言ふと、脊の高い人で、日本人としては、身の丈が五尺五寸と云ふのだから、餘程高い方で、私どもよりは一寸五分許り高い瘦せた人で、面も長い方で、極く鋭いと言つて決して惡相ではないが、如何にも利巧さうな顏であつたのです。平生から瘦せて居つたからか知らないが、最後の場合までもさう衰弱が目に立たぬやうでした。私が齋藤君を始め

て見たときは、確か明治三十年の夏であつたと思ひます。その場所は本郷丸山福山町の一葉女史の家であつたのです。その時分には一葉女史は死んでもう居なかつたので、二十九年に一葉女史は死んでしまつたのだが、その家に一葉の母さんと妹さんの邦子さんが住んで居つた。所で或る夏の晩の事でしたが、私は用があつて一葉さんの家へ行つたが、その時客が來て居りました。その時には私が行くと、その客は挨拶をして、すぐ歸つてしまつたが、跡で家の人に聽いたら、あれは齋藤君であると云ふ事であつた。その前から一葉女史の死んだ時に齋藤君が色々世話をしてくれたと云ふ事を、戸川秋骨君から聽いて居つた。齋藤君から鷗外さんの所へ話しをして青山さんに一葉女史が診察して貰つたとか、遺稿の事は幸田さんに話をして世話をして貰つたとか云ふ事であつた。一葉女史との交りは吾々より淺いにも拘はらず、親切に世話をしてくれたと云ふ事をきいて、兼々謝意を表して居つたのですが、然しその晩は齋藤君も急いで居つたので挨拶もロクにしないで別れましたが、その年の暮に島崎藤村君が本郷森川町に或家の座敷を借りて居つて、その家は本多神社の後ろでしたが、齋藤君は丸山新町の或る下宿屋に居りましたので、よく藤村君の所へ遊びに來る、私も遊びに行くものですから、そこで心安くなつてしまひました。その後その年の暮であつたか、その翌年であつたか、島崎君、戸川君、齋藤君、私とから四人で一所に、淺草の方へ出かけて、向島の土

手を歩いて、千住まで行つて車に乘つて淺草公園へ歸つて、仲見世を通つて雷門の方へ向かつて右の方へ曲つた所で、名は忘れたが有名な鳥屋（金田）がありましたが、そこへはいつて晩食を共にしました。その時飲んだり食つたりして、それから大變心安くなつて、度々來たり行つたりして、いつもその宿になる處は戶川君の宿で、戶川君は臺町の坂上の岡田良平と云ふ下宿屋に居たのですが、そこへ皆集つて、そこへは上田敏君も來る、島崎君も來ると云ふ事であつた。皆そこへよつてワアワアと言つて話をして居りました。その時の話は「あられ酒」の中にも齋藤君が書いて居るのですが、私が厚い毛の洋服を着てこゞんで居ると、戶川君が『かうやつて居れば君も可愛いね』と言つて脊中を撫でました。その時私は『己れを熊の子だとでも思ふのか』と言つたら、齋藤君が『何に猪の弟だ』と言つて大笑ひになりました。さう云ふ事で頻りに交際して居りましたが、確かあれは三十一年の初めかと思ふのですが、森川町に岡野と云ふ菓子屋がありますが、そこの裏手の齋藤といふ下宿屋に齋藤君が移りました。その時分から萬朝報に出て居りましたのです。その家は今は靑雲館と云ふ家になつてゐるさうですが、その家へは私は度々行きました。そこには大野酒竹が同じく下宿して居つたし、津山の新聞に居る田岡嶺雲君も遊びに來て皆集りました。或る時などは三人で一所に道を夜歩いた事もありました。齋藤君は非常に東京の事情には通じてゐたものですから色

々私の知らない事をきかして貰ひ、斯う云ふ事は斯うだと言つて敎へて貰らひました。その年の暮であつたか、二人で淺草の方まで行つて見やうと云ふので、その時には駒形まで行つて、あすこに前川と云ふ鰻屋があるのですが、そこへ行つて二人で晩食をしました。その日は寒い晤の晩で、が少し吹いて居りました。齋藤君も酒は飮まない方だが、その時は少しは飮みました。その歸りに二人で歩きながら色々話をしたのです。齋藤君はその頃は、シメリ勝ちで餘り人に話をする事も無かつたが、その時には特に意氣銷沈の有樣で話かけました。その話は『今日まで自分は十分の學問も出來なかつた。それは何うい ふ譯であるかと言ふと、自分には弟が二人あるので、自分が學問をして高等の學校へまで行かうとすれば、その二人の弟に學問を廢させなければならなかつたから、自分は二十歲前で學問はやめてしまつた。また自分が小さい時分には家が困窮であつたと見えて、まだ自分が小さい時分に母さんに色鉛筆を買つてくれと言つた處が、母さんは宜しいと言つて引受けは引受けたが、然しよく〳〵金がなかつたものと見えて、頭の物か何か、當時母さんは銀の平うちか何かの頭の物を賣つた容子だつた。母さんは觀音樣へ行くと言つて出て行つて、色鉛筆を買つてくれたのは買つてくれたのであるが、見ればいつもさしてゐた簪が無くなつて居つた。母が親の遺物であると言つて居た物を賣つて鉛筆を買つて吳れたと云ふ有樣であるから、私は學問をやめて弟

共に修行させました。それで自分は毎月幾日かを記念の日として觀音堂に詣るのであるが、それが丁度今日なんだから觀音樣へ行く積りだ。今夜は寒いけれども一所につきあはないか』と云ふので觀音堂へ行つて一所に堂の中へ這入つて、二人で話をして、その晩家に歸つて來たのでした。

私はそれぎりにして餘り齋藤君の身の上に就いては聽きませんでした。唯だ齋藤君の事に就いて度々餘人から聽いて居つた事は、三十三銀行の河村傳衛と云ふ人の世話に齋藤君はなつて居つたことがあつたといふことで、その人は商界の豪傑であつたやうだが、その人が破産をしてしまつたので、齋藤君の身の上には不便が生じたのであるといふことです。それから後は私も暫く色々の事に妨げられて交通をしないで居りましたが、その中に齋藤君は森川町の下宿を引拂つて、向柳原に齋藤君の妹さんが嫁入つて居られる處がありますが、齋藤君はそこへ行つて居られたやうです。それは三十二年中の事であると思ひます。その間手紙であちらからも何か言つて來た事もありましたし、友達なども尋ねて行つた事もありましたが、下宿屋とも違つて邪魔にもならうかと思つて行かずに居りました。その年も暮れて三十三年の暮になつてから、齋藤君は鵠沼へ轉地をして東屋と云ふ家に居つたやうでしたが、そこから十二月二十日の便で手紙が來て居る。その手紙は今も手許にありますが、轉地療養をして居るから遊びに來いと云ふ事でありました。併し私も東京に用事があつた

ものですから、一寸も訪問をしなかつたのでした。そこの家には齋藤君は大分長く居つたのでしたが、三十四年の四月になつて小田原の緑新道へ引越して家を持つたと云ふ通知が來ました。私は丁度その時分に小田原に用があつて參りましたが、急ぎの用であつた爲めに齋藤君も尋ねずに歸つて來ました。それから丁度三十四年の暮に澁谷の與謝野君の所へ行つた處が、（その時分は私が原稿を上げ始めた時分です。）與謝野君の奥さんと門口で話をして居る人がある。向ふは笑つて居るが、こちらは近眼の爲めに分らないのであつたが、側へ寄つて見ると、齋藤君でした。その時は與謝野君が留守であつたから、二人で新橋まで汽車で來て、天金で飯を喰つて、それから馬車に乘つて日本橋で下りて、歩るきながら神田の大時計の所まで來て、あすこで別れました。その後翌三十五年の一月に旅行しやうと思つて、小田原へ行つて私の姉の家へ行つて、一月一日の晩に齋藤君の家を尋ねて色々話をして、私は翌日伊豆の方へ行つたのです。その後これは二月の初めであると思ひますが、梅を見に行かうと思つて、齋藤君の所へ尋ねて行つて、梅の面白い所を案内して貰つて見て、その晩東京へ歸つて來ました。その時にも齋藤君は『どうかして東京へ歸り度い。山や海では自分には仕様がない、やはり東京の市中で塵を吸つて居て、外を「ネツテナコトオツシヤイマ シタカネ」と云ふやうな唄でも唄ひながら歩く人の通る所に居なければ、自分には仕様がないから、なり

たけ早く東京に出たい』と云つて居ました。私も尤もな事と思つて『身體の工合さへよければ東京へ行つた方がよからう』と言つて、その時にはそれで別れたのです。それから暫くして夏になる前、卽ち三十五年の春でしたが、小田原の十字町へ引越したと云ふ手紙をよこしました。三十五年の夏の海嘯の時もどうかと思つて見舞狀を出した處が、別段危險は無かつたと云つて來ました。それから三十五年の秋かと思ひますが、その時分齋藤君は東京へ出て來ました。その年の十二月の二十三日であつたが、淺草の須賀町に家を借りましたと云ふ通知狀が來て居ります。その時にはすぐ行かなかつたが、正月になつてから身體が惡い、熱で弱つて居ると云ふ事であつたが、此方も忩しかつたし、殊に齋藤君の惡いと云ふ事は屢々きくのだが、いつもぢき直るものだから、やはりぢき直るだらうと思つて行かなかつた。それでも二月であつたか行つて須賀町の家で話をして來ました。その家と云ふのは明治病院へ這入つて行く所で、家の前はあした死ぬか知れないと云ふ病人が擔はれて通るし、出て行くものは屍に成つて通るものなども少く無いので、それを見て居るのは餘り氣持がよくないと云ふ事でありました。尤もその時には餘程病氣もよくなつて、床の上で起き直つて居りました。その時には、これはどつかへ引越さなければならないと云ふ事を云つて居りました。それから暫くたつて、三十六年五月一日に、千駄木林町二百三十番地、丁度大觀音から團子坂の

方へ行つた處をズット左へ横町を這入つた所です。今はあすこに日本淑女學校と云ふ學校がありますが、そこの奥の方に家を借りたのでした。そこへも、私は色々用事があつたものですから度々行きました。その時齋藤君は隨分衰弱してゐるやうであつたが、別にひどく惡いと云ふ程でもなかつたのです。そこに居つたのは僅かの間で、その年の十月十九日頃に少し話があるから來てくれと云ふので行つた所が『此處に居ると隨分人が尋ねて來るし、自分も靜かに療養をして見たいと思ふので、全く客を避ける事の出來るやうな、人に分らないやうな所へ引込んでしまつた方が氣樂でよからうと思ふので、越す積りだ』と云ふのです。それで家はどこにすると云つたら、本所の横網に見付けて置いたと云ふ事でした。私はそれならばさうするがよからうと言つた處が、決して他の人には云つてくれるなと云ふことであつた。私は知つてゐて言はないと云ふ事はどうかと思つたが、さう云ふものだから承諾した。それで十月二十三日に横網町一丁目十七番地へ轉居しました。それから一週暮の中に行つたやうに覺えて居ります。それから一月に成つてからでしたか一回行つた處が、どうも身體がよくない、夜中になると咳が出るし、熱も出て非常に困る。モルヒネを飲んだ所が餘りきゝ過ぎるので身體が苦しい。『或る夜中などは愈々どうも黑枠になるかと思つて、さうなれば頼んで置かなければならない事もあるから、君と幸德君に來て貰つて話を聽いて置いて貰はなければな

ゐるまいかと思つた事もあつた』と云つて笑つた事がありました。それから一寸經つて三月の初になつて私の所へ手紙が來た。それにはから書いてある『諸藥効を奏せずやゝ危險の狀態に陷りたる事を御承知置き被下度候』と書いてありました。その書面には與謝野君の所へも此の旨を通じてくれと云ふ事を書き添へてありました。それですから與謝野さんの所へ手紙を出して置いて、その翌日行つて見た所が、熱が非常に出て困ると言つてひどく弱つて、此の勢ひでは、どうなるか分らないと言つて、ひどく心細い事を言つて居ました。少し友達とも話合つて置きたい都合もありましたから、齋藤君の病氣の氣遣はしいと云ふ事をその晩或る人の所へ通じて歸つて來たのでありました。それから二三日たつて呼びに來たから行つて見た所が、此の時は晝間であつたが、頓服藥を飲んだものだから熱も落ちて居つて、非常に勢がよくつて、色々話をして別れました。それから四五日たつて、また手紙をくれましたが、それは、すぐ行かずともよいと云ふやうな事でもあつたし、齋藤君が熱が出て苦しんでゐると云ふ事は幾度もある事で、いつもそれは恢復するのですから、今度も恢復するであらう、或は六月頃までは大丈夫だらう、若くは暮あたりまでは大丈夫かと思つて居たのです。さう思つて無沙汰をして居た處が、四月十一日の五時過ぎであつたが、齋藤君の所から使の人が來て、全く病氣が危篤である、今晩にも分らない位である、言葉も聽きとれぬ位であるから

一時でも早く來て跡々の事をきゝ置いてくれといふ事であつた。まだそこまでにはなつて居まいと思つてゐたのでしたから、私は甚だしく意外に思つて、急いで行つた處が、向ふへ著いたのは六時過ぎで、燈火のつく時分で、丁度その時は醫師が來て居つて、私が行くと醫者は歸つて行く。その時齋藤君は非常に衰弱して居つたが『よく來てくれた、もう愈々いかぬ、先程醫者を賴むで注射をして貰つたが、注射は一回より一回と効力を減ずるから、二三回もやれば注射もきくまいと思ふ、もうこれが自分の最後である、かうやつて居るのは隨分情無いもので、自分で起きやうと思つても起きる事は出來ない、人に起して貰つても息がつまつて呼吸が絕えてしまふ。最早牛乳も喉に通らない、僅かに氷を飮んで居るだけである。愈々お別れだ、ながながどうも御世話になつてありがたかつた。少し賴みたい事があるから』といつて、家の人に言付けて古い文庫を取出して、その中から一葉女史の遺稿の預つてあつたのを出して、これを返してくれと云つた。これは私と齋藤君と相談して纒める積りであつたが、齋藤君はかうなつては仕やうがないからと云つて私に引受けて、跡で出來るものならばどうかしてくれといふ事であつた。また『戶川秋骨君から原稿を預つて居るから、之れも返して貰ひたい、もうこれぎりで賴む事はない、愈々御別れである、もう話はない、君の來るまでは何か話もあるやうに思つて居たが、かうなつては話はない』とかう云ふので

す。私はそこで、確かに受合つたと言つて、暫時默つて居つた處が暫くして氣の毒だが筆を執つてくれぬかと云ふのです。そこで筆を家の人に出して貰つて、何だと言つたら、例の新聞に出た廣告文で『僕本月本日を以つて目出度死去致候間此段謹告仕候也四月日綠雨齋藤賢』といふのを書いて置いて吳れといふのでした。『既に幸德秋水を電報で呼んで居るが、多分は今夜來てくれるかとは思ふが、行き違ふといかぬから、念の爲に之れを懷に入れて居つて、僕が死んだと云ふ通知が行つたならば、この廣告文を幸德に托して「二六」「萬朝」位でいゝから出してくれ』といふのです。よしと言つて受合ふと、『念の爲めに、もう一枚書いてくれ。幸德が今夜來れば直接に賴むことにするから』と云ふから又一枚同じ事を書いた處が、大變禮を云つて床の下に入れた。家の人も私と齋藤君の間に何か內密な話もあらうかと思つて、そこを避けて居たものだから、枕許に在る氷を飮まうとする時などはそれを取つてやり、また家の者に硝子の管は無いかと聽いた所が、私の心持ちは硝子の管で飮んだ方がよいかと思つてきいたのだが、家の人が管よりも茶椀で飮んだ方がよいと云ふから、之れで飮ますのですと云つた。暫くすると、齋藤君が家の人に管を持つて來いと言ひ附けました。これを見ても私は齋藤君が萬事に行渉つた人であつた事を感ぜざるを得ないのです。私が注意をしたものですから、家の人に管を持つて來させて、私の面前で飮んで見せて、友人の注意を空

しくしないと云事を示めしたものと思ひます。死の目前に迫つて居る人の所業としては如何にも餘裕のあることで、通例の人の中々出來ない事であらうと思はるゝのです。それから暫くすると『愈々今夜當りは家の者を寄せて、所謂裏家の葬式の順序立てをする積りだ』と言つて寂しく笑つた。私は何でも話せ、腹藏なく話すがよろしい。書き留むべき事は書き留めて置くから、遠慮なく云へと言つた處が、此の期に及んで何も言ふべき事はない、たゞ死あるのみであると云つた。其時家の人も來て介抱して居つた。私はそれから暫く枕許に控へて居た處が、齋藤君が『どうせいつまで居た所が名殘りは盡きないから、もう思ひ切つて手短く別れてしまおふではないか、文筆を執る人が枕許に居て呉れるのは心強く思ふべき筈だが、今ではそれらの事が反つて厭はしくなつて居るから、何うか歸つてくれろ』といふのです。それで、私は至極尤だ、善く解つたと云つたら『君は僕の言ふ事が解つてくれたか』と喜ばしさうに云つたのです。その事に就いては私は斯う考へたのです。齋藤君は文學者としても、又一個の俗人としても色々計畫して居つた事もあるだらう、身體が壯健であるならば、あゝも、かうもと思つて居たであらうが、この計畫が悉く外れて、自分の思つただけの作物を出す事も出來ずに、今此の如く所謂陋巷の一小屋裡に斃れる場合になつては、總べてさう云ふ事業の失敗とか半生の不遇とかいふやうな念を全く離れて、唯だの一人の市井の民と成

つて、學問から離れて、只の裏屋の主人となつて死にたいと云ふ考を持つて居たのではないかと思ふ。然るになまなか文筆の人が枕許に居て、君が計畫の齟齬した事を思ひ出させるのはよくないと思つたから、頼まれた事だけは確かに引受けたと云つて歸つて來ました。その歸り途に樋口一葉さんの妹さんの所へ寄つて、此の事を話した處が、妹さんは車を飛ばして、その晩行つたさうです。翌日も朝行かうと思つた處が用があつたので晩方行つた處が、別に病狀に變りはないが今夜にも分らない容子であると云ふ事であつた。向ふで逢はうと言つたらば逢はうと思つたが、『逢つた所が口もきかれないので、唯だ苦みを見せるだけの事であるから、名殘は盡き無いけれども逢ふまい』といふ事を病床から家の人が取次いだものですから、その晩は歸つて來ました。翌朝十時過ぎであつたかと思ふのですが、私の親戚の野崎左文から電話が懸かつて來たから、何用であるかと思つたら、齋藤君が今息を引取つたから都合して來られるなら來てくれと云ふ事でした。時間は十一時過ぎで有つたと思ふのですが、横網町へ急いで行つた處が、スツカリ家の片附けは出來て居つたのです。家の人は當人が『葬式など華々しくないやうに、人にも餘り來て貰ひたくないから、世間へは成るべく發表して貰ひたくない』と遺言してあるといふのでしたが、友人としてはさういふ譯にも行かないので、他の友人の所へは當人の死んだ事だけは報知しなければなるまいと云つて居る

處へ、野崎君が電話をかけに行つてゐたのが戻つて來る。與謝野君も幸德君も博文館の內山君も來られた。それから幸田君も程無く來られて、五人寄つて報知を出すとか、何とか友人のすべき事をしました。

また家の人に臨終の有様をきくと、如何にも落付いて居つたさうで、齋藤君の從兄の若江と云ふ人が坂本に酒屋をして居るのですが、その人の妻になる人で、四十四五の人があるのだが、これはシツカリした人で、齋藤君の病が重つたと云ふので、前々から世話をして居つたが、十一日に醫者が齋藤君の病がいよ〳〵危篤になつたのを見て『此の人は家の人と違つて學問の人である、商賣人とか職人などゝは違つてそれ等とは全く生活を異にしてゐる人だから、此のまゝで終らせるのは反つて不親切には當りはせぬか、當人の覺悟もあるだらうから、望みのない事を知らせたくはあるが、どうも言兼ねる事だから、それとなく望みのない事を知らせる方法はないだらうか』と言つた處が、それでは私が言はうと云つて、その女の人が齋藤君にその望みのない事を言つたのです。そこで私の所へもどこへ使もが來たのです。その人が世話をして遺言などをきいて、その人と金澤たけと云ふ人が居つて世話をして居つたのです。

齋藤君は死ぬ朝までも氣分は確かであつたさうで、朝臺所でガタ〳〵と音がした處が、あれは何

の音かときくから、水を汲んで來たのですと言つたら、新らしい水を飲ましてくれと言ふので、水を持つて來て出した處が、齋藤君は快く飲んで寢返りをさせて呉れといつたので、手傳つて寢返りをさせると、皆次の間へ行つて居てくれと云ふ事であつた。それでほんの一寸の間家の人は次の間へ避けて居て、一二分たつて皆引返して來た處が、モウ息が絶えて居つたさうです。齋藤君は兼ねて世を罵ることの烈しかつた人であつたから、死ぬ時にも定めて恐しい事を言つて死んだであらう、生れ代つて來てエライ文章を書かうといふやうな大言壯語を吐いて死んだであらうと思ふやうな人もあるかも知れませんが、至極臨終は靜であつたと云ふ事は、あの人の勝れた人であつたといふ事を現はす證據の一つであると私共は思ひます。不遇でも、短命でも一生は一生である。何も萬事の終である死期に及んで、怨がましいことをいふにも及ぶまいと思ふのです。此點に於て、齋藤君の死期の靜穩であつたことは同君に對する我々の敬意を益々深からうする譯であるのです。翌朝になりますと、本人の遺言通り朝早く火葬すると云ふ事になりました。外の諸君へは一寸も通知をしないで置いたのですから、その供をしたのは、幸田君與謝野君私と友人で三人、親戚の男の人が四人で、朝五時に横網を出棺して隅田川の岸を傳つて、厩橋へでゝ、あれから眞直ぐに西行し、本願寺の方へ曲がり日暮里の方へ行つたのですが、その道で色々の事を考へたのです。文壇に同じく名

を馳せた人で、病が危篤だと言へば、各新聞にその事を書立てられ、その死するや知るも知らぬも打寄つて立派に行列を整へて葬を送つたと云ふ人も少くはないのに、之れ等の人に才も作も劣る所のない人で、今此の如く僅かの人數で遺骸を送つて行く、またその人の身の上を見れば、年齢も既に三十八と云ふのであるのに、妻もなく子もなく、一人で寂しく此の世を送つて、今屍を送るに當つても極く近い親類といふのは極少なく、寂しい葬りの行列を整へて行くと云ふのは、餘程その相違が異樣であると色々の事を考へて行つた。然し此の考へは幸田君も與謝野君もさうであつたら う、餘程沈んで歩いて居られた。天の模樣は雨を含んで居り、草は露を含んで居る、その中を分けて吾々が寂しい柩を護つて行くのは、あたりの景色のハデヤカなのに相對して、吾々どもには寂しい何とも言へぬ感じがしました。かねて幸田君に法諱をつけてくれと云ふ事を我々から賴んで置きましたが、道々幸田君が考へて、丁度淺草の榮久町あたりであつたか、幸田君が『どうだ春曉院綠雨醒客としては、居士も何もなく、それだけの事にしてしまつては、さうすると春の曉に對して醒客の醒めると云ふ字がきいてよくはないか』と云ふので私どもも至極よいからそれに極めやうと言つた。幸田君も故人の事を話をしながら日暮里へ行きました。日暮里へ行著いたのは七時頃と思ひますが、そこには野崎左文君が先きへ行つて居り、少し後れては鈴木友三郎君、堀內新泉君、內山

正恕君などが出迎はれて、火屋とでも云ふのですか、燒く所へ屍を納めて歸つて來ました。その晩また集まつて方々へ通知を出しました。その翌日も友人のうち一人を賴んで悔みに來る人の應接をして貰ひました。越えて十六日には駒込東片町の大圓寺で午后一時から友人の人々に集つて貰つて、遺骨を葬る式を擧げました。その時は非常に天氣の惡かつたのにも拘はらず、大抵親しい人々は出席をして下すつたので、式も嚴肅に見苦しからぬやうに擧げる事を得たので、悲みの中にも喜ばしく思ひました。で、其日の式場では、幸田君は、友人を代表し、與謝野君は新詩社同人諸君を代表して弔辭を朗讀してくだすつたのです。あすこには齋藤君の祖父と兩親の墓があつて、臺灣で死んだ弟さんの理學士齋藤讓と云ふ人の遺骨も其所へ納めてあるので、その中へ一所に齋藤君の遺骨も納めたのであります。

齋藤君の一生は考へて見れば實に寂しい一生である。齋藤君には一人の姉さんがあつて、それが伊勢に嫁入つて居られて、その娘さんが春江と云ふ人で東京に來て居られて、今度の葬式に出席しました。妹さんは柳原の商家に嫁入つて居られる。今一人殘つて居られる弟さんは外へ養子に行つて小山田謙と言ふのですが、醫學士で軍醫になつて、戰爭に行つて居るといふので、此の人は喪主となるべき人であるのですが來られなかつたのです。葬式の場合でも齋藤君の年齡ならば妻君があ

るとか、「小供があるとかして、それが喪主の席に列ぶべきのが當り前であるのだが、さう云ふものもなく、見渡した所、先づ男の方にもあれ、女の方にもあれ、ひどく君に近い人といつては一人の妹さんと若江といふ從兄の人が會葬されたとのみと云ふ有樣でしたから、何となく淚がこぼれて仕方がなかつた。それは家族の方もさうであるが、また世間を見渡して見ても、隨分色々誤解もあり、齋藤君の方でも自分はさうは思はないでも、そこには全く已むを得ない事情もあつて、人の感情を害すると云ふ事が多かつたので、人によつては齋藤君を惡い人のやうに思ひ、感情を惡くして居る人もあるので、隨分敵の多い生涯であつたやうです。

私は近頃齋藤君を知つたのみで分らない事であるが、外の友人諸君から聽くと、十五六年も前から肺病であったさうです。さういふ大患を抱いて、殊に貧苦の一生を送られたのであるが、外の人は病氣は惡くなるとすぐ床につく者が多いのであるから、從つて人の同情を惹き起さすといふことも多いのだけれども、齋藤君の病氣はぢり〳〵攻め寄せると云ふ風であつたのです。それであるから、世間からは病人としてはら見れずに、健全な人として待遇されて居つたから、餘程苦しい位地に立つた事が多かつただらうと思ひます。

『人は屢く、中江兆民はどうであつた、正岡子規はからであつた、それだのに、お前はなぜ、もつ

と奮發して筆を執らないかといふやうなことを僕に向つて云ふけれども、それ等の人は、どうせ助からぬといふ事を知つて居た人である。しかるに、僕のは、養生をすれば、少しは命の延びる事は疑がないので餘程事情が違ふのだから、同一の事を僕に責めらるゝのは甚だ無理では無いか』と齋藤君は話したことがあるのです。兎に角、あれだけの病氣があり、又あれだけの不便があるのにあれだけの作物、吾々の方から言ふと事業ですが、あれだけの事業を殘すと云ふのは立派な事で、苦心の程も察すべき事であらうと思ひます。若し齋藤君の性行に幾分でもねぢれた所があるとしても、それは全く境遇の致す所で、決して齋藤君の罪ではなからうと思ふのです。文章に骨を折つた事は非常なもので、その苦心の容子は、私どもよりはもつと委しく知つてゐる方々がありましようが『わすれ貝』のなかにある『朧夜』などは隨分幾度書き直したか知れないものです。森川町に居た時に大野洒竹君が近頃の文人は文章を推敲することがないからいけないと言つた處が、齋藤君が文庫のなかゝら『朧夜』の原稿を出して、試に見てくれ、一枚でも、上に貼紙をして直してないところはないぞと言つて見せた。それを見ると貼り拔で出來たやうに貼つて直してあつた。一體齋藤君は一字一句念を入れて書いた人です。一字一句殆んど動かない字を使つて文章を作つた人です。あの人がその上に幾度も紙を貼つて書き直したのだから餘程念を入れたものゝやうです』齋藤君はそ

の時に『こゝに書いてあるだけの意味を少しも變へぬやうに此文章が、此上に直せるものなら、直して見るが宜い』といつて笑つたのです。西洋でも、佛蘭西のギユスタアブ・フロオベルといふ人などは、苦吟に苦吟を重ねて文章を作る人であつて『一の意味に適して居る言葉は唯だ一しか無いものである、それで、その言葉に行當るまでは、決して止まるな、稍それに近い位の言葉を得た位で安心しては駄目である』といつて居るし、又『自分が石が青いと書けば、其場合に適する字はその外には決して無い、讀者は、宜しく、安心して、さう信ずべきである』と云つて居るのですが、我齋藤君の如きは確にプロオベル流の人であろと思はれます。それから記憶のまことに善かつた人で、人の番地などは皆空で覺えて居りました。決して宿所錄などを作る事はしなかつた。話をしながら覺え帳の材料を思ひ出したと云つては、ランプの笠に三角を書いたり、點を打つたりして心覺えをして置くやうだつたが、近年は手帳を拵へて置いて書きつけたのでは無いかと思はるゝのです。ですから三十二年頃は三角四角を書いて心覺えにして置いて　それを見ては『日用帳』『覺え帳』を書いたやうです。それ等は固より皆齋藤君の見聞にかゝる短い色々の話なのですが、毎回の書出し工合がどうもむつかしいといつて居ました。始めに書き出す話は機關車のやうなものにして全體を之でもつて引出させるやうにするのであるから、それが一番骨が折れると言つて居つた。それか

ら一段一段の短い話を切つて行く結末の句が同じやうな句では面白くない、初めの結句に『なり』とあつて、また次の話の結句が『なり』と來ては面白くない、同じ物を使はぬやうにするのには餘程骨が折れるといつて居たのですが、出來あがつた君の文章を見ると、澁つた跡などは少しもない。君の文才のあつたことはこれでも分るのです。君の文章の中には、齋藤君をそのまゝ見るやうな文章が幾等もあります。一體齋藤君は口數は少なかつたがそれでゐて話の甘い人で、『覺え帳』其の他の作品の中にあるやうな句調でやられたのです。それだから作品を見ると齋藤君の容貌なり、調子なりが、彷彿として眼前に浮び來るやうに思はるゝのです。

世間は齋藤君の事を評論家として、正直正太夫で皮肉な評をした所ばかりを重んじて居るやうであるが、併しながら私共は齋藤君を評論の方よりは創作の方に重んずべき所があるかと思ふ。犬蓼見切帳、朧夜、門三味線、朝寢髮、油他獄、かくれんぼ、などを見たならば、創作の力が分ります。世間では、まだ正直正太夫と言つて讀賣新聞に色々の話を書いて居た時分の評論だの、『金剛杵』『霹靂車』のやうな一寸洒落のめしたやうなものの方を貴んで居るので、非常に苦心をした創作の方は重んじて居ぬと思ふ。

私どもから見ると、念の入れた物はそれ丈重んずべき所があつて、齋藤君の價値は寧ろ創作の方

に在ると思ひます。それから、これは上田敏君の說だが『世間には齋藤君の文章を舊式だと言ふ人もあるが、あれは新しいので、西洋式で新式の文章である。唯今の西洋式の文とか新式の文章とか云ふものはその作家が日本語を十分知らないから、思ふやうに書けて居ないのだが、齋藤君は思想は新式で、これに合せるに日本語を十分心得て居たから、西洋式の諸君が言ひ得ぬ所に筆を著ける、それで式が古いやうに見えるので、思想は勿論、文章も全く西洋式といつて宜いのである』。これは上田敏君の話ですが、至極適切な評論だと思ふのです。又一面から見ると齋藤君は西洋の事をさう委しく調べた人でもなく、漢文でも和文でも正式に勉强した人でもない。單に學識と云ふ點から言ふと、齋藤君の外に文學者中には齋藤君より學問の出來る人々は幾等もあるのであらうが、併し齋藤君の知つて居るだけの學問を以てして、あれだけ十分世の中の事を解して細かに觀察をして文章を書いて、多數の文學者間にあつて拔群の觀をなして居ると云ふ事は餘程齋藤君の天才のある事を現はす證據になるであらうと思ひます。吾々どもは外國語とか漢文とか和文とか云ふ方で、何かさう云ふ眼鏡をかけなければ、物を見る事が出來ないのだが、齋藤君に至つてはそんな媒介物を經ずして直ちに肉眼を以つて人世の眞相を見る事の出來た人であつた。眼力の强かつた事は明かなもので、吾々のやうに學問といふ何度かの目鏡をかけなければ世の中の事を見る事の出來ないと云ふ近

眼者流では無かつたのであります。此の頃『霹靂車』や『金剛杵』を見てゐると。當時の『帝國文學や青年文集』の人々の物の分らなかつた事は今更驚かれる程です。とても齋藤君の敵ではなかつたと思ひます。文章の點から見ても、物を判斷して行く點、物を委しく論じ、且つ事の要領をつかんで行く點は、とても齋藤君の敵ではなかつたと思ふ。外の連中はワイ々々連だから喧嘩にもなつたが、所謂當時の青年批評家諸君がもつと落付いて居られたならば、齋藤君の打撃には隨分閉口したらうと思ひます。これで、大體齋藤君に就て私の知つて居る所だけは終りましたが、唯だ一つ齋藤君から聞いた事で僕の心の中に殘つて居る事があります。これは齋藤君が千駄木を引拂ふときに色々の話をして『知合ひの人々に何も言はずに、かうやつて引越して行くのは、まるで夜逃げをするやうなものだがそれに就いて面白い話がある。夜逃げの跡を引受けたと云ふ話がある。それは舊幕臣で、その人が零落してどうも仕様がないから、夜逃をしなければならないと言つて居つた所が、丁度その時その家のよかつた時に世話になつたことのある人がやつて來た。その男にかう〳〵云ふ譯で夜逃げをしなければならないと話した處が、よし、己れが引受けたからと云ふので、家の人々は皆出て行つてしまつた。處が跡を引受けた先生で、豆ランプかなんかをつけて、ドテラを着て寢て居たが、その中に外へ出て行つた。夜逃げをする位だから、素より近邊の商家などには少しも信用もなかつたの

であらうが、その男はそれをどう說き付けたものか、酒屋から酒を一升持つて來させて、更にまたその酒屋の小僧に言ひ付けて、鰻のドンブリを註文にやつた。鰻のドンブリと考へたのは、その人のエライ所で、蕎麥屋にしろ鮨屋にしろその日の中に容れ物を取りに來るが、鰻屋に限つてはその晚の中には取りに來ない、必ず翌日取りに來るのである。所がその男は十分世情に通じてゐたものだから、鰻のドンブリを持つて來させたのでせう。その晚はそれ等の物を飲食して、夜具も無く空屋に寢て、翌朝になつて起きたのが、朝九時か十時頃だらうか、その前を屑屋が通つた。すると屑屋を呼び止めて、オイ此の家は引越して出て行つた跡だが、今押入を探した所が、こんな物があつた、買つて行かないかと言つて、出したのは前夜食つたり飲んだりした德利とドンブリとであつた。それを賣つた錢を懷にして飄然として出て行つてしまひました。並の人ならば酒を飲み倒しドンブリを喰ひ倒すまではやるであらうが、容れ物を賣り飛ばすまでに至つたのは極めて面白いやり方で、殘る方なき仕方だ。その人が後には守田勘彌の參謀になつて債權者との折衝、金策の方法等を講じたと云ふ事であるから、ます〳〵面白いのだ。その人は、或る時には空屋に轉がつて居つたこともあらうし、或る時は千金を懷にして豪遊したこともあらうし、餘程面白い生活であつたと思ふ。此の人は年四十許りで死んだと云ふが、餘程面白い人間ではないか』と言つて、齋藤君が私に

話した。私のやうな辯の惡いものが話したのでは少しも面白くはないが、齋藤君は例の覺え帳式のやり方で話されたのだから、餘程面白かつたのです。その外齋藤君は色々の事を話されましたが、急には思ひ出せませぬ。また『明星』にゆつくり書くなり話すなり致しませう。

齋藤君はまた手紙の面白かつた人で、方々集めれば面白い手紙もありませうが、齋藤君は極く簡單で面白い手紙をよこす人でした。一つ見本を御覧に入れてもよいと思ひます。それは齋藤君から『みだれ箱』を贈つてくれましたから、その禮を言つてやつた時に、私の方からやつた手紙は高著『みだれ箱』御惠投云々と云ふ事を書いて、その中の『青眼白頭』と云ふのに、『案ずるに筆は一本なり箸は二本なり衆寡敵せずといふべし』とあるのを引て、でも君の筆は健だから、箸二本との健闘を續けてゐるであらうか、僕の筆は極く弱いから箸の爲めに全く征服されてしまつてゐると書いてやつた。處が此の手紙をよこしたのであります。

『高著』御禮にて痛入り候御承知の通り首の廻らぬ身は筆も廻らず箸も廻らず斯うなると目もあまり廻らぬものに候御笑下さるべく候

御依囑の件は小生の『箱』の景氣を見定めて打出さんと存居り候わけに候いつぞや申上候如く小生方迄御送附置下されたく存候

秋ゝ（秋ポツと御よみの事）子は先日小生よりたよりいたし候處其返事に近來は農業熱心云々依て小生はこれを獨悦的農夫と稱へて洪水見舞のハガキを出し置申候人の戀には啄を容る可らず無論傍觀の方御得策と存候すてゝおくのも不親切との仰は御尤もに候へども先方から見ればそれが親切かも知れず候

昨夜フト例の彌次馬歌をやり申候

笛の音のすみれの岡の薄月夜

誰が子麓を白き駒やる

外に二つ澁谷大人へ點を乞ひに遣はし候コンナ事を申居り候うちに晦日は容赦なく參り候餘は御目にかゝりてと申すものゝ着のみ着たまゝ外へは當分出られず候

返すぐも岩崎を伯父さんに持たざる事七生迄の恨に候これればつかりに市長にもなれず候

二十六日　綠雨

これは、三十六年の五月二十六日の手紙でありますす。

かういふやうな種々な面白い手紙は方々にあらうと思ひますが、作品でも集めるやうになつたならば、方々から貰つて集めるといふと面白い物があらうと思ひます。どうせ諸君に願つて、これま

で一冊にならないで方々の新聞雜誌に散在してゐるものを集めやうと思つて居ります。

齋藤君は、人の日記などを見て、往々意外なことがあるといつて、日記などは決して書くもので無いと、常々話して居つたのですが、今度、死際に、家人に指圖をして、あらゆる書類を燒かせたのも、同じ理由であつたらうかと思ふのです。尤も、日記といふほど纒まつたものは實際無かつたやうです。佛蘭西のアルフォンス、ドオデといふ人の隨筆のなかに『友人のツウルゲエネフの日記様のものが、その死後に公にせられたのを見ると、自分を容赦無く批評がしてある。ツウルゲエネフは、屢々自分の家へ來て、最も親しくして居た人であつて、いつも莞爾々々笑つて居た人で、その手紙には、實に親切な、暖かな友情を表はしてる言葉が充ちて居るのであるのに、其當時も、その人の心の裏には、かういふやうな批評的の考があつたのであるかと思ふと、希臘語のアイロニヤといふのが如何にも妙味のある言葉であることを、今更ながら、感ぜざるを得ない』といふことが書いてあるのですが、若し齋藤君に、日記があつて、それに、何事も容赦無く書いてあつたならばあの深刻な鋭利な觀察眼に、我々友人の個々の性格が何ういふ風に映つて居たかといふことが明に解るだらうし、餘程面白いものであつたらうかと思はれるのです。しかし、日記を作るとかいふやうな事の平常から決して無かつたのは齋藤君の齋藤君たるところでありませう。一體が、世事に明

るい人だつたので、話の題目は多方面に亘つて居て、座談で個人の評をしたり、個人の欠點を指摘したりといふやうなことは餘まり無かつたのですが、私の知つて居る所だけでは、坪内博士には大に敬意を表して居たし、幸田君には甚だ心服して居たのです。しかし、一般にいふと、友人は、それぞれその長所に因つて、相當に重んじた人であつて、現に私などは、齋藤君に比すると、ずつと後輩でもあるが、私の文集を、根岸の弘文社から出版させるやうにして呉れられた時などにも『談判の都合上一應眼を通すといふことにはしたけれども、飜譯文ではあるし、僕が自分の考通りに直す譯には行かぬから』といつて、私が假名で書いた所を字にするとか、字である所を假名にする位に手を入れたのみで、序文も先方で書けといふのだが、何かといつて相談もしたし、草稿もこれで宜しいかといつて私に見せによこした位であるのです。齋藤君は自ら重んずることの深い人であつたので、人も同じやうに自ら重んずるのを察して、決して人の自重心を傷づけるといふやうなことを爲無かつた人であるのです。齋藤君が若し藝術上の良心に乏しい人であつたらば、隨分、代作とか合作とかいふことで、收入を增すことも出來たらうと思はれるのですが、決して、そんな事を爲無いで、毅然として、あらゆる困難に耐へ、あらゆる不便を忍ばれたのは、甚だ敬重すべきことだと思ふ。殊に近頃のやうに、原文を少しも見ずに、他の人の飜譯した文章ばかりを見て、こゝが日本

文では面白くない、彼所が妙で無いといふやうなことで唯書き直して、麗々と名を署して公にするといふやうな世の中では、更らに齋藤君の態度の藝術上高潔であつたことを敬重せざるを得無いのです。併し、それもこれも、世の中のまだ不完全な所のある結果で、常人では、赤貧では苦しいから、間に合はせの仕事も已むを得ずせねばならず、また、それをやらなければ、友人なり親類なりの比較的工面の宜い所から救助でも仰がねばならぬ事にもならうといふ譯で、要するに、社會未進の爲めから來る欠陷であるのです。出版物が西洋のやうに澤山賣れるものならば、出版者の利益も多からうし、從つて十分に融通もつくのであるから、有爲の作家は書かうが書くまいが、雇ひ切りにして置くといふことも出來るのであらうけれども、今の處では、さういふ事は到底出來無いのです。卽ち、今のやうな社會では、人を助けやうと思へば、自分も共に倒れるつもりで爲ければならない無いのですから、誰も思ひ切つて、救助に赴くといふことは出來無いのです。で、かういふ社會では、人が無情だとか、人情が浮薄だとかいふのは、少し酷であつて、全く社會組織に不完全な所があるからで、罪は全然社會にあることゝ思ふのです。人は助け度いと思ふけれども、それが出來無いといふのは、どうしても、その人の罪では無いのだらうと思ふ。それで、かういふ世の中へ生れて文士だとか、學者だとかいふ位地にある人々は、全く堀の埋草になつて了つて、後世の人々が前

進する路をつけるばかりといふ覺悟で居無ければなるまいかと思ふのです。文士といふものは愚劣なものである、社會に對しては少しも貢獻する所が無い、殊に西洋の文士に比すると劣る所が甚だ多いといふやうな議論を時々耳にするけれども、これは我邦の人々が一般に進步して居ない結果で、謂はゞ、社會未進の有樣であるから、物質上のことに對する要求ばかりが多いのでいまだ文學美術といふやうなものを十分味ふ餘裕が無いからであらうと思ふのです。詩だとか、小說だとかといふものは、どうしても、直接に、金儲の秘訣を敎へるものでも無ければ、政治上の革進の方法を指示めすものでも無いのであるから、今日の如く、民衆の多數から、文學が無用物と視らるゝのは、已むを得無いことであるのです。それで、我々共は、何といはれても、例へば、愚痴といはれやうが、卑劣といはれやうが、どうも致方が無いのです。我々どもは、今信じて居るやうな進路を何處までも執つて行くより外に何とも致しやうも無いわけであるのです。不完全な世の中では、個人の生命財產を保護する爲に時々腕力を用ゐることが必要であるやうに、國民の利益、安全を保護する爲には、戰爭も已むを得ずしなければならぬ譯であらうけれども、唯、軍艦を動かす事や鐵砲を打つことが上手なばかりで、外の文明的の事業は何も發達せぬといふやうな國民は、甚だ前途が危いことゝ思ふ。我々が重んずる文學といふ事業は、戰爭があるから、無いから、といつて、別に異は

つたことも無いのであつて、これは、永遠に人間に必要な事であると思ふのです。どうか、我邦現時の有爲の文士諸君は、十分愼重な態度を執つて、社會俗衆の毀譽を眼中に置かずに、その信ぜらるる所によつて勇進せられむことを切望しますのです。それで、齋藤綠雨君の忍耐と、その藝術上の態度の如きは、十分我々の師表とするに足ることであると思ふのです。どうか、あゝいふ勇氣のあつた文士の盡力の空にならぬやうに、我々文界の繼承者たるものは十分努力したいものと思ふので御座います。

山田美妙氏を憶ふ

明治文學のことを言ふ人々は大抵、言文一致を創始した功勞者としては二葉亭四迷氏を第一に擧げる。無論吾々はそれには異議はないが、併し、二葉亭とは並稱する譯には行かぬにしても、山田美妙齋のその方面に於ての努力に對して一顧も與へぬといふのは、公平でないと思ふ。

山田氏は尾崎紅葉氏よりも少々ではあるが先んじて名を成した人である。その最初の單行本『夏木立』が出た時分は、まだ紅葉氏の作物は纒まつたものはなく、美妙氏の『花ぐるま』が金港堂の小說雜誌『都の花』の卷頭を飾つた時分、卽ち二十一年頃には、美妙齋は硯友社の誰にも優つて、花形役者であつたと僕は記憶する。美妙氏の言文一致は『です』とか『ました』といふ語尾のもので、一寸輕い調子のものではあつたけれども、これも、當時の才人であつた美妙氏の新しい試みと見ることのできるものであつたと思ふ。『花ぐるま』の一節の初めの字を假名で大きく華文字やうの繪の形にしたのなども、なか〳〵の才氣の表はれた大膽な工夫であつたと思ふ。

詩の方面に於ても、美妙氏は當時の人々に先んじて、新天地を開拓しようと努力した。二十二年

に雜誌『國民之友』に出た『胡蝶』の如きは全く勇敢な斬新な突進であつたと言はなければなるまい。

美妙氏と別れた田澤稻舟女史が自殺したがために、美妙氏の人氣全く地に墮ち、文壇から殆ど隱れ去つたので、それ以前の功績が全く忘れられてしまつたのは、美妙氏のためにはまことに氣の毒千萬だと思ふ。當時は世間は固より文壇の氣風さへ、古めかしいものであつたので、男女間の問題に就て冷靜な觀方をするだけの餘裕がなかつた。さういふ點は今日とは雲泥の違ひである。男女間の問題はさう一概に武斷する譯には行くまいといふ意味の言をなした吾々は『早稻田文學』の諸君から頭から叱られた。それから、十二三年もたつてから、島村君と須磨子の事件が起つたのだから堅い早稻田の諸君は義理にもあのやうに周章せずにはゐられなかつたであらうと思ふと、今も尙微笑を禁じ得られない。美妙氏の中期のものでは『鰻旦那』といふのが評判が好かつたやうに記憶する。山田氏の晚年は、如何にも振るはなかつた。けれども、これをもつて、氏が若き時分の努力を全然容認しないといふのは、冷酷である。

明治文學の胎生期に善く働いた人として、山田美妙氏は文學史中に相當の位置を與へられて宜しい人であることは疑ひがない。

あの頃の川上眉山君

『明治二十九年一月七日午前九時十二分といふに（國府津行の汽車は九時十二分と覺ゆ）新橋停車場に車を乘付たる人を誰と思召し候ぞや。長身六尺ひよろ〳〵として楊枝のお化の如く眼鏡の下より八方を見渡せども笑止や尋ぬる人の影だに見えず、上等待合室中等待合室そこら八面間の拔けたい、すりのやうな目付でうろつく折しも後より聲を掛たるものあり、それかとばかり振返れば、あらず、京の藁兵衛と名乘る。しばらくありて又々聲を掛くるものそれも違つて高田商會の社員なり。やゝありて又々聲を掛くるものそは春亭九華なり。あること幾時遂に馬場孤蝶子を見ず。藤村子秋骨子猶更の事なり。茫然として夢を見たるが如く立歸りたる此時のさまを君は何と思ひたまふや。塵途忙々事にまぎれて未だ音をも接せず、越えて數日君が江州よりの信にあふ。されども思へ予は君が既に彥根にあるを信ずる能はざるが如き心地するを。すでにして又君が江畔よりの書に接す。君が情に感じて直に書を裁せんしたるを人に妨げられ荏苒今日に至りて證文の出し遲れのやうな事をいふこの詩人の間の拔けた處なるべし、いひたいことはまだ澤山あるんだけど、今又用が出來てこれ

から出掛けねばならぬ。無據く中止して後便に讓る　　草々
二十七日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　亮
勝彌樣
大磯の空はいかゞなりしや。國府津行の又引返しなどは頗る怪しいぞ。樂々園の寫眞版が日用全書の中にあつたから切拔いて封じ込めた。いゝ處ではないか。君はこんな處にゐて不足をいふのは間違つた事だ。』

これは年四十そこ〳〵で不幸な終りを告げた眉山川上亮君の手紙である。僕は明治二十八年の秋から彦根の中學校の教師に雇はれて行つてゐて、冬休みに東京へ歸り、それからこの手紙にある通り一月の七日に彦根へ向つて立つた。文中にある通り時間の間違ひか何かで折角見送りに來てくれた川上君に無駄足をさせてしまつたのだと思ふ。

川上君はかなり骨太な體格であつたが、肥滿してゐるといふ方ではなかつたので、身の丈が五尺七八寸は確かにあつた爲めに一寸見ると細身のやうに見えたのだ。京の藁兵衛といふのは堀といふ人であつたと思ふ。『滑稽類纂』といふ小唄を集めた著書がある。春亭九華は丸岡氏で、硯友社の始め

頃『我樂苦多文庫』に二三の著作が表はれてゐた。藤村子、秋骨子は勿論島崎、戸川の兩君であるが、僕はこの時兩君と一緒に湘南あたりへ出掛けたか、どうか更に記憶がない。樂々園といふのは御承知の彦根の城の下にある井伊侯の別墅であつたところで、その時分は勿論今日の如く料理屋兼旅館になつてゐた。日用全書といふのは博文館から出てゐた、今日でいはゞ家庭叢書といつていいやうなもので、樋口一葉の『女子日用文』などもその一卷を成してゐたのだ。

川上君はこの手紙の時分は、小石川上富坂四十番地に住まつてゐた。三浦梧樓氏の屋敷の横手の通りの坂の降り口の左り側の道に直ぐ沿つた家であつた。そこには高瀬文淵氏が同居してゐた。僕が川上君を知つたのも、その家であつた。平田禿木君に連れて行つて貰つたと思ふ。多分二十八年の三四月頃であつたらう。

僕はその時分本郷龍岡町十五番地に住んでゐたので、川上君が二遍ほど泊つたことがある。始めて泊つた時に川上君は、

『寢てゐて飛んでもない大きな聲で叫ぶ癖が僕にはあるのだから驚いてはいけない。』

と云つて床へ入つたけれども、僕の家では一度もそんなことはなかつた。

その家の隣は僕の親類の住居であつたので、塀を切り開けて交通してゐた。隣では僕の親父のた

めに、庭の南端へ弓を射る場所を造つて置いてくれたので、或る日そこへ川上君を案内した。川上君が弓を引いてゐる形を見ると、いかにも引きが足りない。そこで『もつと引き給へ。もつと引き給へ』といつて引けるだけ引かした。そこで矢が放れるとぽんと弓返りがした。川上君は『始めて弓返りがした』と云つて、大喜びであつた。『尾崎と一緒に弓を引いたんだが、あの男は、そこがいけない、こゝがいけないとやかましくばかり云ふので手も足も出なくなつてしまふ』と云つて川上君が笑ふので、『さう一遍に云つたところで直せるものではない。根本だけきめて置いて、あとは進歩に從つてそろ〳〵直すんだね。弓返りのしなかつたのは引きが足りなかつた爲めだ。これからやるんなら今日のやうに何處までも引張り抜くといふ心持でやり給へ』と云つて僕も笑つた。けれども川上君と弓を引く機會はそれきりなかつたと思ふ。

川上君が樋口一葉と知つたのは富坂にゐた時分であつた。一葉の日記によると、それは二十八年の五月の二十六日のことである。時間は午後の三時頃で、平田君と川上君と僕の三人が一葉を訪ねて夜の九時頃まで話し込んだとある。

川上君のお父さんは本鄉春木町に住まつてゐたさうだが、それが亡くなつたのは二十九年の四月頃であつたのであらう。川上君の實母だつた人はもうとつくにゐなくなつてゐて腹異ひの若い弟さ

んなどが大勢あつて、その始末には川上君はなか〳〵苦心してゐたやうであつた。富坂の家を疊んで旅へ出たのは、その年の暮近くであつたらう。名文『ふところ日記』を書いたのはその旅中であつた。それから牛込の南山伏町に家を持ち、間もなく北山伏町へ引越し、そこで三十五六年頃に結婚したやうに記憶する。

川上君は如何にも美しい文章を書く人であつた。さういふ方では『ふところ日記』が代表的作品といつていゝであらうが、殊に俳文だつた短い文章に才氣横溢するものを見る。尾崎紅葉君の友人門下から成つてゐる藻社の名で、紅葉の靈前で讀まれた祭文が金玉の文字といつていゝ程の美しいものであるが、これは眉山君の筆になつたものである。

川上君は字のうまい人であつた。紅葉君と同じ流儀の字である。紅葉君は蜀山を習つたさうなんだが、川上君も矢張りさうであつたのではなからうかと思ふ。硯友社の諸君は大抵罫引きの原稿紙は用ゐなかつたやうだ。いゝ半紙の下へ罫を引いた紙を入れて置いて、その上から書いた。で、あとで罫を引いた紙を取つてしまふと、原稿は白い半紙の上へ字數を揃へて書いたものになる。川上君の原稿などは旨い字で書いてあつたので、いかにも綺麗なものであつた。

川上君は話聲なども優しい人當りのいかにも柔かな人であつた。從つてよくものを堪へた人であ

つて、自分の境遇などをあまり人に打ち開けなかつた。さういふ風で、人知れぬ苦悶が多かつたのであらう。酒はかなり强かつたやうだ。三十前後の時分には一升位は飲んでもさう亂れはしなかつたやうだ。

兎にも角にも、川上君の作物は明治文學中の最も勝れたる文章の一つとして殘るべきものであることは疑ひがない。僕などは唯徒らに老境に入つてしまつて、依然として文筆を執つて陋巷に蟄してゐるのだが、かういふ手紙を讀み、吾々の三十前の交遊を想ひ、當時の川上君のことなどを追憶すると、まことに感慨に堪へない。

序に、明治二十八年十月二十二日の消印のある川上君の葉書を見出したから書添へる。

うたゝ寢の夢にまたもや君を見申候。枕頭の秋いとゞ身にしみ候。いよ〳〵君を見まほしく候。彦根はいづこ、雲の外、思へども見えず、望めども見えず。

あふことはかたしく袂今宵もや、夢をまことの身をたのむべき

などと女めきたる愚痴になり候。この心を何と申すべき御一笑下さるべく候。

霙降る夜

一葉女史の日記『水の上』の二十八年五月二十六日のところに左の如くある。

『馬場君、平田ぬしつれ立て川上眉山君を伴ひ來る。君にははじめて逢へる也、としは二十七とか丈たかく色白く、女の中にもかゝるうつくしき人はあまた見がたかるべし、物いひて打笑む時頬のほどさと赤うなるも、男には似合はしからねど、すべて優形にのどやかなる人なり、かねて高名なる作家とも思へず心易げにおさなびたるさま誠に親しみ安し……眉山君は春の花なるべし、つよき所なく艶なるさま京の舞姫みるやうにて……』

眉山君は全く奇麗な人であつた。頬に何時も血色のうるはしい赤みがさしてゐて、顔の色が如何にも奇麗に見えた。鼻筋も通つてゐたし、眼もいかにも優しかつた。唯少し身體は勿論すべての道具立てが大き過ぎた。せえは五尺七寸位は確にあつたらうし、骨格もそれに伴つて骨太であつた。眉山君にして責めて丈がもう三寸位低く、顔の道共立があのまゝで小さかつたら、全く女にも餘りないやうな奇麗さであつたらうと思ふ。眉山君は身體が大振りであつたがために、その顔立ちの優

しさ、美くしさが餘程消されてしまつてゐたと云つて宜からう。さういふ感は、後年になるとますます眼立つて來たやうに思ふ。

それに、天二物をかさぬといふところであつたらうか、あれ程奇麗であつた眉山君の顔にも、一ケ所缺點はあつた。右であつたか、左であつたか、今明らかに記憶しないが、小鼻の片側の方だけ潰ぶれたやうになつてゐて、その側から見ると、眉山君の容貌が見劣りがするのであつた。

川上君自身がそれを云ふまで吾々のうちでは誰もそれに氣がついた者はなかつたやうだ。『文學界』連中のと一緒に寫眞をとる時に、眉山君は『僕は片つぽの鼻の先きの形が惡いから、いゝ方から寫して貰らはなきやアいけない』と云つて、身體の向きを變へるか何うかしたのを覺えてゐる。成る程さう云はれてからは、眉山君の鼻頭に僕も氣がつきだした。

『何處かの子どもがね、竹馬に乘つてゐて「やア此のおぢさんのに頭は一錢銅貨が載つかつてらア」と云つたよ』

眉山君は、當時龍岡町にゐた僕の家へたづねて來て吳れた時か何かに、さう云つて笑つて話した。眉山君の頭の頂邊の禿の方はその前から僕も氣がついてゐた。

そんなやうな或る日のことであつた。眉山君はあぐらをかいて坐り込んでゐたが、下帶なしだと

見えて、前が少し開いて見える。もう當人が氣がつくかと思つて、受け答へをしてゐるのだが、一向に氣がつきそうでない。こちらはこちらでなるべくその方は見ないやうにはしてゐるものゝ、何うも氣になつていけない。到頭、そのことを注意すると、眉山君も大笑しながら、前を繕つた。

『もつと早く云つてくれゝばいゝのに、さんぐ〵見といたあとで、注意するのなんぞは、人が惡いぢやアないか』

『イヤ、君の方で早く氣がついてくれゝばいゝと、先つきから、しきりに祈つてゐたんだよ』

僕はさう云ひ分けをしたと思ふ。

『僕の知つてる男で、道を歩るいてゐると、後から、もし〳〵と呼びかけられたんで振り返へると自分の下帶が結んだまゝで、スポリと拔け落ちたと見えて、路の上に落ちこつてゐたといふんだがね。隨分呑ん氣な男もあつたものだね』

眉山君のさういふ話は、此の時聞いたのではなかつたかと思ふ。

上田敏君

僕が上田君に初めて會つたのは明治廿七年の初め位のことであつたと思ひます。後でもさうですが色々と變る人もありますが、見たところの上田君は餘り變らなかつた樣です。若い時の上田君は勢のいゝ、洒落れた事を言ふ人でした。學問好きで、本好きで、よく色々なものを讀んでゐました。トルストイの『クロイツチエル・ソナタ』などを上田君が、馬場が面白がる馬場向きの本だと云つて、貸て吳れたこと等がありました。その時分には平田禿木、戶川秋骨の兩君が池之端七軒町の同じ下宿屋に下宿してゐましたので、上田君も、よく來て話をしました。

『文學界』の連中では、平田君が一番上田君と親しかつたやうで、たしか高等學校で同級だつたかと思ひます。之で上田君を仲間へ引き入れた譯なんです。上田君はひどく勢がよかつたと申しましたが、大變に上品で、若い內にも、餘り亂暴なことなどは云ひませんでした。大分一葉の日記の中にも出てゐますが、上品で落着いた、穩やかな人と書いてあります。

『帝國文學』などの出來だしたのはあれは三十年頃でしたらうか、その時分からか、その少し前か

らか、一體『文學界』に從來の關係者も我々もあまり筆を執らないやうになつて、上田君は『帝國文學』の方へ多く筆を執りました。で、二十八年頃から私は地方へ出ましたから、その間の上田君は知りません。從つて上田君の處へは暫く行きませんでした。それから三十五年頃から又上田君に會つたりしました。それは上田君が僕より前に『明星』へ物を書き、僕も平田君に勸められて『明星』へ原稿を書く、そんなことで、又上田君と親しくなる樣になりました。さうして三十七年頃からですか、よくあの西片町の上田君の許へ行つて夜中まで話したものです。

其時分森田草平、生田長江、栗原古城、中村古峽、川下江村、五島駿吉、辻村鑑などの諸君が集まつて『花雲珠』と云ふ廻覽雜誌を出してゐたのでしたが、僕は偶然に諸君と親しくなつたのでした。その連中は上田君の敎へを受けるやうになつたところから、皆一緒に集つて雜誌を出さうと云ふ事になり、銀座の細川芳之助君に島崎君が口を利いてくれて、金を出して貰ふことが出來たので、三十九年に出し初めました。それは、上田君と僕とが監督して、生田森田兩君が重に書くかたちでした。その雜誌は上田君が前にやつてゐたことのある『藝苑』の名を今一度使ふ事になつて、暫らくこれをやつてゐましたけれ共、その內に吾々どもが飽きてしまつて遂にやめました。

上田君が洋行して、やがて歸つて來るや、京都へ行つてしまひましたが、親切な人でよく訪ねて

は呉れましたので、僕も會へる機會を求めて會ひました。年に一二度で、而かも僅かしか會ひませんでした。それで最後に會つたのは大正四年九月頃で、色んな話をした末に頻りに東京へ歸住の事を話しましたところが、いづれさうする積りだと云つてゐました、が、一寸の間話したに過ぎませんでした。――何でも九日の夜九時頃に、與謝野君が入澤博士から上田君が危篤だとの知らせがあつたからすぐ行くと言つて來たので、私も一緒に行きました。九日の三時に死んだのでしたから、死顏を見て引取つた樣なわけです。どうも歸朝後身體が惡くなつた樣です。三十四五年頃迄酒を飲んで、可成り强かつたらしいのです。尤も若い時分にはさして飮まなかつた樣ですし、仲間に飮み手がありませんから、醉つたのを見ませんでした。病氣は膽石、黄疸、中耳炎、腎臟炎と色々あつたので、そんな病氣が重なつた結果であつたのでせう。六日に歸京して、八日の午前に急に惡くなつて、それで知覺を失つて、その日に亡くなつたといふのです。

考へて見ると、どうも上田君は、所謂學者であつて、作家であるにはも少し、一體にくだけてゐなくてはいけなかつた樣です。どうも堅いところが少しあつて邪魔をしたものゝ樣です。誰一人として、上田君の馬鹿々々しいことをやつてゐるところを見た人はありますまいし、一緒に暴れて、後で馬鹿話をする樣な友達が極めて――あつたかもしれませんが――少かつたらうと思ひます。

話の面白い上手な人でありましたが、どうも人の話を聞き上手ではなかつたと思ひます。どんどん話して、聞き手は大變いゝが、此方の話をする機會がない、間へ口を挿むことができないといふ風に思つた人があるかも知れません。比較するのは面白くないが、夏目君の應待振りは實に巧いものです。自分から話を持ちかけて、相手に話をさせ乍ら自分が、其間に口を入れて、相當に話すと云ふ遣り方です。色々と性格の上の關係其他もありますが、夏目君は練れた遣り方です。上田君にはまだ練れないところがありました。之れは年齢の相違や、色々なことから來てゐるでせうが。

上田君の文學界に於ける功勞は、まづ早い時分に新しい外國文學を紹介したにあるので、殊に三十八年に出したんでしたか『海潮音』は佛蘭西象徴派の詩人の譯詩集で、これは當時の詩人のいゝ教科書となり、當時の詩の傾向に大影響を與へ、隨分あれのお蔭で自分達の作風をきめた人の多いのを認めます。文學界に影響の大きな點では著書中『海潮音』が一番注目すべきものだと思はれます。

今から思つて惜しいのは、色々な都合もあつたでせうが、京都へ行つたことです。自分でも餘程淋しかつたのではないかと思ひます。我々は田舍者ですから、何處でもさほどの違ひはありませんが、上田君の樣に、父祖傳來の東京人が、京都へ行つて、長く暮すのは、色々な趣味の上から、何

たか、ひどく外の土地へ行つたと云ふ感じが强かつたらうと思はれます、若い時分に、まだ大學の時代や、卒業して早々の頃には旅行をしない方でした。田舍は嫌ひだと云つて、餘り出掛けませんでした。少し自分の趣味の上の負け惜みもあつたでせうが、兎に角嫌ひだと云つてゐました。其處から考へても、京都行きは隨分嫌だつたらうと察します。それからどうも一寸彼方の人と趣味も調子も違ふから、上田君の樣な人は、京都の文科にはえら過たかも知れません。從つて學生等が、一寸上田君の面白いところを認め得なかつたのかとも思はれます。謂はゞ上田君の樣な洗練された氣取つた趣味は、上方の人には、どんなものでせうか。その感じが徹底しなかつたかと、どうもさう思はれます。私は行く時も氣の毒だと思ひましたし、會ふ度に、嘸不自由だらうと思つてゐたのでしたが、最近には何だか轉任の出來さうな話を聞いて結構なことだと思ひましたのに、沙汰止みらしかつたのです。とは云ふもの丶、遠からぬ將來には歸住ができるものとして待つてゐたのでした。吾々の中では一番若い方で、身體も壯健な人でありましたから、かう早くとは思ひませんでした。友人達誰も皆意外であつたこと丶思ひます。

今にして思ふと、上田君は淋しい生活を送つた人と云はねばなるまいと思ひます。外的に見れば、順境にも見えますが、當人はどう思ひましたか知らん、も少し眞個に人間同士打突かる樣な生活を送

ると云ふ性格であつたらよかつたでせう。然し人各々生れつきがありますし、當人の心次第のもので、自分でも滿足してゐたらいゝのですが、我々他人が自分の心持からいふと、もつと、くだけた生活を上田君がやれたら、よかつただらうにと今でも思ひます。

上田君に就いては、幾ら考へても逸事と云つたやうなものが思ひ出せません。又大笑ひの種となる樣な例を見ません。一つ二つはあつてもいゝのでせうに、我々は少しも知りません。そんな風ですから、若い人などは、どうも、その或る程度以上に、上田君に親しむやうなことが、あまりなかつた樣です。何だか近來になつては、大分、自身でも淋しく思つてゐたのではないかと思はれる事があります。すると、淋しいとか心細いとかを餘り人に告げない人で、いつも勢よく見えただけ、それだけに尙ほ氣の毒だと思ひます。

鷗外大人の思出

故森鷗外大人の發病が何時時分であつたか、一向知らなかつた私どもに取つては、大人の遠逝の報を得た時には甚だ以て意外な感がした。あの何時見ても年寄染みたところの無い、率直な、勢の好かつた大人がもう亡き人であるとは、全く夢のやうな心持がする。

名高い、えらい人と親しくなる機會を持ち得無い私は、鷗外大人に拜面したことも矢張り度々とは云ひ得無い。一一數へては見無いが、全體で十回位なものであらうと思ふ。

故大人の謦咳にはじめて接したのは、與謝野君の千駄ケ谷のお宅で催された前期の『明星』の懇話會に於てであつた。それは明治三十八年の秋頃ででもあつたらうかと思ふ。

『しがらみ草紙』以來、論陣を張つては、如何なる小敵をも看過し無い辛辣な論鋒を進められる鷗外漁史は、定めし人としても、强い鋭い人といふ感じを與へるのであらうと思つて居たのに、實際の鷗外大人が如何にも柔かな暖かな、率直な人であつたのは、私に取つては全く意外であつた。

その時は私は少し後れて行つたのかと思ふのだが、鷗外大人の話されたことを今は餘り記憶して

ゐない。

唯蒲原君であつたかと思ふのだが、私が讀書好きであるといふことを鷗外大人に話すといふと、大人は、如何にも快ささうに頷いてから、

『しかし、餘り多讀するのも善し惡しで、これも結構だ、これも又面白いといふやうになつて、趣味の中心を失ふ虞がある』

といふやうな意味のことを云はれた。それから續いて、大人は獨逸の象徴詩の話を始められて

『餘程不思議なものだ。劍を拔いてじつと見て居ると、それが忽ち女になるといふやうなのなどもある』

と、いふやうなことも話されたやうに記憶する。

夜になつて、話が大分はづんで來た時分であつたと思ふのだが、私が

『此度の戰爭は實際日本が勝つたのですか』

と、聞くと、大人は、

『いや、大變なことを聞くぢやア無いか』

と、身じろぎするやうな身振りをして、快ささうに笑はれてから、可なり眞面目な顏になつて

『兎に角、世間でいふやうな譯のもので無いだらうと思ふ。奉天の戰の時などは、陸軍の公報では「敵は潰亂せり」といふのであつたが、私はさうは思は無かつた。露軍は十分に退却の用意を整へて居たことは明かであつたんだ』

と、云はれた。

それから、金州城の攻圍の際にも、日本軍には砲擊の準備が不十分であつたが爲めに、殆んど苦戰であつたことを話され、

『城を陷れてみて、始めて防備の完全であつたことが分つて、日本軍の砲擊の效の無かつた譯が明かになつたのだ』

と云はれ、それから倚進んで、日本軍が有效な砲彈をば如何にして得たかといふことの說明を吾々に與へられた。

私が新聞の從軍記事なるものが、何れも此れも千遍一律の觀があつて、陳套を脫し得無いことを笑ふといふと、大人も顏を顰めて、

『いや、實に馬鹿な話で、彼等は實際にはさまざま特徵のある事を見るのだが、それを筆に上すことになると、忽ち陳言套語の行列になつて了ふのだ。例へば、滿洲では、氣候が寒いのだから、士

がすつかり凍つて了つて、ぼろぼろになつて、それが河の氷上などには、黒く吹き寄せられてゐて氷が見えぬ位になつて居る。一望皚々たる眺などゝいふのはウソである。遼河の氷上などが矢張り黒土の吹き溜りであるんだ。所が、それが新聞の從軍記事では、全軍白雪を蹴立てゝ突進したとなつて居る。何處へ行つたつて、黑い白雪といふのがあるものか』

といふやうに答へられた。

その夜の歸りは、大人も吾々も一緒であつた。千駄ケ谷の停車場までの路は可なり惡かつた。劍の柄を取つて、地に着かぬやうに引き上げて、足場をよつて、吾々と言葉をかはしながら步いて來られた大人の穩かな體容が今も尙私の眼前にある心地がする。

大人は全く率直な人であつた。後進に對しては城壁を置くといふやうなところは少しも無いやうに見受けられた。殊に後進の秀才に對しては、自ら進んで親しくされたやうに傳へ聞いて居る。故上田敏君などには、ひどく信賴して居られたやうに聞いて居る。

更に衰へざりし鷗外大人

（一）

故鷗外大人は、如何にも親しみ安い、暖な、率直な人であつた。誰に對しても同格でつきあふやうな態度で居られたのは、實に敬服で、吾々の企て及ばざるところであると同時に、又吾々の心して學ばねばならんところであると思ふ。

大人は何時までも若き人であつた。從つて、何時までも進んで已まざる人であつた。大人は享年六十三であつたといふ。年齢から云つても、さう高齢ではない。大人危篤との報に接した時には、大に前途ある人を失ふやうな氣がして殘念で堪まら無かつた。

更に又、吾々の若い自分から、文界に卓立して居られ、種々の意味で吾々の刺戟となつた大人の易簀は、時代の推移を急に吾々の胸に響かすところの晩鐘の如き感があつて、甚しく哀愁の念に堪えなたつた。

『舞姫』に『うたかたの記』に、美しき熱情と、美くしき文體とを以つて、當時の文壇のフロントを占めて居た硯友社その他の諸派の作風以外に、尙行くべき路の廣きことを吾々に示されたのは、もう四十餘年の昔である。

シュビンの『埋木』、アンデルゼンの『即興詩人』、共に飜譯には相違無いのだが、その文字の自由にして、豊富流麗なる點より云へば、全然創作とも云ひ得られるものであつた。所謂る譯文もあれまでの名文になれば、原文との關係如何のごときは全く顧慮するに足らざるものである。恐らくは吾々に取つては、原文より以上に面白く讀み得らるゝ譯文であつたらうと思はるゝ。殊に『即興詩人』の如きは、文字の點より之を云へば、原文に優るとも云ひ得らるゝかも知れぬ。

明治三十八九年の頃だと思うのだが、大人は

『予の若い時分の飜譯は、所謂る氣を負うて紙に臨む底のものであつたので、原文の各部分をそのまゝ傳へるといふ標準から之を判すれば、固より欠點のすくなからぬものであらう』

といふ意味のことを或る人に話されたと傳聞した。果してさうであるか何うか、吾々は知らぬがフィッツゼラルドの『ルバイヤット』が、原文を離れて獨立の價値を有するが如く、鷗外大人の『即興詩人』は全く獨立の價値を有する名文であることは疑ひが無い。

文學的評論に獨立の位置を與へたのも、鷗外大人であつた。端嚴なる文字を自在に驅使して、正確なる論歩を進むる大人の評論は、全く時流を拔いて居た。その時分よりして起りかけつゝあつた文學的評論の向ふべき路を指示したのは、大人の偉功と謂はなければならぬ。

要するに、三十代の鷗外大人が當時の青年に與へた指導は、その文體と精神とに於てゞあつた。

（三）

クラシカルな精神とクラシカルな文體とで、當時の文壇に於て巨人の如き位置を占めて居られた鷗外大人が『そめちがへ』を公にせられたのは、全く人の意表に出でた觀があつた。その物語の仔細は記憶して居無いが、事は花柳界の人々の間に起つた可なり粹なものであつたやうに思ふ。文體も後年の言文一致體と氣脈を同うする餘程碎けたものであつたやうに覺えて居る。

大人晩年の作では『雁』を甚だ面白いと思つた。大人の學生時代の無縁坂あたりの雰圍氣の豊に表れて居るのが、私には非常に興味が深かつたのだ。

既に定評ある大人の作品を此所に一々擧げるのも煩はしいのだから、それ等は此處では略することゝするが、吾々の敬服措く能はざる點は、大人の如何なる場合に於ても綽々として餘裕ある態度

であつた。藝術は幾分現實の境地よりの擺脱より生るゝ。藝術は作家の心に於ける餘裕を基礎として生れるのだ。如何なる事件を描くに當つても、その事件の程度とプロポーションを見失は無いのは實に巨匠の心境である。

物に執すること無きは至人の心であるといふ。少くとも鷗外大人の晩年はそれに近いものであつたと云ひ得られるであらう。

所謂るアソビの心持、人間の元氣も勇氣も其處に根ざしたものが本當のものである。少くとも、我國の如き國に於て心豊に住み得る心のブオヤンシイは此のアソビの心持から生ずると思ふ。

明治四十二三年の頃でもあつたらうか、與謝野寛氏の外遊送別會の宴で、鷗外大人は隣席に居た私を顧みられて、その當時私が書いた二三の小說に就いて

『君は背水の陣を布いてやつて居るのだから、大に宜しい』

と、云はれてから、

『書かうと思ふものを三つ位書きかけて置て、此方が倦きたらその次ぎ、その次ぎが倦きたら、又その次ぎのものといふやうに、あつちこつち少しづゝ筆を着けて居るうちに、何時の間にか、同時に三つとも出來上るものだ。君もさうしてみ給へ』

と、話された。

『それは大人にして始めて出來ることなのだ。僕などは書くことを一つ考へつくのが、やつとなんだものを』

と、私は心のうちで思つて、苦笑せざるを得無かつた。

（三）

鷗外大人は如何にも率直な、誰に對しても胸をうち開いて話をするやうに見受けられた人であつた。軍籍にあつた人でありながら、可なり遠慮の無い話をされる人であつた。

或る會合の食卓で、誰かが、日本人で外國人に對して心持の惡るい程ルウドな言動をするものゝあることを痛嘆すると、大人はご自分の軍服の襟を引張るやうにして叩きながら、

『こ、これの連中がさういふことでは一番いけ無いんだ』

と、可なり力の籠つた口調で云はれたことがあつた。

率直なる鷗外大人は、可なり勢好くものを云はれる人であつて、自説を主張されるにも大分手强いところはあつたやうであるが、それでも無理やりに押しつけるといふところは無かつたのであら

う と思はれる。

もう大正七、八年頃であつたかと思ふのだが、東京日々新聞で國詩といふのを募つた時には、鷗外大人がおのづから委員長の格になつてしまつて、選が了つてしまうと、字句を添删したり、假名遣ひを正すことなどは、鷗外大人の發言がもとになつた。ところで當選者中の誰かの詩のなかにあつた『……するよりし方がない』といふ句に至つて、大人は『よりし方が無い』といふのは正しい言葉で無く、謂はゞ下品な書生言葉であつて『より外し方が無い』が正しい言葉であるのだから、さう改めるべきであると主張された。私はそれは鷗外大人の仰せの通りではあるが『よりし方がない』も兎に角今日では慣用語になつて居るのだから、强て改めずとも宜しからうでは無いかといふ意を漏した。大人は矢張り『外し方がない』でなければウソであることを可なり熱心に說かれたので、私は何づれでも宜しいことなのでそのまゝ默まつてしまつた。字句の添删は鷗外大人ご自身で加筆されてゐたのだから、無論『よりし方がない』は『よりほかしかたがない』と直されたことゝ思つてゐたのであるが、後でその詩が印刷されて、校正が私の手もとへ廻つて來たのを見ると、矢張り『よりしかたがない』といふ元のまゝになつて居て『ほか』の二字は加へてなかつた。綿密な鷗外大人が直し落しをされる氣遣ひはないので、それは何うしても、大人が私どもに對するご遠慮

から、直さずに置かれたものだと思はざるを得無かつた。私はその時鷗外大人の遠慮深いのに敬服の念を抱かずには居られなかつた。

（四）

鷗外大人は三田の文科には關係の深いお方であつた。第一期の文科では美學の講師であつたと聞いて居る。

明治四十一年か二年かに、文科の擴張を行ひ、『三田文學』の創刊をするに當つては、鷗外大人は顧問として非常に盡力された。永井荷風氏を推薦したのは、大人が上田敏君と相談せられた上でのことであると傳聞する。

『三田文學』發刊の相談會には、慶應義塾の幹部數氏と鷗外大人、上田敏君、永井荷風氏の外に私は末席を汚したのである。具體的の案はその時は確定し無かつたのだが、『三田文學』の發刊は大體に於てその晩の相談できまつたのであつた。

鷗外大人は日本文壇の大家として尊敬すべき人であつたと共に、三田の文科及び『三田文學』に緣故を有する吾々には忘るゝことのできない恩人である。

漱石氏に關する感想及び印象

夏目漱石君は長者の風のある人、客扱ひのうまい人、人によつて話をせられる人であつた。雄辯の人は概して客には話させないものだが、夏目君は客にも話させ自分も話されるといふ方の人であつた。私は明治四十年、森田君の家でお遇ひしたのが初めであつた。私の宅へも二度ほど來られた。私も行つたがさう度々は行かなかつた。

七月（大正五年）中旬、上田敏氏の葬式のとき式場の入口で一寸挨拶したきり、それから一度も會はなかつた。漱石君は實生活では複雜な變手古な生活をされなかつたが、あゝいふ人だから思想上ではいろ〳〵の生活をせられた。實際當つた生活は割合に狹い。作物の上に肉あり血ありと云ふ部分で十分でないといふことがあるとすれば、それは實生活に觸れた點が餘り無かつた所に原因することゝ思ふ。

君が後期の作物を見て感服するのは、書いたところに拔目なく、此處にもう一句あつたらば好く分るだらうとか、此處にもう一行欲しいとかと云ふ感じの起らない點である。私どもは夏目君の注

意力の廣く精密に油斷なく働いてゐるのを見て感服するばかりである。

夏目君は癇癪持ちだと聞いた事があるが、さう云へばさういふ所もあつたらうと思ふ。が、一方から言へば、多分腹の立つやうな心持ちになつて來ると、其の感情を抑へずにわざと口に出して見ることをやつてゐられたのではなからうかと思ふ。

頓才のすぐれて居られたのは誰でも氣のつく事であると思ふのだが、演說とか講演とかいふものを聽いた人は誰でも皆夏目君の當意卽妙の頓才に感服したことゝ思ふ。門下の某君が自身の小說の中に『子を作るのは awful なことである、何となれば自分の傳へて居る一切のものが子に傳へられ、子は亦それを子に傳へ、その子は亦その次の子に傳へるといふ風で、親が有つてゐる凡てのものが永遠に傳へられて行く。子を持つのはオーフルなことである』と書いたときに、夏目君がその某君に――『おれがクソをすると其のクソが野菜にかゝり野菜が育つて人に食はれ、人の血となり肉となる。で、その人は亦子を作ると云ふわけになる。故にクソの効果も永遠である、君の云ふ通りにすれば、クソをするのもオーフルだ』と言はれた。で、その某君が夏目君は他人の熱心を打ち消さうとするのに、戀愛のところへクソを持出したのは如何にもうまい、これにはひどく閉口したと話したことがある。

大正九年頃前かと思ふのだが、私は外濠線の電車で圖らずも夏目君と一緒になつて、少しの間話をしたことがある。その時夏目君は自分の口髭と兩鬢とのしらがをさして『こんなに白くなりました、でも頭の眞中は黑いのだが、この通り帽子を被ると肝心の黑いところは隱れて白いところばかり出ます』と言つて笑つて居られた。

人間五十頃になるといふと、あゝ云ふ夏目君のやうな理解力の豊かな人が知人の中からなくなると、甚だ淋しい心持がする。私が明治四十四年頃に、小說を少し書いたことがあるが、三田文學に出た『屈辱』に就いては夏目君が好く其の作中の人物の心持を理解して門下の人々にも說明されたやうに聞いてゐる。間接にも直接にも、私に小說を書けと勸めてくれたのは夏目君が一番度々であつたやうに覺えてゐる。吾々の行かうと思ふ方面で敎へを乞ふべき人であつた夏目君の長逝は吾々の如き所謂文壇の老朽者に取つては特に損失である。

これは私ばかりの感じではなからうかと思ふのだが、夏目君がもう少し若い時分から作者生活を始められなかつたのは殘念な事であつた。一方に於てはなか〳〵花やかな筆もあつたのであるし、感情に於ても決して乏しい人ではなかつたのであるから、それの盛んに流露するやうな若い時代に於て筆を執り始められたのであつたら、もつと盛んな作物が出たらうかと思はれる。夏目君の作物

の如何にも結構布置井然としてゐて、作者は何處までも冷靜であるといふところに何等かの不滿を持つ人々があるとすれば、其の人々は私どもと同じやうに夏目君の若い時分に作を始められなかつた事を殘念と思ふであらう。

然しそんな事は隴を得て蜀を望むといふのに過ぎないのであるから、我々は夏目君の與へられた丈けのもので滿足すべきである。しかも十分滿足すべき價値のあるものを夏目君が遺されたことには概ね何人も異存はあるまい。

要するに夏目君は人物として見ても作品から見ても全く特別な上等品である。手のこんだ念の入つた品物である。出來合では決してない。隨つてこれから先きも夏目君にひどく似たやうな人が出來やうとは思はれぬ、尤もそれには時代も考量する必要があるのではあるが。

夏目君のことでは、思ひ出せば色々のこともあらうと思ふのだが、今さし當つてはさう細かなお話をするわけには行かない。で、私の著書の中に書いた夏目君の事を左に引用する――

△

先生に始めて拜顏の榮を得たのは、明治四十年の冬頃かと思ふ。場所は、その時分森田草平氏の居た本鄕の丸山福山町四番地――故樋口一葉の住んだ家――であつた。

その時に僕が受けた印象は、先生の態度は、話し振り等に籠つて居る或る物が、故中江兆民、齋藤綠雨の態度、話し振り等に籠つて居た或る物と同じであるといふ印象であつた。二人の故人に共通であつたウイツトとしての風趣、即ち何處か飄逸とでも云つて宜いやうな趣が漱石先生にもあるやうに感ぜられたのだ。が、その感じは、漱石先生に僕が始めて拜顏の榮を得た時の感じであつて今日ではさういふ感じは殆んど無くなつて居る。今日では漱石先生の寛大な、溫藉な方面が、より多く私には感ぜられる。

△

漱石先生が帝國大學の學生で居られた時分には英文科の先生の組の學生といふのは先生一人きりであつた。所へプロフエツサア・ウードが英文科の教師として渡來せられた。ウード氏が始めて大學へ出席された日、漱石先生に教科書彼此れは相談の上極めるから旅宿の帝國ホテルへ來て吳れと云ふのであつた。で、漱石先生は外國人を訪問するのだからといふので當時の日本人の考でできるだけハイカラに仕立てゝ帝國ホテルへ出掛けた。尤も當時のハイカラは今日の蠻からで、漱石先生其の日のおん出で立ちといふものはその時分流行つた縞の――節は夏である――折襟の前は紐で締めるやうになつて居る襯衣の上に直接にフランネルの金鈕附の制服を着して居られたのだ。所でホテル

ではボーイに案内されて行くとウード氏の寢室へ連れて行かれた。奇異な所へ案内するものだとは思つたもの丶、さういふ習慣もあるものかと思つて室へ入ると、ウード氏は『フン』とか云つて一向に挨拶もせずに室にある革鞄に指をさした。漱石先生には一向何だか合點が行か無かつたが多分は革鞄の中には書籍が入つて居るから開けて出せ、さうした上でいろ〳〵相談しやうといふ意味であらうと推察したので、直ぐ立寄つて跪がんで革鞄の蓋を開けた。所が中には襯衣だの衣服の古いのなどが一杯入つて居るきりで書籍らしいものは影さへ無い。何うした事とも解らぬので、蓋を兩手で押し上げたまゝでウード氏の顏を凝乎と見あげて居ると、やがて氏は傍に來て蓋に手を掛けて元の通り蓋を爲やうとするので漱石先生は直ぐに元の通りに蓋を下した。と、ウード氏は又蓋に手を掛け開けやうとするので漱石先生も一緒に蓋を持ちあげた。漱石先生には何の事やら一向に解らぬ。さういふ同じ事を二度三度繰り返した後で漱石先生は堪らへ兼ねて、これは一體何ういふ譯なのかと尋ねた。ウード氏は『錠前が毀はれて居る』と云ふ。漱石先生はますます解せず、『錠前は成る程損じてゐるが、その錠前の損じて居ることゝ我輩との間に何等の關係があるのか』と斯う哲學的に尋ねた。するとウード氏は『でも御前は錠前直しだらう』と云つた。漱石先生こゝに至つて憤然と立ち上つて『否』と答へた。所でその"No."なるものが如何にも激烈な調子で云ひ表はされたものな

ので、漱石先生がその如何に錠前直しと呼ばれたのを憤つてゐるかが明に知り得られたからウード氏は少時呆れて漱石先生の顔を見て居た。がやがて『君はそれでは何ういふ人なのか』と尋ねた。『イヤ自分は文科大學の學生で、かう〳〵いふ用向きで來たのだ』と漱石先生が説明するといふと、ウード氏大に慌てゝ『ヤアそれは飛んでも無い間違ひであつた。實は錠前直しを待ち受けてゐた所へ入つて來られたので、一圖にさう思つて誠に何うも失禮をした。疎忽の段は幾重にも堪辨せられ度いI beg your thousand pardons』といふ樣な事を云つて、改めて漱石先生を應接室へ通らせて書籍の相談をしたといふのである。一體ならば前日教場で差向ひで話をしたのであるからウード氏は漱石先生の顔は覺えて居るべき筈であるが、ウード氏は日本へ來たての西洋人に有勝な通り日本人の顔が皆同じに見えて區別が付かなかつたので、斯ういふ間違が起つたといふのである。漱石先生の云はるゝには、その後西洋へ行つてから考へて見ると、自分の當時の服裝は西洋人の眼で見たら何うしても錠前直し相當のものであつたといふのだ。

この話は僕等のやうなウード氏によし半面識でもあるものには特に面白い。あの人柄な訥辯なウード氏が初め漱石先生を錠前直しと思つて扱かつた態度と、後の慌て方とが何と無く眼前にチラ付くやうな氣がするのだ。

これは明治二十三年の秋かと覺えて居るが、本郷の若竹へ越路が掛かつた。漱石先生はその時、令兄より拜領の外套――中古であるが仕立のなかく良い――を着せられて大分得意で聽いて居ると、傍に安座をかいて居たへんな男が『今日は休みか』と尋ねた。漱石先生は無論先方が此方を學生と認めてさうきく事と思つて『今日は休みだ』と答へた。それから先方がいろくのことをきくので相當の返答をして居ると、段々話が喰ひ違つて來るやうになつて、これは少し異樣だなと思つて居るうちに、到頭先方から判然と『お前は造兵へ出るのか』ときいたといふのだ。この話は漱石先生が前の話ほど描寫的には話され無かつたので是れ切りしきや書けないが何にしろいろくな者に間違へられたものでは無いか。

これは明治四十年頃のこと、漱石先生の早稻田南町の家へしかも庭先へ入つて來て先生に逢ひ度いといふものがあつた。先生が出て見られると緣先に十四五の少年が立つて居る。『用は何だ』ときくと懷から英語讀本を出して『讀めぬ所があるから其處を伺ひ度いのだ』といふ。先生が『お前は俺の所へ來れば分かると思つて來たのか、それとも當て無しに來たのか』ときくと『多分分かるだらうと思つて來た』といふのだ。――この問答では漱石先生の方が負けだといふ評である――で又『これから每日きゝに來る積りか』と問ふと『いや今日だけで宜いのだ』といふのであつた。で

少年を縁へ腰掛けさせて置て英語讀本の烏が木の實を啄つくといふやうな所を讀んで遣つた。前後を見ると一面に假名が付いて居る。烏の所ばかりは假名無しであるので何處かで習つて居るのかときくと、何處か牛乳屋なんかに奉公して居て、大學生の所へ夜學へ行くのだが烏の部分だけは缺席して抜けたのできゝに來たといふのであつた。少年は二三ケ月前に田舎から出て來たものであつたさうだ。夏目氏の直話を聞いた時には非常に面白く思つたが僕の取次では何うも十分にその興味を傳へることのできないのは殘念である。

△

これは又聞きの物語であるのだが、漱石先生が帝國大學で敎へて居られた時學生の中に一人何時も隻手を懷にしたまゝで講義を聞いて居る者があるのに漱石先生は氣が付いた。一面に於て潔癖な几帳面な漱石先生は、その學生の姿勢が甚く癪に觸つたと見えて、或る日の講義中に講壇を降りその學生の傍へ行つて『手をお出しなさい』と少し鋭つた聲で云つた。學生は顏を赤くしたのみで、何とも返答せず、又手も出さ無い、漱石先生は更に強く『手をお出しなさい』と云つた。が、學生は一層赤くなり魚の如く默して居るのみで、どうしても手を出さ無い。漱石先生は爲方が無いものだから講壇に戻つて如何にも不機嫌さうな樣子で講義を終つた。

と、その後になつて何時も手を懐に入れて居た學生の友人が漱石先生の家へ行つた。そうして、その友人は、その手を出さ無かつた學生は手を怪我して居る男なので手を出さ無かつたのでは無くして手が出せ無かつたのだ。と、漱石先生に向つて說明した末に、その友人は『下世話にも、無い袖は振られ無いと云ふではありませんか』と警句一番した積りで云つた。

眞面目な漱石先生はその學生に對して甚く氣の毒がつた。が、重厚なる紳士漱石先生は唯だまことに惡るかつた氣の毒なことをした、先方へ宜しく僕に代つて挨拶して呉れ給へ、と云ふやうな意味のことを云ふだけでは――普通の人がさういふ場合には大抵云ふやうなことを云ふだけでは――漱石先生自身氣が濟ま無かつた。漱石先生は此の際自分をも笑つて了まひ度かつたのだらう――傳者はさう云つて居る――漱石先生は澁い顏をして斯う云つた――

『僕等は無い學問を出して講義をして居るのだ。……君も氣が利かんでは無いか。無い手位出して呉れても宜いのに』

△

それからまた筆記のことでは、餘程面白い話がある。明治四十二、三年の秋あたりかと思ふが、夏目君の所へ行つて、雜談をして居るうちに、夏目君が『先日「文章世界」の記者が來て、談話を

筆記して歸つたが、その載つた雜誌さへ送つて來ぬ。一體談話に對して報酬をせぬと云ふのが大分議論のあることゝなんだが、それは、まア宜いとしても、その談話の載つた雜誌さへ送らぬと云ふのは、『怪しからん』と云はるゝ。予は『それが怪しからんどころでは無い、僕に云はすと、全體談話に報酬をよこさんと云ふのが、第一怪しからん譯だ。或る雜誌などからは、立派にその雜誌記者だといふ名刺を持つてやつて來る人があるけれども、實際を聞て見ると、その人の報酬は、持つて行く談話筆記の量で極ると云んだ。で、左樣いふ人に訪問せられた際には、此方は、ヨク〳〵の場合で無ければ斷り兼る。われ〳〵の談話で、或人が學資を得るとか、下宿料の補足でも得るとか云ふのであるのに、格別な差支も無くして、ムゲに斷はると云ふのは、少々スゲ無い譯だらうと思ふ。

で、大抵の人は少々厭な位なことは堪らへて談話をする。所で、その談話だつても、さう出鱈目ばかりもやれぬのであるから、考へるなり、調べるなり、相當の勞力はこれに費すのは勿論で、書くのと、話すのとでは、勞力の差はあらうが、決して、質の差は無い。その雜誌營業者が、談話筆記者に對して、われわれの原稿に對すると同率の報酬をするのであれば、われ〳〵には異存はないが、營業者は、大抵、談話筆記者にはズツト少い報酬を與へて居るやうだ。左樣すると、其樣な雜誌社のやり方は、極言すれば、世間には往々ある苦學會とか孤兒院とか云ふものゝうちの、苦學

生とか孤兒とか稱へるものを賣子にして、割高に品物を賣り付ける金儲法と同じだ』と、予のことだから、無遠慮な說を持ち出すと、夏目君は莞爾しながら『一體談話を載せると云ふことが、面白く無いね。文人の說を載せて貰ひ度ば、原稿を書かせることにしたら宜いでは無いか。不用意な所を襲つて、何か云はせて、それを麗々しく、一廉の意見かのやうに載せて居るのは、讀者を欺くに等しい』と云ふ。予は『イヤ、左樣ばかしも云へ無いよ。例へば、夏目漱石先生のお說などには、談話筆記でゞも無ければ、滅多にお目にはかゝれぬし、不肖馬場孤蝶の說だツても、談話筆記が無かつたら、餘り世には出無い。のみならず、論文を書か無い文人の說などは、談話筆記より外に、得て來る方法はなからう』『併し、君だの僕だのゝやうな境遇の者は、文壇にさう多くは無い。論文を出さん人が多いのは、小說以外のものゝ原稿料が比較的安いからだらう。若し、小說以外のものに、長さの制限が今のやうに無く、報酬も小說同樣だつたら、今少し論文を書く人が多くなる譯ぢやア無いか』『御道理。だが、論文を何うしても書かん人は矢張出來るね。談話の出るのはまア宜いぢや無いか。世間も面白がり、雜誌營業者も隨つて喜び、筆記者も何等かの金を得ると云ふ譯なんだからさういふ善德の爲なら、少々杜選なことを云つても宜からう』と予が云ふと、夏目君は噴出して『夫れぢやア、談話料をウンと取るかね』『結局其處だ』と、予も聲を合せて笑つた。一

寸斷つて置くが、夏目君と私と談話を爲ると、大抵、此樣な風に結末が付く。即ち、予の方が、無暗に饒舌り立てるので、夏目君の方から、宜い頃合を見て、旨く切りあげて了まうのだ。

その時分は、前田夕暮君が『文章世界』の用で、屢く予の、所へ來られるのであつたから、同君を捉まへて、散々間接射擊で『文章世界』の談話の扱方に關する不平を述べた。そのお蔭だか、何だか知らぬが、予の『ガルシンと其作物』に對しては、博文館から禮だとして四圓の爲替券を送つて來た。流石にさうなつて見ると、少々氣の毒のやうな氣もした。

△

その後、夏目君の家へ行つた時に『文章世界』はいよ〳〵來無かつたかと聞くと、夏目君は笑ひ出して『あれは飛んだ間違でね。實は雜誌は來て居た。森田(草平)が、僕に云はずに持つて行つてたんだ。あれから『文章世界』の記者が來たから散々小言を云つたんだが、その時には、森田も居た。さうすると、二人とも歸つて了まつた後で、家の者が『雜誌は文章世界なんですか』と云ふから『左樣だ』と云ふと『森田さんが見てお居でのやうでした』と云ふんでね。それから、その次に森田が來た時に『僕の家の「文章世界」を持つて行つたのは、あの雜誌の記者の來た前なのか、後なのか』と問くと、前なんだと云ふんだね。『そりやア、君、不可ぢや無いか。僕が、記者を叱つて

る席に君は現に居ながら、その事を何とも僕に云つて吳れんと云ふ法は無い。君は、僕が、知らぬとは云へ、人をアンジャストに扱かつてるのを傍觀して居るのは、不親切極まる。第一、君は、僕に斷らずに、僕宛の雜誌などを、開封して見るといふのが怪しらん』と云ふと、大に恐縮して居たがね相更らず氣樂な漢だ』といふ話であつた。大分森田式の特調を發揮した話なので、予も噴飯さゞるを得無かつた。

夫から、一週間程して、森田君が、私の所へ來たので『夏目君に「文章世界」のことで叱られたさうだね。何うも、自分の過失が原因で他人の叱られてるのを、平氣で傍觀して居るなんて、君も大分惡漢になつたぢやア無いか』と云ふと、森田君は、頭を搔いて『イヤ何うも大失敗。夏目先生に合槌を打つて、散々記者を叱責め付けたんだからね。これ位惡黨になつ了まへば世話はありません』と云つて、笑ひ出した。それから、森田君は『此の間も「煤煙」のことで、酷くやつつけられました』と云ふ『さうかね。君「煤煙」が拙いとでも云ふのかね』ときくと『否。左樣云ふんぢやありません。行くといふと『君は「煤煙」で見ると、僕の用を賴んだ時分にやア、女と歩いてばかりゐたんだね。だから、僕の用がちつとも片付か無かつたんだ』と云ふやうな藝術とは一向關係の無い方面から、まるで滅茶苦茶に叱かられたんです。多分、誰かゞ行つて『森田は「煤煙」の評判が

宜いから、大分得意のやうだ』とでも云つたので、先生『夫りやア生意氣だ。來たら一つやつつけて遣れ』といふんで、手ぐすね引いて待ち構へて居る所へ行つたといふ譯なんで、何うも頭ごなしに立つ足も無くやつつけられたんです。で、私は『先生、それは無理です。「煤煙」では、一日の出來事が九日も續いて出るので、一寸見ると、其樣なことを九日も續けてやつてゐたやうに見えませうが、實際は唯だ一日の出來事なんです。だから、「煤煙」のやうなことを一日やつちやア、先生の仕事を二日やると云ふ風にしてゐたんで、先生の仕事を全然放棄つといた譯ぢやア決してありません』と、云ひました』

斯う書いたばかりでは、森田君が夏目君に何時も凹まされてばかり居るやうだが、實際は、森田君は、夏目君の舌戰の相手としては、時になか〳〵手強いことがある。夏目君もこの漢、語るに足ると云ふ態度で森田君に對するので、種々な話が傳はる譯である。

人としての泡鳴氏

僕は岩野君とは餘り深い交際はなかつた。始めて知り合つたのは明治三十五年頃であつた。岩野君が前田林外、相馬御風君等と一緒に『明星』の仲間から脱して『白百合』といふ雜誌を出し初めた時分であつた。僕は同君とは別に利害の衝突するやうな道を歩いてゐなかつたので、岩野君に對して腹を立てるやうな事には一度も出遭はなかつた。岩野君は面と向つて話すと如何にも心持のいゝ人であつた。近來は特にさうなつて居つた。元來人の好い人であつたからであらう、無邪氣な、子供らしい處があつて、個人としては、人と本當に喧嘩にならない人であつたらしい。

人としての擧動にも、あの人の文章にも、素頓狂な處がかなりあつたやうだが。それは要するに岩野君が好い人であつたが爲めであらう。

文壇の論客としての岩野君に較べると、個人としての泡鳴君はもつと卒直で早わかりのする人であつた。論客としての岩野君には何と云つても未だ凝りが解けないといふ感じがあつた。かなり開け放しであるやうだが、未だ本當の開け放しではなかつた。岩野君の個人として、又文學者として

進んだ方面は決して惡くはなかつたと思ふが、只、今一段の徹底した自己解放を行つて貰ひたかつた。岩野君の所謂一元描寫論にも、かなりの理由があり、根據があることは疑ひがない。然しあれをあの程度に於て實行し滿足してゐたのでは、未だ本當の反省があつたものとは思はれなかつた。岩野君の家庭に對する事なども、岩野君の行動なり岩野君の心持なりは吾々もよく理解してゐたが、それを告白し、それを論ずる際に、もう少し自分を庇はないやうな行き方は無かつたものであらうか。とは云ふものゝそれも是も總て同君が人がよく、從つて少し弱い處があつた爲めであらう。

岩野君がどれ丈讀書家であつたか、といふ事は餘り親しくなかつた僕はよく知らないが、岩野君の性質から云へば、本の中で自分の氣に入つた處丈けを覺えて居るといふやうな讀み方であつたらしい。或は岩野君の讀書法も、君の人格の反映であつたかも知れぬ。

岩野君は一見しては如何にも無風流な人のやうに見えたが、可成種々な事に趣味を持つてゐた人であつたやうだ。

岩野君が亡くなる十日程も前であつたか、或る人に逢ふと、其人は岩野君はこの頃はだいぶ染々とした事を言ふやうになつた。『僕は子供が大勢あるのだから、僕の死んだ後も少しは何うかなるやうに、自分の出す本は總て印税にして置きたい』と、こんな言葉を洩らしたと云つてゐたが、僕は

それを聞いて『それを心でばかりで無く、口へ出して云ふやうに成つたのは、殘念ながら矢張年のせいだね』と言つて笑つた。

岩野君の死に於て、我文壇は名物男の一人を失つた事は確である。のみならず、私共は次第に減つて行く戰友の一人に、又此處で一人別れた事を感じて甚だ淋しいと思ふ。

昨夜與謝野君の處の歌の會で岩野君の死んだ事を聞いたが、その歸り路で堺利彦君が『確に近火だね』と言つて笑つたので僕も『全くさうだ』と答へ、それから死が萬事の精算であるといふやうな事を兩人で話し合ひ乍ら市ケ谷見附で別れた。岩野氏の葬式へは學校があるので明日は行けまいと思ふから、此處に眞心からの弔意を表して置く。

善き人なりし大杉君

一

大杉榮君と伊藤野枝君が、官憲の手で慘殺されたといふことは、何だかまだ本當の事ではないやうな氣がしてし方がない。國法執行の職にある官吏が、國法を無視して、殘虐を行つた今回の如き例は、官民の軋轢甚しかつた明治十五六年頃にさへなかつたことであるので、文明の世での事件としては、それが眞實の出來事であるとは、一寸首肯し兼ねるやうな氣がするのだ。

國法を犯さゞる者は、國法の前では何人も平等に無辜であるといふ原理は、吾々は神聖なるものであると思ふのであるし、又人命の何處までも尊重すべきものであることを確信する吾々は國法擁護、人命保護の任を托された官吏が、よしそれが如何なる下級の者どもにもせよ、私見に由つて公の機關を動かして、その職任に全く背反した暴虐を敢てして置いて、それは唯個人としてなした行爲であると揚言し、更に又國家あつての國法であるのだから、國家の爲めには國法を蹂躙するも已

むを得ないといふ考を公表するのを見ては、その人の餘りにも沒分曉なるに唖然たらざるを得ないのである。

吾々は、國家は國法に依つて維持されて居るものと考へてゐる。國にして國法なくば、それは國ではなくして、人間の唯烏合して居る集團に過ぎないのだと考へて居る。吾等は國家と國法とは不可分のものだと考へて居るのだ。國法はその國に住む總ての人々の間の公の約束であつて、これがなければ、人民は據るところがないので、名々勝手なことをする譯になるので、國といふ如き組織的な團體は成り立ちやうはない。

大杉君夫妻がさういふ頑冥な考の爲めに犧牲にされてしまつたことは、殊に悼むに餘りあることである。

大杉君夫妻の死によつて、世間の正義の考が喚起されて、軍憲などの間に潛んでゐる頑冥な考が一掃される機緣を作くるといふことになるのならば、大杉君夫妻の死も全然犬死とは云へぬことになるのであらうが、大杉君夫妻を善く知つて居つた吾々に取つては、それにしても餘りに大なる犧牲であるやうに思はれる。

然しながら、何と云つても、大杉君夫妻はもう此の世にはゐない。あのぶらつきにうのやうで、

何處からか溫情の溢れて來るやうな感じのする大杉君にも、如何にも優しみのある、何時までも娘らしい可愛らしい笑顔を失はなかつた野枝君にも、もうふたゝびその聲を聞き、その風貌に接することはできないのだ。僕は先づ大杉君のことを思ひ出づるまゝに左に記して、大杉君を悼むの意を表したいと思ふ。

二

大杉君の所謂主義に就ては、僕は多く言ふことを持つてゐない。僕は大杉君の主義を論評するに足る知識を持つてゐないのだ。大杉君が如何なる主義を持ち、如何なる終極の目的に向つて活動してゐたにしたところで、その主義の行はれるのは、その終極の目的に達するのは決して早急のことだとは思つてゐなかつたであらう。ところで、吾々は、幾くら主義がよくつても、目的が立派であつても、それに達するまでのその人の行動が無意義であつては、何等の價値もないことだと思ふのであるから、大杉君の一生を見る時には、君が既往十四五年程の間に、實際成したこととの大體に注目すべきであると思ふ。

運動者としての大杉君の價値は、××××××××××××××、××××××××××

×した點にあると思ふ。勞動者に對する待遇に就ての世間一般の考が進んで來たことは、×××××××××××××何時の間にか輿論を喚起するに至つた結果であると思ふ。言論の自由の範圍が數年前から大に擴張さるゝに至つたのも、確に××××××なる言論の賜ものであると認めざるを得ない。これ等は、大杉君及びその同志の人々の功勞の重なるものであるのだが、その他にも、大杉君等の捨て身××××××、××××××××××××××××××××。

吾々から見た大杉君は、如何にも善き人であつた。情の厚い憐れみの深い人であつた。所謂ものの道理のよく解つてゐる人であつて、何にしろ、優れた才人であつたので、自分の行動に就ては、楯の兩面を見るだけの自省は確に持つて居つた。思慮あり、理解力の鋭い人であることは、一寸した談話の中にも直ぐ表はれるのであつた。一見しては、朴訥な倨傲な風に見えたのだが、あの凄い眼をパチ〳〵やりながら、秩序整然と話す言葉には、人間としての溫味が何處からともなくしみ出て來るやうな氣がして、人を引きつけてやまざるところがあつた。大杉君は女、兒どもとも話のできる人であつた。僕は或る時大杉君に向つて

『甚だ失禮だが、僕は此の頃貴下がだん〳〵齋藤綠雨に似て來られたやうに思はれてし方がないのだが』

と、云うと、大杉君は同行の若い人――或は五十里君ではなかつたかと思ふのだが――を顧みて

『大に光榮だね』

と、微笑を含んで云つた。

大杉君自身からは、

『私は餘り廣く人とつきあうのではなし、世間をさう廣く知つてはゐませんが、私が人情といふやうなものを解することのできるやうになつたのは、監獄にはひつたお蔭だと思つてゐます』

といふ言葉を聞いたことがある。僕は其の外にも監獄に關する面白い話を幾つか大杉君から聞いたので、葉山事件の少し後かと思ふのだが、大杉君が大分金を要する狀態であつたので、新聞へ交渉して『獄中記』を書いてみたら何うだと勸めたことを覺えてゐる。『獄中記』が出たのは、それより何うしても二三年程たつてからであつたらう。

三

大杉君は憐みの心の深い人であつた。僕のうちの猫が生んだ二番仔が一番仔に頭を手玩にされて眼を爪で引つ搔かれて盲になつてしまつた。その盲の仔猫が見えぬ眼を上に向けて見張るやうにし

て、二階の僕の部屋へ這入つて來ると、來合せてゐた大杉君は、仔猫の傍へ顏を寄せて

『貴樣は可愛いさうだなア』

と、云つてから、直ぐ

『さア、來い、來い』

と、お召の着物の膝を叩いた。

身寄りも、さしての友だちもない江連沙村が病氣になつた時に、大杉君は刑事に賴んで、直ぐ施療院に入れて呉れた。江連の最後の病氣の時にも、大杉君が同じやうに世話して、施療院へ入れて其處で生を終らして呉れたやうに聞いてゐる。江連は知人間にいろ〳〵世話をかけた男であつたので、餘り親しくない大杉君にさへ世話をかけたことが可なりあつたらうと思はれるに拘らず、大杉君はそれ等のことに就ては、吾々には殆ど一言も云はなかつた。江連に就ては、知人が皆非難の言葉を洩したけれども、大杉君からは、江連に對する非難を一言も聞かなかつたと思ふ。

大杉君の先夫人保子君のお里にゆかりのあつた或る老婦の如きは、大杉君の親切にひどく感激してゐた。

大杉君の憐れみ深い人であつた實證を持つてゐる人は、君の知人のなかには、必ず多からうよ

思ふ。

大杉君の心に、虐げられたものに對する慈悲心が燃えて居るやうなのを、吾々は貴しとしてゐた。

大杉君は如何にもさつぱりとした男らしい心持ちの人であつた。堺君との意見の相違に就ても

『堺は吾々の大先輩ですが、これに閉口してゐるやうでは駄目だと思つて、此の頃では、强いて一一突つかゝつて行くやうにしてゐます』

と、笑ひながら云つた。それは大正元年の秋で、大杉君と心安くなつてから間もなくであつたと思ふのである。

それから葉山事件の少し前位であつたかと思ふのだが、大杉君が或る雜誌社の社長に對して憤るところがあつたので、堺君、荒畑君、安成君などが仲へ立つて、その社長と融和する爲めの宴會を築地か何處かで催したところが、大杉君が又その社長の或る言葉に感情を害しておこり出したので堺君が傍から輕い言葉で取りなさうとすると、大杉君は

『君のさういふ言葉が氣に入らん』

と怒鳴つて、堺君の顏へコップを叩きつけたので、堺君の方もさすがに憤然として盃か何かを投

げつけたといふのであつたが、その事件があつてから少したつて大杉君がやつて來たので、

『此の間はひどく憤激したさうですね、堀保子君が來られて、『女ができると氣が折れるといふことは、世間ではよくいふのですが、大杉のは、女ができて氣が荒くなるのですから』と云つて、笑つてゐましたぜ』

と、云ふと、大杉君は苦笑してゐたが、やがて、

『堺には、これまでは何う突つかゝつて行つても、何時も相手になつて呉れないので、弱つてゐたのですが、今度ばかりは、本氣に相手になつてくれたので、餘程心持ちがいゝのです』と云つてくすくす笑つた。

それまでにさまざまなことで感情は疎隔して行きつゝあるに拘らず、大杉君の胸には、共に水火のなかを潜つた斯の先輩に對する唆い心持は消えてはゐないのだと思つて、僕は大杉君のその言葉を決して惡るい心持ちでは聞かなかつた。

遠藤無水君の『社會主義者になつた漱石の猫』が出た時にも、その小説に取り扱はれてゐる堺君のことに就ても、

『あゝ誤解されてゐては、氣の毒ですよ』

と、大杉君は云つてゐた。

四

葉山事件に至らぬうちの、戀愛の錯綜時期には、僕もその渦中へ少し足を踏み入れざるを得なくなつたので、大杉君に面談する機會が多くなつたのだが、大杉君は、

『とにかく、損な位置を自ら選んだといふことは重々承知してゐますが、行き詰つた境地から何等かの活路を打解する爲めには、斯んな方面へ出るより外はなかつたのです』

と、少し憂を帶びたやうな顏で云つた。

大杉君は思慮の深い人であつた。可なり話好きであつたやうに思はれるに拘らず、他人の惡口などは餘り云はなかつたし、不必要な話は殆んどしなかつた。何んなことを話しても、如何にも要領を得てゐた。大逆事件などのことは、僕の方からも聞かうとはしなかつた、大杉君の方からも、殆ど何も云はなかつた。

或る時に、ゾラの『ジヤアミナル』のなかの罷工鑛夫の群へ兵士が發砲する條下の話をすると、『私どもはあゝいふのを見ると、ひどく凄慘なる心持ちがします。あゝいふのを見ると、大罷工な

どは濫りに起すべきものではないと思ひます』
と大杉君は沈んだ聲で云つた。
原敬氏が刺された時分、大杉君は鵠沼の東屋にゐたさうなのだが、同じ旅屋にゐた若い知人の部屋へ來て、
『原首相が暗殺されたといふ話だから、今尾行を號外を買ひに藤澤へやつた。號外が來たら見せよう』と、云ひ、それから少したつて、
『斯ういふんだ』
と云つて、號外を見せに來たのみで何一言も云はなかつた。
『自分の氣のせいかも知れぬが、大杉は確に憂色を帶びてゐたやうであつた』
と、その若い知人は云つてゐる。
思慮のある、且憐愍の心の深い大杉君は、今度の變災を見て天譴だなどゝは、思ひはしなかつたらう、富が平均して面白いなどゝは思ひはしなかつたらう。
內田魯庵氏の書かれたところによると、大杉君は大震後は毎日未の幼兒を乳母車に乘せて、子守りばかりをしてゐたといふ、知らず、斯の溫情の好漢の胸には、變災に死ねる、變災に苦める幾十

萬の犧牲者に對する堪えがたき憐れみの念が往來してゐたのではなからうか。
大杉君に逢つたのは明治四十五年の二月頃かと思うのだが、大正元年の秋から、二三年の間は可なり度々、僕の市ケ谷田町の僑居へ尋ねて來た。本村町へ越してからも、十回位は來てくれたと思ふ。が、何時の間にか、疎濶になつてしまつて彼れこれもう二年程は會ふ機會がなかつた。九月の七日頃に見舞ひに來てくれたさうなのだが、僕のうちは屋根が破れたので雨漏りを避けて婿のうちへ行つてゐたので會ひ得ずにしまつた。

五

大杉君の生家の門地に就ては、何も聞く機會がなかつたが、相當の紳士の家庭に育つたのであらうと思はるゝ。大杉君はなか〳〵趣味の廣い人であつた。あゝいふ才人であつたのだから頓智とか當意卽妙とかいふやうなことは、ひどく面白がつてゐたやうである。從つて言葉の綾とか、匂ひとかいふやうなものに對する反應力も可なり強く持つてゐたと思ふ。大杉君の言動は何時も率直を極めたものであつたに拘はらず、他人のことゝしては謂はゞ廻りくどいやうな事柄にも十分理解を持ち、趣味を覺えたのは、面白いことだと思ふ。

大杉君の如き境遇のファイタアとしては、强情もヒガミもあるやうになるのは自然已むを得ぬことだと思うのだが、吾々の接した大杉君は、唯の强味一方の人ではなかつた。相當の意義あり趣味ある話なら、善くその要領を摑み得る人であつた。優れた讀書家の常であるやうに、一見しては下らぬことのやうな斷片的な知識をも頭から輕んじはしなかつた。

何と云つても、死は吾々に取つては嚴肅な事實である。何でもない知人であつても、死んだと聞いては、その人の善かつたところが、いろ〳〵と思ひださるゝものである。まして、吾々の如く、大杉君の人としての善き部分にのみ接するを得たと思はるゝものに取つては、大杉君今や亡き今日追惜の情のみ胸に湧くのは當然である。

嘗て、所謂、赤旗事件の當時、神田の警察署内での、拘束者に對する所置が苛酷であつたことを傳聞してゐたので、ある時、大杉君にそのことを聞いてみた。

『それは仕方がありません、此方も思ふ存分暴れたのですから』

と、大杉君は洒然として笑つてゐた。

今度の事件でも、大杉君だけの問題としてならば

『それは敵を仆す手段としては、當然のことでせう』

と、何處かで笑つてゐる樣な氣もする。

大杉君の人爲(ひとゝなり)だけしきや知るを得なかつた吾々にとつてさへ、大杉君について書きたいことは決してこの短い追懷だけで盡きはしない。

堺利彦君

一

堺利彦君に初めて會つたのは、何んでも明治四十一年頃であつたと思ふ。その時分は神田新石町にあつた二六新報社が紙面に文藝欄を設けるので、その內相談といふ意味であつたらう、樋口龍峽岩野泡鳴、生田長江、平田禿木、大町桂月、戶川秋骨、兒玉花外といふやうな人々と共に、僕も呼ばれて、上野精養軒へ行つたが、堺君も同じく呼ばれた一人であつたので、その時初めて顏だけは合はせた。けれども、その時は、堺君の方は、所謂る文藝の方とは離れようとしてゐたらしく、吾吾の方では又、社會評論家といふやうな人々とは餘まり緣の遠い路を步いてゐたといふ譯で、食後になつて小さい卓子のまはりに顏を見合はせて坐つてさへ、誰も堺君とは言葉を交へなかつた。

後で聞けば、堺君には文藝的作品は可なりあつたのであり、又堺君は文藝の趣味は何時も失つてはゐなかつたのであるが、吾々の方はその時は一向そんな事は知らなかつたので、全然畑違ひの人

の様に思つてゐたのだ。

堺君の方では、その時代は、堺君の一團が最も官憲から危険視され、一般社會から隔離されてゐたともいふべき有様であつたので、さま〲な意味で、吾々並々の文學者には近づき兼ねた感情もあつたのであらう。

何れにしても、その時の堺君の風貌には何となく沈鬱なところがあり、剛毅とでもいふやうな氣分が如何にも明かに表はれてゐた。要するに、表はれてゐたのは、闘士の面影であつた。その時分堺君の齢は四十ぐらゐであつたのであらう。壯年の强みと、凄みが著しく表はれてゐた。

神田淡路町にあつた共立學校（今の開成中學の前身）の二十年頃の學生名簿を見ると、中村利彦（福岡—時に福島と誤植）といふのがあるが、これは堺君のことだといふ。僕も同時代に同じ學校に學んだのであつて、堺君の記憶してゐる小原騂吉君や、桑木嚴翼君とは僕も確に同級であつた記憶があるが、堺君のことは、お互に少しも記憶がない。

それで、前記の二六新報社の會が、初對面であつたとするより外はない。

二

二度目ぐらゐからは、無論言葉をかはしたに違ひないのだが、それは何時だか明かには記憶しない。或ひは、明治四十五年の春頃、安部貞雄、阿部幹三、和氣律次郎等の催した文藝活動寫眞會の時にでも、東京座ぐらゐで、挨拶をしたかと思うのだが、何うも明かでない。何れにしても、僕が口をきいたのは、大杉榮君との方が先きであることは確かだ。

大正二年になつてだと思うのだが、堺君をも、大杉君をも善く知つて居ると共に、僕も昔から知り合ひであるところの竹本東佐を一夕大杉君の大久保百人町の家へ呼んで、義太夫を聽くことにしたから、來てくれと大杉君から案内を受けたので、行つてみると、其所で堺君の一家の諸君とも落合つた。集まりの性質が性質なので、この時は、堺君のあのさも心持好さゝうな、高らかな笑ひ聲を幾たびか聞いた。

その歸へりに、堺君と夫人と眞柄さんと僕とは一緒に大久保の停車場へと向かつたが、大分歩いて來てから、

『婦人と一緒なので、可なり步調を加減して步いてゐるのだが、それでも、貴君の方のご婦人連はなかなかお足が早いんですね』

僕がさういふと、

『いや、男と女とでは何時も步調が合はないがちで困りますよ』

堺君はさう答へて快く笑つた。

停車場の直ぐ横まで來ると、なかは靜まり返つてゐて、電車があるか、何うだか分らなかつた。吾々が、まだ電車があるだらうか何うだらうかと云つてゐると、一番後にゐた眞柄さんの涼しい高い聲が、

『もし、もし、新宿へ行く電車はまだありますか』

と、闇を渡つて、線路の向ふ側にゐた驛員の方へと響いて行つた。その時、驛員が何と答へたか吾々は、共處から電車に乘つたか、新宿まで步いて、市電に乘つたか、さういふ記憶は全く朧氣である。

唯今日までも記憶に明かに遺つて居るのは、眞柄さんの聲の如何にも自然であつたことだ。誰も尋ねないからし方なしに自分が尋ねてみるのだとか、吾々がたゞ話し合つてゐるのみで、きけば直ぐわかることをきかないでゐるのをもどかしがつて、聲を擧げたのだとかいふやうな心持は少しもなかつた。唯だ、間遠であつたので聲が高かつたのみで、その調子は驛員の傍へ行つて尋ねる場合と少しもちがはないと思はれるやうな全く自然なものであつた。僕は、此のお孃さんはなか〳〵傑

いなと、心のうちで思つた。眞柄さんはその時十五にまだなつてゐなかつたらう。
此の晩が堺君と親しくなりだした初めである。尤も、竹本東佐は堺君の姻戚の堀紫山君に由縁があつたので、堺君のところへも度々出入りし、その前から僕の生活狀態など可なりよく堺君の方へ傳はつてゐたらうと思ふ。

三

その時分は堺君は、溜池の、山王下の大溝の縁にあつた家に住まつてゐたかと思ふ。其處へも一二度は尋ねて行つたやうに覺えて居る。京橋佐柄木町かの賣文社へも安成と一緒に立ち寄つたこともあつた。僕の選擧運動をやつた時には、堺君は高畠素之君と小原君（その後間もなく岡山かの鄕里へ引き込んだ人）とで尋ねて來てくれて、僕の主張を聞き取つて歸つてから、社會主義者有志の名義で、推薦廣告を新聞へ出してくれた。
それから間もなく、大杉君などの主唱で、第一回の著作家の協會を設立する相談などに、又その成立後の會議などには、可なり堺君を煩はした。
堺君の立候補の時には、生田長江と安成貞雄と共に僕も應援辯士の班に加はつた。第一回の演說

會は本郷四丁目大和館といふ活動寫眞館で催した。警戒の警官の數は可なり多かつた。私服で、警保局や警視廳から出張して來た人々も可なり多かつたといふのであつた。辯士は大低中止を食つた。僕の如きも三人目ぐらゐに出たのであつたが、必らずしも普通選擧といふのではない選擧法改正を談じたゞけであつたが、それでも中止であつた。その時分の選擧權資格は納税五圓以上であつた。生田長江は大分哲學的に論じたゝめか、それとも、本郷で學士の演說を無理由に中止するのは少し遠慮されたといふ譯でゞもあつたのか、とにかく演了することができた。安成は文學論をやつて、武者小路氏の議論を攻擊してばかりゐたので、これも中止にならずにしまつた。けれども、その後間もなく、誰かの演說中に中止解散になつて、堺君は演壇に登る機會がなくなつてしまつた。

その次ぎの演說會場は、早稻田の八千代倶樂部であつた。勿論、警戒は前と同樣の嚴重さであつた。ところが、此の晩は、齋藤兼次郎老人も中止を食はず、高畠氏も、豫算論であつたが、中止にならなかつたので、堺君が出ても、少しは演說ができるかも知れぬといふので、堺君に出て貰らつたが、ほんの挨拶程のことを二言三言いふと、直ぐそれで中止解散を命ぜられてしまつた。今度は生田も、安成も、僕も演壇へ現はれるには及ばなかつた。

その次ぎの會場は、花川戸の東橋亭であつたが、此所では、臨監の警官が司會者が演壇で控へて

居ることすら許さなかつた。こんな形勢では、何うせ駄目だと思つたのであらう。堺君が一寸挨拶に出て、これも數言すると中止解散になつた。

その後は、僕は風を引いて一寸なほりにくかつたので、會場へは行かなかつたが、團子坂、鳥森などの寄席で、演說會は開かれた。後になる程、中止は少し緩やかになつたらしかつた。しかし、そのうちに、何うした譯だか、何處でも會場を貸すところがなくなつた。今日のやうに、小學校だの、寺院だのを貸りることのできるのではなかつたのだから、寄席や貸席で何處も貸してくれるところがなくなつた以上は、演說會は不可能になつてしまつた。

此んなことを憶ひ起すと、今では全く隔世の感がする。現今では、無產黨の代議士もあり、又市會には、無產黨の人々が今後ます〳〵進出するであらう。それ等の人々の演說會の模樣を聞くに、昔日とはその取り締りの緩嚴が雲泥の違ひであつたやうである。

かういふ世の中になつて見ると、昨の嚴峻は、勞力の徒費であつたやうな氣がする。しかし、官憲の力はドン〳〵人がかはるのだから、責任の所在は何處にあるか分らなくなつてしまう。それでこそ、誰も昨非を今是として取り扱ふ際の良心の疚しさを感ぜずに濟む譯で、まことに善くしたものである。

四

大正八年に、第二回の著作家協會を起したのも、堺、生田、大庭三君の主唱であつたが、これも大庭君に働いて貰へなくなつて、解散してしまつた。この間、僕自身は雜誌『中外』への寄稿、『將棋講義錄』の執筆その他で、堺君の推挽を得たことは實に尠くなかつた。この時分は、堺君は今の麹町八丁目の家へ越し、僕も市ヶ谷本村町へ移つたので、互に家が近いので、自然互に尋ね合つた。その翌年であつたと思うのだが、社會主義者同盟といふやうなものができるので、それに加盟せぬかと云つて、堺君はわざ〳〵勸めに來てくれた。けれども、僕は、

『責めて、もう少し若くて腕力でもあるとか、若しくは、もう少し主義の方の學問でもして居るとかならば、喜んで加盟するが、兩方とも資格がないので、加盟は諸君に取つても、僕自身に取つても、無意味だから』

と云つて、謝絕した。堺君は『成る程、知識階級だから……』と云つて、僕の意を善く諒してくれた。

それから間もなく、僕も今の場所へ引き移つたので、何時の間にか、堺君のところへは足が遠く

なつてしまつた。

堺君は紳士である。寛恕の徳を十分に備へてゐる。總べてのことを理智で判斷せられるところが、僕等に取つては、ひどく嬉しいところである。維新開國の大知識の人々と同様に、堺君が勇壯なるマテリアズムを奉ぜらるゝのは、僕に取つては、殊に親近の情に堪へざる點である。

嘗て大杉君と話してゐるうちに、

『諸君のお仲間に近づくも宜しいが、これまで、吾々とは何等の交渉もなかつた人々、即ち、吾々とは思想もまるでちがひ、風俗、習慣、言語さへちがうやうな人々を相手に抗爭しなければならぬことになるだらうと思ふと、その不快さは想像してさへ、實に厭なんだ』

僕がさういふと、大杉君は、

『成る程、それで思ひ當る事がある。堺と一處に監獄に居た時分に、獄吏の間では、堺はさすがに首領だけあつて、立派な紳士で世話を燒かせぬが、大杉だの、荒畑はやたらに反抗して困まると、吾々の方の評判が甚だ宜しくなかつたですが、堺の心持は今貴君の言つたのと同じ心持だつたんでせう』

と云つて、笑つたことがある。

大杉君はよく監獄で勉強したことを話したので、僕はなかで課せられる仕事の具合は何うなのだと聞くと、大杉君は次のやうに説明してくれた。

『何れだけと仕事の量がきまつてゐても、これだけしきやできないと云へば、それまでゞすから、自然時間が餘まつて來る譯です』

堺君のところへ行つて、その話をすると、

『いや、大杉でも、山川でもみんな手先きが器用なので、直きに、申し譯だけの量は仕上げてしまうから、時間も餘まつたのだが、僕は不器用なんだから、時間一杯にやつて、やつとあの連中の半分もできなかつたので、自然時間を餘ますどころの話ぢやアなかつたんだ。それに、例へば、鼻緒の心など、出來上つたのを百づゝ揃へて、積み並べて見ると、一寸樂しみなものだし、その上妙なもので、そんな仕事でもやる以上はうまくやりたい氣にもなつて來るし、それから、その仕事を受取りに來るのは、看守でも何んでもない並の商人なんだから『かうやつて綺麗になすつて下すつてまことに有りがたうございます』などゝ叮寧に禮を云つて持つて行く。さうなると、さすがに、人情でさうひどい事はできなくなるしね』堺君の話はさういふ風だつたので、その次に大杉君が來た時に、又その話をすると、

『僕のところへは、いゝ仕事ばつかり持つて來ました。或る時などは、展覽會へ出す穿き物の鼻緒の心だから、念入りにやつてくれと云つて、持つて來たことがありました』

五

堺君は書が觀事である上に、揮毫が好きである。大杉君の書は一寸癖があつたが、それでゐてなかなか風流ないゝ書であつた。ところが、大杉君の書が堺君の書に何となく似てゐる。現に、先年新潮社から出た『文學者の手紙』といふやうな外題の書物のなかには、堺君から僕への手紙が、大杉君から僕への手紙となつて出てゐるくらゐだ。

或る時、筆蹟の相似に就て大杉君と話したことがあるが、

『いや、隨分好く似ることがあります。何うかすると、まるで同じ字が書けてしまうことがあります。ところで、僕が堺の字を眞似してゐると云はれたところで、僕は決して不滿ではありません。反つて光榮と思ひますがね。こゝにかういふ話があります。僕は、或る時、堺に門札を書いて貰つて、家の門へ揭げて置いたのですが、或る日、幼年學校時代以後一向會はなかつた友達がヒョックリ尋ねて來ました。『何うして此所が分かつたのだ』といふと、その男のいふには『此の家の前は幾

度も通るのだが、同名異人かも知れぬと思つて、遠慮してゐたが、門札の字は何う見ても、君の字に違ひない。それで意を決してたづねたのだ』といふのでした。その友人は、僕が堺を知らない時分の友人ですから、堺の字は見たことのない男です。さうして見ると、事實は、僕の字は堺のに先天的に似てゐることになりますなア』

さう云つて、大杉君はあの特徴のある大きい眼をパチ〳〵やりながら、呵々と笑つた。

これは、大杉君が野枝氏と同棲しだした時分のことなのだが、その時分、僕は堺君に會つた時に

『僕などは品行甚だ宜しからざるに拘らず、未だ曾て、他人に仲へ入つて貰はなければカタのつかないやうなハメに立ち到つたことがない。これは、面倒な口には取つてかゝらずに、手輕なところで間に合はせてゐた結果だと思ふ。さうしてみると、僕などのは、女に對する愼みが深くつて、過ちがなかつたのではなくして、女に對して愼みがなかつたがために、間違ひをしないで濟んだといふ譯になるね』

と云ふと、

『いや、その通り、その通り、僕なども全くそれなんだ』

堺君はさう云つて、例の快然たる笑ひ聲を洩した。

堺君に就て、僕が最も感服してゐることは、君が考へたことを直ちに實行に移つさうとする迅速さである。善なりと認めたことは、直ぐに實現せしめようとする眞摯さである。君の口から新講談は何うだといふ話を聞いたと思うと、もう直きに君の慫慂のもとに、三四の人々が呼び集められてゐる。社會的文藝を起してはといふ話が堺君から提議されたと思ふと、もう直ぐ藤井眞澄君等の雜誌が成り立つてしまう。その他、啓明會に對する後援といひ、與謝野夫人をして婦選運動の先頭に立たしめんとしたることゝいひ、如何にも、敏速な術策に富んだ活動振りで、さすがに、實際運動家の眞骨頂であると思ふ。堺君の隨筆の、ユウモアに富んだ自由な筆致が當代の珍寶であることは世に定評がある。唯、堺君が殊に飜譯ものゝ場合などに用ゐられる字議などに對する綿密な研鑽は全く敬服の外はない。堺君の風貌と態度から見ると、隨分何事も淡々と處理して行かれさうであるに拘らず、なか〳〵遠慮もあり、細心でもあり、謂はゞ、可なり神經質であることが感ぜられるのは、僕に取つては、君に對して親しみの感ぜられるところである。殊に、文藝の方面ではなか〳〵神經質であるやうに見えるのが、僕等に取つては、嬉れしいところである。近頃は、とかく堺君と落合ふ機會がない。そのうち、一日堺君を訪うて、あの快然たる笑ひ聲を聞き度いと思つてゐる。社會運動家の大先輩たる堺利彥は、幾年の風雪を凌ぎ來つた松柏の觀がある。切に御自愛を請ふ。

逝ける巖谷小波君

僕に對する課題は大凡硯友社時代の巖谷君といふのであるらしいが、年齡は大差はあるまいと思ふに拘はらず、巖谷君の方が僕よりもずつと先輩であり、その上僕は硯友社の人々（いはゞ同社第一期の人々）とは境遇も違つてゐたので、眉山君の外は、ほとんど交際がなかつたのだから、まるで書くことがないといつていゝくらゐだ。けれども、折角書けといはれるのをむげに斷るのも愛嬌のない話なので、簡單な思ひ出話のやうなもので責をふさぐことにする。

改造社の圓本の『大年表』を見ると、當時の『我樂苦多文庫』『文庫』『江戸紫』といふやうな硯友社の雜誌は元よりその他の雜誌にも巖谷君（當時は漣山人）の小說が幾つか出て居るのだが、殘念ながら僕などが名を覺えて居るのは明治二十二年八月の『妹背貝』ぐらゐなものである。これは『新著百種』といふ短篇（一冊一篇）叢書のなかの第四冊であつた。僕は第三冊かと思つてゐた。即ち、最初が紅葉の『色懺悔』次が、篁村の『掘出し物』、そして、その後が『妹背貝』のやうに記憶してゐたのだが、大年表にはその前に石橋思案の『乙女心』といふのが出たとなつてゐる。無論

僕の記憶の方が誤りなのであらう。この叢書では、露伴君の『風流佛』がその次ぎに出で、柳浪、三昧、眉山、乙羽、虚心亭（岡田朝太郎君）といふやうな人々の作が次々に出たのであるが、それが皆どんな筋のものであつたのか『色懺悔』『風流佛』の筋が朦氣に記憶に殘つて居る外、何も覺えてゐない。のみならず、後の文壇へ影響を及ぼしたのは、前記の二篇のみであつたと思ふ。

當時の巖谷君は才筆であつたと思ふ。まこと器用な作品であつたが、紅葉、水蔭、眉山、柳浪の諸氏にくらべては、その筆致にも、作の構想にも、いはゆるねばり氣が足りなかつたやうに思はれる。文壇の中央へと押し出して行かうといふやうないはゆるファイティング・スピリットが旺盛でなかつたと思ふ。これを眉山、水蔭兩君の人となりなり、作品に比べると、巖谷君の方は人物にも作品にも、詩人的なロオマンチツクな處が少なかつたやうに思はれる。

巖谷君は硯友社のどの人々に比べても、上品な家庭に育つた人であることは疑ひないと思ふ。財力のことは外部からはうかゞへないことがあるものだけれども、巖谷一六氏の令息たる季雄君の少、青年期の生活は小官吏や小商人の子弟等の生活よりも何といつても餘程裕やかなところがあつたのであらうと思はれる。さういふ境遇の若者としての巖谷君の人物にも、作品にも、いはゆるオツトりとした餘裕のあるところがあつたのは自然のことであつたらうと思ふ。

實をいふと、巖谷君の當時の小說がどんなものであつたか、今明かな記憶がないのだが、唯當時のかすかな感じを喚び起すと、巖谷君の作物は、輕い皮肉あり、和かなユウモアありといふ風で、穩かにまとまつた通俗小說（後の名稱でいふ）といふやうな趣のものであつたやうな氣がする。當時の通俗的の新聞小說がもう少し進んでゐたら、その方へ進出できる作品の傾向であつたやうに思はれる。しかし、紅葉、露伴を迎へた新聞小說の讀者は漣山人の小說にはあき足りなかつたであらうし、桃水、仰天氏などのもので滿足するやうな讀者に向くものを書くことは巖谷君自身の方でいさぎよしとしなかつたに違ひなかつた。

さういふ風で、巖谷君自身も小說は得意ではなかつたかと思はれる。さういふところから、やがて、少年文學へと移つて行つたのではなからうかと思ふ。この方でも、巖谷君に特異の文體とか、思想とかいふやうなものはあげられないにしても、先驅者としての功勞は充分に認めなければならぬであらう。しかも、能辯なる巖谷君の先蹤に從つて、多くの童話家の起つたのなども同じく君の功勞といはざるを得ないであらう。

巖谷君は硯友社同人のなかでは外國語を讀み得る人であつた。當時では文學者の間では數の少いドイツ語を學んだ人であつた。この方面で、今少し明治文壇に影響を及ぼす仕事はできなかつたも

のであらうか。これは、多分巖谷君があまりに早く當時の既成文壇へ出てしまつた爲めではないであらうか。外國文學移入の本格的の傾向が起り出したのは少くとも明治二十五六年以後と見るべきであらうが、さういふ傾向が顯著になり始めた時分には、巖谷君の藝術は巖谷君としては完成してしまつてゐたので、外國文學の助けを借りるには及ばなかつたのであらうと思はれる。

あれ程までに自己の藝術を完成させてゐた紅葉にも新時代に對して可なりの煩悶があつた。眉山の如きに至つては若き時代に突入しようといふ可なり強い閃きがあつた。巖谷君にはさういふ閃きがあつたかどうだか、吾々外間の者には窺ふよしもなかつたのであつた。時々世上へ漏れる巖谷君の言動だけで推測すると、後に來りつゝあつた文壇の諸傾向に對する理解が巖谷君にはあまりなかつたやうにさへ思はれるくらゐであつた。

どうせ文人の家の出なのだから巖谷君は富家に育つた人とはいへないのであらうが、他人の家の學僕をしてやう〳〵學校へ通つたといふやうな貧苦の境界に立つた人ではないと思ふ。文壇の出現當時から直ぐにどんな安原稿でも書かなければならなかつたやうな窮迫の文士の慘苦を味はれたことは先づなかつたらうと思ふ。要するに先づ大體、順當に學校に通ひ、順當に文壇に出で、順當に大家になつた人だと云つて宜しいであらう。

ところが、巖谷君の大成期より後に來つた文壇の趨勢にはさまざまな曲折があり、人間も、思想も、作風も、巖谷君から見れば、皆さま〴〵にヒネくれたものであつたに違ひない。かういふヒネくれた一切のものは、穩健の一路をたどつて來た巖谷君の氣にはいらなかつたらう。これはどうにもやむを得ないことである。巖谷君の如き上品な人に取つては、後に來つた氣にいらぬ傾向に對し頭から怒鳴りつける如きは、君の趣味にかなはぬところであつたらう。大體において、サイレント・デイスデーンの態度に出る外はなかつたのであらうと思ふ。

巖谷君の今日までの諸作品は、その文體においてもその作風においても、その氣分においても溫藉であつたと概言してよろしからうと思ふ。君の餘技といふべき俳句でも、書でも、畫でも皆溫藉の氣分の作物といはなければならぬであらう。

魯庵大人の一面

一

内田巖さんの御親父魯庵大人に關する追憶談を面白く拜讀したが、

『明治二十年代の物價は、酒一本付けて牛肉で飯を食つて金十錢也の時代だから貧乏書生父魯庵の一ケ月の生活費が十二三圓程度であつた事も不思議はない筈だ。』

酒、牛肉、飯での十錢は當時でもちと安過ぎるかと思ふけれども、それはとにかく、當時では一ケ月十二三圓も使へれば、眞の意味での貧乏書生とは云へなかつたらうと思ふ。學校にも依るであらうが、吾々のカレエヂ生活（詰まり明治學院時代）など、月額十圓ぐらゐあれば、そんなに不自由はなくやつて行けたと思ふ。何にしろ、學校の寄宿舍の賄料が三圓ぐらゐであつたのだから。尤も、地方から出て來てゐる、親元の裕福な連中などはその時分でも三十四十と纏まつた金を使つたのも少なかるまいと思はれるのだが、東京居附の學生は大抵中ぐらゐなところの生活及學費が十二

三圓平均であつたのではなからうかと思ふ。

吾々どころではそれもその筈で、學課に對する準備で手一杯で、高い本など買つたところで、讀むひまもなし、又第一讀めるだけの學力がなかつたし、それからさうさう何處でも賣つて居るといふのでもなかつた。人力車なども安かつたには違ひないが、一里やそこらの道なら、天氣が惡るいとか、荷物があるとか、何か急用とかいふやうな事でない限り、學生の身では步かないでは身分に對して相濟まん事のやうに思つてゐたのだ。菓子だつて、果物だつて、さう高いものは賣つてゐなかつたし、又さうさう食へるものではないのだから、そんな方に使ふ金も全く知れたものであつた。要するに、酒でも飮まざる限り、金の使ひやうがなかつたのだ。

二

そんなことは何うでもいゝのだが、實は此處で魯庵大人のことを書いてみたくなつたので、その書き出しに、巖さんのお書きのことを拜借したまでゞある。

魯庵大人は僕には僅に一年の年長に過ぎなかつたやうであるが、しかし、可なりふけておいでゞあつた。少くとも三つ四つ年上だと云つても人は承知するだらうかと思はれるまでゞあつた。

大人との初對面は明治ももう後期に入つた三十八九年頃ではなかつたらうかと思ふ。戸川秋骨君と一緒に丸善の樓上で大人と言葉を交へたのが、大人を親しく知つた始めであつた。戸川君はそのずつと前から大人と相識になつてゐたのだ。その時は紹介も何もなしで、大人も僕も互に相手が誰であるかを知つてしまつたのだから、全く隔意なく言葉をかはしたことを記憶する。その時の話のうちの左の一節を今も尙忘れずにゐる。

『内田といふ男はうまいことをいふ男だ「巖谷小波は活動寫眞に出て來るやうな男だ」と内田が云つたと云つてる人があるんだが、實はそれは僕が云つたんぢやァない。露伴（幸田）が云つたんだ』

さういふ意味のことを云つて、魯庵大人がニコニコ笑つておいでなので、僕は直ぐ、

『内田さん、それりアどちらだつていゝ譯ぢやアありませんか。あなただつて言ひ兼ねないことなんだから』

と云つた。それで、三人とも聲を合せて笑つてしまつた。

三

明治四十一年になると、僕は市ケ谷田町へ轉居して、大人と家が互に近くなつたので數回互に往

來した。僕の家は淨瑠璃坂下で、二階の床前に坐はつてゐると、堀端の電車通りからは勿論、堀を隔てた省線の電車のなかからも、顏を識別けられるくらゐであつた。

或る日のこと、魯庵大人の來訪を得て話しをしてゐると、段梯子を上つて來る足音がして、戸川秋骨君の顏が段梯子の上へ現はれた。これは丁度いゝ所へと云ふんで、戸川君を坐敷へ迎へ入れ、

『それにしても、實にいゝ所へ來てくれたものだね。何か用でもあつてかい』

と僕が尋ねると、戸川君は少し云ひ憎くさうに、くすくす笑ひながら、

『いや、下を通つたんだがね、一寸見えたものだからね』

と、大分可笑しさうである。

僕にも、大體は解つてゐたが、わざと少しけげんさうな顏になつて、

『何が見えたんだね』

と不思議がつて見せると、聰明な魯庵大人はもう逸早く氣がおつきで、

『だつて、禿げてゐるのは僕ばかりぢやアなからう』

と勢好く云ふ（魯庵大人にしては何時にない、陽氣な高い聲であつたと記憶する）。

戸川君が、大分恐縮したやうな笑ひ聲で、

『いや、それが少し□つてるんでね』
と答へたので、三人とも一緒にどつとふきだしてしまつた。

四

魯庵大人は博識であられたし、交友もさまざまな方面に亘つて多かつたやうだし、道念も高くつておいでゞあつたし、且、何うしてあゝまで、文學者の個人的消息にお通じなのであらうと驚かるるまでに、さまざまな人の性行、言動を聞き込んでおいでゞあつた。
けれども、なかには、大人の耳へ飛んでもないヨタ話を入れてゐる者もあつたんではなからうかと思ふのだ。
無論、大人が佐土原町御住居の時分のことだが、或る日何かの話の序であつたと思ふが、
『○○○は實にけしからん男だね。下女を一人ものがさんといふんぢやアないか』
と大人は如何にも憤慨の調子でお話しであつた。
けれども、僕などには、男振りのいゝ若い男が若い下女を置いて獨り棲みをして居れば、ついさういふ關係になつて來るのが當然のことだと思はれるので、それを彼れこれ批判する程の興味が寄

せられなかつたので、何かいゝ加減な返事をして、その話はその上承はらずにしまつた。

それから、これは何かの席であつたかと思ふのだが、大人が幾らか低い聲で、

『有島生馬君などは、日本の本を入れると書齋がけがれると云つてるさうなんだが、大變な譯のものぢやアないか』

といふやうに云はれた。僕はさういふことに就いては有島君から前に聞いてゐたことがあつたので、

『いや、有島君が僕に話したには、日本の古い畫の畫集を買はぬかと勸められたんだが、餘り大形なので、ほかの本と大きさが合はず、何うしても書棚へ收まらないので、まことに結構ないゝものではあつたが、殘念ながら斷はつたといふことであつたので、至極尤な話だと、僕は思つて聞いたよ』

と答へると、魯庵大人も僕の說明の方が道理にかなつてゐると思はれたのであらう、一寸の間何も云はずに、默まつて居られた。

吾々の藏書といふのは大抵、菊版どころが一番大きいくらゐであるのだから、其處へ長さ二尺もあらうといふ大書籍を持つて來たのでは、何ういふ風にしても收まりやうがない譯で、それも金に

十分餘裕があつて、さういふ本を何十册か揃へるといふ譯なら、特に書棚を造くるなり何なりできるけれども、一册や二册では、何うにも置き場に困る譯で、有島君の話は道理至極なんだが、誰か意地の惡るい人が途方もない事を魯庵大人に傳へたのであらうと思ふ。

五

もう無論大正にはひつてからのことだと思ふのだが、或る年の五月雨の頃、千葉鑛藏さんに呼ばれて、五人ほどのものが根岸の千葉邸に集まつた。桑木嚴翼、內田魯庵、與謝野寛、同晶子の諸君と僕とであつた。庭前の楽の細かな樹の新緑が實に何とも云へず美しかつたことを今も忘れ得ない。

岩野泡鳴君と遠藤淸子君の破綻事件の殆ど直後ともいふべき時であつたのであらうと思ふが、誰が持ち出した話であつたか今は記憶しないが、話題が岩野氏の問題に及んだ。重に魯庵大人が話をリイドされたのであつた。僕は妻を代へたといふやうな話が、その席で持ち出されるのを快く　はなかつた。それでも、魯庵大人の舌鋒はます〳〵銳くなるので、もう大抵のところで、さういふ話は打ち切りにしてお貰らひ申さうと思つて、

『岩野君の場合の如きは、已むを得ざる結果だね。あゝ、容易に一緒になり得べき人と無思慮に一緒になれば、直きにあゝいふ破綻になるのは當然だらう』

と、僕は云つた。魯庵大人は僕が岩野君を辯護するとでも思はれたらしかつた。

『それなら、君、別れた妻も子どもも捨てゝ置て、饑えても何うしても構はないのは何ういふ譯だ。それでいゝのか』

といふ風に、憤然として、云ひ放たれるのであつた。

これに對しても、例へば、

『別れた妻や子どもに對しても扶助の義務は十分に感じてゐても、それを規則正しく扶助するといふことは並大抵の收入ではなか〳〵實行しがたいものだと思ふ。さう不人情でない男でもツイずるずるになつて、捨てるともなく捨てゝしまうものだ。吾々が一旦妻子と別居するやうになれば、さういふ風に捨てゝしまうやうになるのは、已むを得ざることだ。だから、まア、吾々はよく〳〵のことでゞもなくば、妻子と別居などはしない方がいゝんだよ』

といふ風に、少し細かく說明してみたかつたのだが、何分その席では、さういふ話を僕は續けたくなかつたので、前記の魯庵大人の言葉に直ぐ續いて、

『もう、此の話は此處らでよさうぢやないか。いろ〳〵のことを云はなければならなくなつて、話が込み入つて來るから』

と、少し不快さうな聲で云つた。魯庵大人も、

『うん』

と云はれて、その話はそれでおしまひになつてしまつた。

魯庵大人の義憤は道理至極だと思ふ。品行の正しい、道念の高い魯庵大人としては、さういふ義憤は特に道理至極であると今も倘僕は思つてゐる。

倘その上に、前記の〇〇〇氏にしても、岩野君にしても、若し魯庵大人のもとへ駈け込んで來て、實はこれこれの件で困まつてゐるが、何とかうまく扱つては頂けまいかと、頼んだと假定する、その場合魯庵大人は、お前たちはけしからん人間だ、そんな窕棒なことに俺がかゝり合ひになつて堪まるものかと云つて、刎ねつけられるのであつたらうか。僕はさうは思はない。魯庵大人は何うも君たちはなかなか盛だね、とニヤニヤ笑ひながら、それ相當の救助の策を講じておやりなされたことであらうと思ふのだ。

唯、しかし、魯庵大人の聰明と世故にたけて居られた點から見て、もう一段底が抜けておいでだ

つたならば、尚結構だと思はざるを得ない。詰まり、あゝまで義憤が外へ出なかつたならば、尚一層僕等は畏服することができたらうと思ふのだ。

自ら正しい人で、他人の品行の批評などは一向しないといふのは、一寸六づかしいことかも知れぬ。けれども、さういふ人が全くない譯でもない。

内田君の古くからの友人、中島信虎君は他人の品行を話題にしない人だと思ふ。僕は中島君を知ることもう三十八年ぐらゐになるが、何うもそんなことを話題にしたことを覺へない。同君は石部金吉とは云へないかも知れぬが、決して所謂不身持の人ではない。戸川秋骨、島崎藤村の兩君も他人の品行を論じない人たちであると思ふ。故人では上田敏君などは、男女間の事は他からは容易に批評のしがたいものだと云つてゐた。

故夏目漱石大人は所謂品行の方正な點では滿點だと思ふのだが、他人の品行に言及したことを僕は一度も聞いたことがない。例の森田君の『煤煙』事件の時など、森田君の行動に對しての道德的批判の言葉は僕は一言も聞かなかつた。此の稿決して魯庵大人を非難しようといふ積りで書いたものではない。魯庵大人の道念の何時も外面へ表はれたのは、大人が純情の人であつたためだと見ることができると思ふ。

坪內逍遙大人を憶ふ

上

坪內逍遙大人の亡くなられたのは、實に急なことで、高年の方とは申しながら、哀悼の念に堪へない。

これで、明治文壇の始め頃から現はれた老大家は露伴大人を除いては、殆ど皆亡くなつてしまつた譯だ。これでは、僕などさへ何時の間にか年齢の上だけでは長老の列に押し上げられることになつて、今更身邊の淋しさを覺へざるを得ない。逍遙大人は、名古屋の藩中であつたのではなからうかとにかく、岐阜縣の太田に名古屋藩の代官所か陣屋かゞあつて、其處で生れられたとか聞いたことがある。帝國大學は、文學科の卒業であつたらうかと思ふ。その時分には、政治經濟科が、文學科と一緒になつてゐたやうであつて、第一回の卒業生が故千頭淸臣、高富孝季などといふ人々であつて、坪內大人たちはその第二回の卒業生であつたらうかと思ふ。早稻田專門學校の設立はその當時

に於てさへ甚だ有意義なものであつた。大隈さんを助けて、此の學校を創立した有識達見の人々のうちの一人であつたところの故小野梓氏などの見識を忖度してみても、此の學校は私學、民學を起さうといふのが主要な目的であつたのであらうと推測せざるを得ないのである。

さういふ學校に、當時の新進學者であつた天野爲之氏、高田早苗氏などゝ共に、逍遙大人が早くから教鞭を執られたのは確に意義あることであつた。

私學のほこり、さういふものを教へる人々も、學ぶ人々も多分に心に持つて居つたのであらう、僕は、早稻田の學校の他の學科の狀態は少しも知らぬが、文學科だけは確かに最初から逍遙大人などの懇切な指導によつて極めて有意義な存在を續けて來たのみならず、或る時代に於ては文學科が早稻田の學校の中心であつたやうに見えたことさへあるのだ。

我が國文壇少くとも明治文壇に於ける早稻田出身者の活動の意義は何人も無視する譯には行かぬと共に、所謂早稻田派の人々の我國文壇に於ける功績も看過する譯には行かぬ。過去に於ける早稻田派の人々の過失を幾ら數へ上げてみても、その功勞の方に於て、多分のバランスの殘ることの拒否し難い事は瞭然たる事實である。

さういふ功勞の基礎を置いた人々は、逍遙大人等のやうな早稻田創業時代からの大先輩であると

云はなければならぬ。

明治四十年頃からの文學に於ける自然主義の運動、大凡其の時代からの新劇の運動、これには、或る人々から見れば、野武士的な粗野なところもあらう、又或る人々から見れば、手緩るい微温的なものとも考へられるでもあらう。けれどもこれらに時代といふハンデイキヤツプを附け、綜合的にその功過を判定するならば、早稻田派の人々の精神が後の時代の潮流に多大な善きものを寄與したことを吾々は認めざるを得ないと思ふ。

悲しいかな、人間の識見はさう弘通であり得るものではない。如何なる大思想も如何なる大運動も、その胎狀に於ては、その起源に於てはさう顯著な偉大なものではない。一見不備な粗雜な思考が後代の思想、活動の淵源をなすことのあるのは何れの國の思想史、藝術史の上にも明白なる事實である。

逍遙大人が明治廿四五年頃に提起せられた沒理想の問題の如きは、藝術論としては極めて不備なものであつたであらうが、之が當時の實際筆を執つて居つた者に與へた影響は決して輕視し得ざるものであつたと思ふ。後に來りつゝあつた文學の傾向、藝術の朝流をば一大鑛脈にたとふれば逍遙大人の沒理想論は、その鑛脈の一端に掘り當てたものではないとしても、少くとも、その鑛脈の所

在をば暗に指示したぐらゐの功勞は確にあつたものと云ふべきである。

即ち、後代の早稻田派の藝壇に於ける諸運動の淵源は遠く逍遙大人の寫實主義の提唱の精神にあつたのだと云はざるを得ないであらう。脈絡を引くことや〻遠くして且つ微弱であるかの如き觀はあるかも知れぬが、か〻るや〻漠然たる精神が時代の潮流に漂ひつ〻次第に定かなる形を取り末遂に一代を震撼したるの觀ある藝術上の基礎的主義にまで花咲き出たることを吾々は忘れ得ないのである。

逍遙大人のか〻る點に於ける功績は沒すべからざるものと、僕は思ふ。

下

遡ぼつてこれを云へば、逍遙大人が『書生氣質』などを公にしたことさへ、當時にあつては意義なきことではなかつた。當時にあつては、文學士といふのが、後代の博士號と殆ど同樣ぐらゐの權威あるものと一般には考へられてゐたのであつたので、さういふ權威ある學者が敢然として、軟らかな小說を書いたといふ事實は何んといつても、世人の注意を引いた譯である。當時小說に筆を執らんとしてゐた者等に取つては、坪內氏の如き最高の學府に學んだ人が殆ど專門的に小說の著作に

従事するといふ意氣を見せてくれたるがため、いかばかりか勇氣を鼓舞され、前途に多大の光明を認めたことであらう。小說家が戯作者の位置を脫して、文學者としてのほこりと抱負を持ち得るに至つたのは、逍遙大人等に負ふところが多いと云つて宜しからうと思ふ。

文藝協會の新劇運動に於ても、主として活動したのは島村氏であつたにしても、あの協會の早く纏まつたことには、逍遙大人の指導が大に與かつて力ありしものと云はざるを得ないであらう。大久保余丁町の坪內邸にあの協會の最初の舞臺が建てられたのを見ても、その邊の消息は窺ふに難くはないであらう。

あの協會の分裂、即ち、島村抱月氏と早稻田大學文科の幹部との絕緣に就ては、逍遙大人に今少しの度量があつたらと思はざるを得ない。度量と云つて惡ければ、今少し疎漫なところがあり、放膽なところがあつたらばと思はれて、殘念で堪まらない。逍遙大人の身邊に諫臣、爭臣を欠いたのが、いけなかつたのであらう。須磨子との事件で﹅一も二もなく早稻田から逐はうといふには、人としても將た早稻田の新劇運動といふ事業から見ても、島村氏は餘まりに惜しき人であつた。けれどもあゝいふ結末になつたのも、逍遙大人の如き几帳面な人としては、あゝいふ風にするより外はなかつたかも知れぬ。畢竟は逍遙大人が此の新劇の事業を餘まりに大事に思ひ過ぎられたがためで

あつたかも知れぬ。逍遙大人にしてもつと呑ん氣に構へて居られたのであつたら、あの協會の生命も事業ももつとズツト伸びたかと思はれるのだ。大先輩になる人々は時々穩健中庸の途を外れてくれてもよささうに思はれるのである。

僕は逍遙大人に拜顏を得たことは唯つた一遍しかない。もう大正に入つてからのことであつたかと思ふ。場所は丸善の樓上に於いてゞあつた。故內田魯庵氏と戶川秋骨君とが逍遙大人の傍に立つて、何か笑ひながら話をして居るのであつた。僕も傍へ行つて、目禮をした、大人は

『年を取ると、字を讀むよりは、繪を見るのが樂になるので』

と云つて、何か繪入りの本を手にして居られた。

大人は能書であられたが、その書簡は卷紙の上の方が、字に殆どかゝるくらゐに切つてあつた。生方敏郎君の話では、大人の書簡は何處へ出したものも皆さうなつて居ると云ふのであつた。

逍遙大人の文壇での功績のうちでは、無論その一端といふに過ぎないのであるが、幸若舞(こうわかまひ)の『百合(ゆ)草若(わか)大臣』が希臘のホオマアの『オデツセエ』の飜案であること、卽ち、ゆりわかはユリシスであることを斷定せられたのは僕等から見れば快的なことであつた。

ユリシスの物語が如何にして日本へ傳はつたかは今日では容易には知り難いことであらうとは思

はれるのであるが『百合草若大臣』がユリシス物語のうちの貴族退治――卽ち――王妃ペネロオペ受難の部分を主話として、日本の物語として作り上げられたものなることは一點の疑ひがないのである。逍遙大人が尙、幸若舞の『入鹿』のなかで鎌足の大臣が僞せ盲目になつて、若君を火のなかへ入れて落すところをば、ユリシス物語のなかのユリシスの僞せ氣狂ひのくだりに比せられたのも、甚だ妥當な英斷だと云はざるを得ないのである。

吾々は、逍遙大人の指示によつて、ユリシス物語及びホオマア史詩の或る特徵までが幸若舞の全體に何等かの影響を及ぼして居るのではなからうかとさへ思はれるに至るくらゐである。

僕は逍遙大人の『百合草若大臣』に關する論斷が公にせられたことは全く知らずに、偶然に幸若舞の本を讀んで『百合草若大臣』がユリシス物語を飜案したものであることに、目を見張るまでに驚いて、或る雜誌にそのことを書き、その後になつて、逍遙大人の論定を聞いたくらゐであるので逍遙大人の英斷に人一倍敬服した譯であつたのである。

逍遙大人の健康狀態に就いては、吾々は多くを聞いてゐなかつたのに、今俄然として、その訃に接す、全く哀悼の至りである。人の壽命は是非なし、唯だ此の際のせめてもの慰藉は、大人畢生の事業たる沙翁全集の飜譯が完成したと謂つて宜しいことなのである

藝術的氣分の充實した人

一

他人を論評するのはなか〳〵むづかしいことだ。吾々のやうなボンヤリ世の中を渡つて居るものに取つては殊更むづかしいことだ。

吾々俗人は、何か自分と利害關係の深い相手に對しては、自己の直接の利益上、多少は先方の人と爲りをも臆測して見ることもありはするが、別にさういふ物質上の關係もないといふ人々に對しては、さして先方の人物に就て考へるといふことはない。

與謝野夫人には度々お目にかゝつたことはあるが、何時も〳〵まことにしとやかな女らしいお方だと云ふのみで、此れと思つて別に異つた印象を受けたことはない。

與謝野氏は御夫婦とも何處までも詩人だ。總べての行動が、皆藝術的興味から出るやうに見える。藝術に直接關係の無いものには、餘まり心を向けられないやうな所が見える。何物を觀られる

のでも、その物を彼方へ置て、その物なりに觀るといふよりか、御自分たちの持つて居らるゝ氣分の壺のなかへ移つして來て、それを觀らるゝといふ風のやうだ。從つて、物に對しては、何等か明らかな解釋を下さなければ居られぬといふやうな所が見える。だから、まことに要領を得た行動に出られる。これは、藝術的氣分の充實と云ふのであらう。

考が狹いと云ふ所は見えるかも知れぬが、無邪氣であつて、他所から見て心持が惡るく無い。夫人の言葉に『駿河臺から中六番へ越したのは、惡藝術の標本たる銅像が近くにあつて、その惡影響が子供に及ぶのを恐れたからだ』とあるのを、何處かでたしか讀んだことがあるが、斯ういふことを吾々が云はうものなら、直ぐ氣取りだと笑はれるであらうけれども、與謝野夫人の口から聞けば、藝術に對する熱心の結果からだと、何人もうなづくことであらう。

二

關西の人と、關東の人との比較をして見ると、何うも關西の人は眞面目なやうだ、ユウモアに乏しいやうな氣がしてならぬ。餘裕が無いやうな氣がする。驀直に目的地に突進するやうに見える。だから、所謂る成功者は、關西の人に多いやうだ。

寛君も晶子君も、眞ッ正直な點に於て確に關西人だ。尤も婦人にはユウモアは無いものだといふ説はあるが、晶子君になると、殊にフザケタ所が無い。如何にも眞劍である。何處までも本氣である。

吾々ならば、隨分氣が咎めるといふやうな感情でも、晶子君は平然として歌つて居られる。態とだといふやうな所は少しも見えない。啻に歌ばかりではない、論議上にもさういふ所は屢々見受けられる。

嘗て、寛君の洋行費を補ふといふので、晶子君は、屛風掛軸等の揮毫の注文を募られたことがある。吾々が儕する新派の文人は筆蹟を直ちに金にするといふのを潔しとしまいかと思はれるのだが寛君も晶子君もさういふ事は一向念頭に置て居られないやうに見受けられた。斯ういふ所にも、兩君の勇往の精神が表はれて居るのだと、嘆服の外はない。

晶子君は、先日洋行される時に、總模樣の派出な着物を拵へられた。途中も日本服で押し通されるといふ話であつた。吾々がさういふ風なことをすれば、ひどく厭味が生ずるのであらうが、與謝野夫人だと、ワザとやるといふ感は少しも起らぬ。藝術的氣分の充實の結果だと、誰でも思ふであらう。身を擧げて、藝術に投ずるといふ意味の前には、何物も荷なひ去られずには居ないのだ。

デヴォーション、即ち、身を委ねるといふことは實に立派なことだ。天下は常に物にデヴォートし得る人のものだ。成功の秘訣は全く共處にある。與謝野夫人は理智の發達した婦人であると同時に、物に熱中し得られる人である。これは、夫人が關西人たると共に、詩人である爲めであらう。

與謝野婦人の著書に『一隅より』といふ論文集があるのは、誰も知つて居ることであるが、あの論調――即ち直ちに明晰な斷案を下さるゝ所が、如何にも寛君の論調に似て居る。斯うまで御夫婦とも同じ思想を持ち、同じ考へ方、言ひ方を持ち、而かも歌といふ文學の同じ方面に立たるゝといふことは、如何にも珍らしい事で、まことに芽出度いことだ。斯うまで同じ心の御夫婦が世間にあるといふことは、如何にも快心のことだ。

寛君は如何にも眞面目な人であつて、着々として、自己の進むべき道を踏み開いて行かれるし、夫人はまた之に伴つて、次第に向上の道を進んで行かれる。寛君は品行方正であり、夫人も亦貞節の聞え高き人だ。何れの點から見ても、今の世の模範的人物と云はなければなるまいではないか。

全く藝術裡に生きて行くといふことは、我々にはむづかしい事なのだが、與謝野氏御夫婦は全く藝術裡に生きて居られるのだ。歌に於ては、御夫婦とも實に天賦の才能を有せられるやうだ。丸るで御自分のエレメントのなかに居られるのだ。丸で蠶が糸を吐くやうである。滯りが無い、あぶな

ツ氣がない。確に名人の域に達せられたものに違ひない。

與謝野氏御夫婦は善く似た御夫婦だといふことは何人も異存は無からうが、アリストファネスの言葉によると、男女は元と一體であつたが、神が切り放して別々の物にしたので、それで男女とも自分々々の片割れをさがし合ふのだ。それが人間に友情あり、戀愛ある所以だといふのださうだ。

與謝野氏御夫婦の如きは、本當の片割同士が旨く合致したものであらうか。

山川菊榮女史

一

山川（舊姓青山）菊榮君を初めて知つたのは、最早三十年程前のことである。

飯田町の電車通、中坂近くのところにユニヴアーサリストの教會があるのだが、そこの牧師であつた赤司氏が其所で女子英語學校を開いてゐて、生田長江君が教へに出てゐた。その緣故で明治三十九年から四十年へかけて、吾々の雜誌『藝苑』の講演會をその教會で開いたのであるが、そのうちに生田、森田（草平）兩君の主唱で『閨秀文學會』といふ名の會を設けて、女子に文學の講演を聞かすことになつた。

講師に與謝野夫人も加はつて吳れた。會員として入會した女子は總數は二十名位はあつたかと思ふのだが、靑山菊榮君もその一人であつた。

小生が今覺えて居るのは、靑山君の外には平塚明子君と林千歲君とである。

所が、講義錄發行の計畫などもあつたのに、それが頓挫したり何かして、主唱者の方に飽きが來たのであらうが、その『閨秀文學會』が解散することになつた。それは、明治四十年の秋頃であつたと思ふ。

所で、その會が解散されると共に、會員中に、何等かの方法で、もう少し勉學の道を得度いといふ二三熱心な人々があつた、それが與謝野夫人に相談を持ち込んだ。

與謝野夫人は、或る日小生の家（その時は牛込辨天町一二三）へ菊榮君を同伴して、小生に個人教授をやつて呉れぬかといふ相談に來られた。尤も、その時は、菊榮君の外に今一人か二人會員の人が一緒であつたかも知れぬと思ふのだが、今明確な記憶は無い。

『私で宜しいことならば、喜んでお引き受けしませう』と、小生は答へた。

それで、菊榮君が小生の宅へ見えられ始めたのは、小生が大久保余丁町の砲工學校前へ轉居してからであつた。

その時分には、菊榮君の外に、大貫かの子君（今の岡本夫人）小野美智子君も小宅へ來られた。平塚明子君も一回は來られたやうに覺えてゐる。

その時には、唯だ雜談的に文學の話をしたのみであつた。

小生などが學生であつた時代は、學問と云へば外國語を學ぶことより外に無いといふ風に思はれて居る時代の續きであつたせいか、小生などは今日でも尙外國語が大事な基礎學だといふ考を脫し得無い。これは間違つた考かも知れぬが、小生は外國書のお蔭で、僅ではあるが、今日持つて居るだけの智能を開發したのであるから、小生自身に取つては、僅ながら英語を讀み得るといふことが敢て學問とは云ひ兼ねるが知識の基礎になつて居ることだけは確であり、小生が今持つて居るだけの僅な知識でも、小生としては、漢學とか國學とかからのみでは到底得られなかつたらうと考へざるを得無いのである。

それ故に、小生は若い人々には誰にでも、その人の出來得る場合であつたら、外國語を一通り勉强することを勸めるのであるが、菊榮君はその年の春、小石川の竹早町の府立第二女學校を卒業したので、年齢は僅か十八であつたと思ふ。それで、菊榮君は先づ英語を勉强することに決心されたので、小生はそれは至極結構だと思つて、その稽古を始めたのは、明治四十一年に入つてからだと思ふのである。

二

四十一年の二月に小生は市ケ谷田町二丁目一番地へ轉居したが、さうなると、靑山家は土手向ふの四番町なので、菊榮君が拙宅へ來られるのには大に便利になつた。菊榮君の爲めに讀んだ最初の本は何であつたか今は覺えて居無い。ツルゲエネフの散文詩ででもあつたらうかと思はれるものゝその點は更に明確で無い。

そのうちに、菊榮君は津田英學塾へ入學されたが、それからは學友を二人小生のところへ紹介されて、自身もともに英書を讀んだと思ふ。菊榮君だけの時分かと思ふのだが、メレジコオフスキイの『イブセン論』を讀んだことは覺えて居る。ブランデスの『アナトオル・フランス』も讀んだ覺えがある。小本の『マキシム・ゴルキイ』も讀んだことがある。

その少し前かと思ふが、物を書くことを勸めて居るうちに、菊榮君が短いものを書いて來られたが、描寫が少くつて、感想――皮肉な感想――の勝つたものであつた。その時分でも、小生は菊榮君は所謂る閨秀文學者になる人では無い。同君の行く路はもつと學者的な方にあるのだと思つてゐた。

話が前後になるが、松本道別君が主唱で文學講習會を和強學堂で開いたことがあるが、菊榮君と今一人神山君とか云つた女の人がその會員のなかに加はつて居た。菊榮君が津田英學塾へ入學され

たのはその後のことであつたかと思ふ。

そのうちに、小生は青山家の方々と心安くなつた。母君森田氏、菊榮君のお姉さん森田松榮君、菊榮君の令兄青山延敏君などが、時々來訪せられるやうになつた。

それで、菊榮君兄弟は、水戸の漢儒青山延于大人の孫であらるゝことが分つた。延于大人は四人兄弟であつて、四人とも學者であつたのである。

菊榮君がなか〳〵しつかりした婦人であることは、余丁町の拙宅へ見えられた時分から明であつたのだが、餘程口數の少い、可なり陰氣な婦人であつたが、津田女塾へ入られてからは、次第に陰氣なところが無くなつて行くので、これは菊榮君の爲めに喜ばしいことだと思つて見て居るうちに、卒業せらるゝ時分になると、餘程人附き合ひなども旨くなられたやうに見受けられた。

母君森田氏からは『相當の緣があらば無論嫁にはやるのだから、心掛けてゐてくれ』と、小生にも、拙妻にもお話があつたので、何うか適當な緣をと祈つて居たのであるが、何うも思はしい先が無かつた。

或る時、菊榮君と世間話をして居た序に、

『あなた位になると、上手の相手といふのは卅位の連中のなかには一寸と見當ら無い。おつかさま

からのお話もあるので精々氣はつけて居るのだが、何うにもこれは何うでせうと推薦してみるやうな人が無い。つまり、あなたがエラくなり過ぎたのだ。斯うなつては矢張り、あなたの方からグツと調子を下げて、若い燕にでもなさいますかな』

と、云ふと、菊榮君も笑ひだして、

『若い鳥といふのもあるんださうですから』

と、云つた。

三

明治四十四年から四十五年にかけて、小生は樋口一葉の全集（日記及び小說）の校訂をやつたがその時には菊榮君に校正を餘程手傳つて貰つた。

その後であつたか何うか、今明に覺えて居無いが、菊榮君は婦人が東京帝國大學へ入り得る先例を開く爲めに、文科の選科へ入學を志願して見やうと思ふが、何うであらうか、志願者があれば、許しさうなのだがと小生のところへ相談に來られた。小生は無論贊成したのであるが、これは志願の手續はされなかつた。

津田女塾を卒業されてから、菊榮君は何處かの家庭教授を二三軒引き受けて居られたやうであつたが、その後、三省堂の辭書の仕事にも通つて居られたやうであつた。

大杉榮君が佛蘭西語の教授を始めだしたのは、大正二年であつたか、三年であつたか、今確には記憶せぬが、菊榮君はその會へ入つて、神近市子君と一緒に、佛蘭西語の勉强を始められた。

それから、大杉君の會が横寺町の藝術俱樂部で開かれるやうになつてからは、菊榮君も其會に毎回出席された。

大正五年の夏かと思ふのだが、或る日菊榮君が來訪されて、

『結婚することに決した』

と、云はれたので、小生は至極結構であるが、先方はどなたとかと聞くと、山川均君とだといふ返事である。成る程これは良緣だと小生は思つた。

所で、菊榮君の云はれたのは、

『式のことなどはやつてもよし、やらんでもよしといふ考なのだから、式を行はないでは家の者が氣がすまぬといふのなら、別にその意に背いて、式といふやうな虛禮には反對だなどと頑張る必要は少しもない。その邊は家の者のいふ通りにして一向差し支へは無い』

といふやうな意味に聞き取れた。

其處で、從來の交誼もあることだから、小生が媒妁人になれば、家の者も納得するであらうから

それを引受けて呉れぬかといふのであつたので、小生は甚だ光榮であるから、引受けませうと答

へた。

するど、菊榮君は、いよ〳〵式を擧げると極まるまでは、先づ發表しないで居て呉れといふ賴で

あつたので、小生は勿論その點も承知した。

小生は間際になつて話せば宜しいと思つて居たので、山妻には何も云はずに置いたので、森田夫

人から山妻へ菊榮君の結婚の話があつた時に、山妻はその時始めて聞いたことを答へたので、森田

夫人は、小生が餘りに家内をば眼中に置いて居無いのに驚かれたやうであつたと、山妻は小生に話

したのである。

間も無く、四番町の土手際、靑山家から二丁程西のところに、山川氏は居をトされて、或る夕、

小生夫婦が媒妁して、結婚の式をかたの如く濟ました。

その翌年の秋に、長男振作君が生れたのである。

均君も、菊榮君も、戸籍上の手續を踏むことに反對ではなかつたのであるから、結婚も出產も屆

出をされたことは勿論である。

四

大正の始め頃には、所謂閨秀文學者も可なりな數に上ぼつて居つたのであつたが、それ等の人々の多數は、社會的知識といふやうなものを缺いてゐたので、一寸とした個人的感情を取り扱かう方面に於て少々の成功を收めたといふのみであつて、人生批評とか、文明批評とかいふ方面とは全く沒交涉であつた。

即ち、それ等の閨秀作家の文學三昧は、お孃さん、奥さんの風流韻事といふ程度をば幾ばくも離れたもので無いといふ觀無きにしもあらずであつた。

自然主義が徹底し行くべき進路は、官憲の所謂る取締りなるものゝ爲めに阻止されて了まつたと共に、極めて平俗なる個人的センティメンタリズムに共鳴する若き讀者がふえて來た。此に於て、自分の平凡なる經驗をば異常な經驗でゞもあるかの如く信じ、自分の出會つた事件のみが人生の大事件であるかの如く感ずる若き作家が、如上の若き讀者に喜び迎へらるゝに至つた。此の如き文壇の形勢は、閨秀作家の簇出に甚だ好都合なものであつた。よし、此風潮に乘じて出現した女流作家

はさう多數では無かつたにしても、此風潮の爲めに利便を得た女流文學者が二三あつたことは爭ふべからざる事實である。

小生は當時或人に、今の如く文學が平俗な個人的センテイメンタリズムを基調とする勢が永く續くものとすれば、男の作家は女の作家に負けざるを得ざるに至るであらうと、話したことがある。斯う云つたところで、小生は若き男女が謂はば幼稚な作品の發表から出發するのを禁じ度いといふのでは無い。唯だ、さういふ作品は甚しく重んずべきもので無いといふことを文壇の輿論が認むるのを至當とするのである。

その後になつてから文壇の形勢が大分變つて來て、次第に平俗なセンテイメンタリズムで賣り出した作家の凋落を來たした。卽ち、文壇の一般傾向として云へば、作家の理智の働いて居らぬ作品は餘り迎へられ無いことになつた。

のみならず、今日では、文界（廣き意味での）の中心が、小說、戲曲といふが如き純文藝を離れて、文明批評、社會批評といふが如き評論の方へ移りつゝある形勢さへ看取された。言を換て言へば、純文藝進展の爲めにも、文明批評等を以つてする主張の必要が生じ來つて居たのである。

斯ういふ形勢である以上、從來の如き純文藝的婦人舊作家の存在にも出現にも好便な狀態では無

くなつたと共に、婦人の立場から如上の廣き評論壇に打つて出でて、婦人の權利を主張する必要は益々切實になつて來た。

與謝野夫人がもう餘程前から、婦人の缺點が理智の缺乏であることを痛感せられ、今日では文明批評の方面に重に力を入れられるやうになつて居ることは、周知の事實である。

五

山川菊榮君の文界への出現には、如上の文界の形勢が背景をなして居つた。のみならず、婦人の立場から、社會を見、人生を見て、婦人の權利を主張し度いといふ考は、教育のある婦人の心裡では今は痛切なる要求といふ程のものには未だなつて居らぬかも知れぬが、次第に覺醒し來るべき要求であることは確である。山川菊榮君の主張は、今後大に起り來るべき婦人の權利主張の先驅である。菊榮君の今日主張されるところが、現在の日本婦人の多數の自覺して居る要求と今のところ未だ餘程懸け離れて居るやうな觀があるにしても、必らず近き將來に於て、少くとも、婦人中に新しき有識階級が起つて來て、山川君と同じ主張を揭げて、邁進するに至ることは、寸毫の疑を容れざるところである。

山川菊榮君は、その服裝に於ても、動作に於ても、言語に於ても、普通人と少しも違つたところは無い。山川夫人はその點では所謂る新しき女では無い。吾々は山川菊榮君のさういふイヤ味の無いところを甚だ快く思ふ。

或る人は、最近に、所謂る婦人論客の中で山川菊榮君が一番學問があるだらうと、小生に語つた。小生は直ぐ、兎に角山川菊榮君が一番外國語が解かる人であることだけは何うしても確であると答へた。

若かりし日の島崎藤村君

島崎藤村君が、今年は五十になつたといふことである。なるほど數へてみれば明かにさういふ歳になる筈であるのだが、ちよつと聞くとなんだかもうそんな歳になつたのかといふやうな不意な感じのしないこともない。自分の歳でさへ時々、もうそんなになつたのかと變な感じのすることさへあるのだから、他人の歳だとちよつと不思議の感じのするのは、敢て怪しむに足りないやうな氣もする。しかし、たゞちよつと考へると、島崎君を知つてからさう長いことではないやうな感じがするに拘はらず、實際はもう三十二三年も前のことであるのだから、隨分長い昔のことである。

三十年と云へばやがて一時代の間であるのだが、そしてその間には文壇のみで云つても、隨分樣樣な變化や出來事があつたわけであるし、我々個人の上で云つても外形的には樣々な出來事に遭遇したのであるに拘はらず、我々個人について云へば、そんなに變つてはゐないと思ふ。何時であつ

たか、島崎君と友人のことなどでいろ〱雑談をしてゐるうちに、島崎君は『人はさう變るものかねえ』と云つた。僕も『イヤ、なか〱變らないものだよ』と答へたことがある。實際のところ、人は變るやうに見えるのだが、實際の根本的たる人そのものは變つてゐない。變つたやうに見えるのは、云はゞ外形的な部分であつて、人としてのエッセンシアルな部分は、何時までも變らずに殘つてゐる。職業が變るとか境遇が變るとか云ふことになれば、外形的な部分が思ひ切つて變るかといふに、大抵の場合何うもさうでないやうである。中には外形的な部分まで殆どまるで變らないやうな人さへある。だから、人はおよそ二十歳位までにその人となりが定まつてしまつて、それから後はその人となりの延長となるわけだと思ふ。

世間には、何等の計劃なしに生きて行く人と、油斷なく自分の生活に對して計畫を立てゝ行く人と二種類あるわけであるが、後者の方で己れを變へてみようといふ努力があつたとした場合でもその人の根本的な部分は決して變らない。さういふ場合の原動力になるのは、その人の根本的な部分であるのだから、云はゞ外形的な部分は如何樣に變るにしても、その根本的な部分が何時までも殘つて行つて、却つて外形的な部分が變つてゐるだけに根本的な部分が變らないのが殊に限立つといふ場合が少くない。

ところで島崎君が己れを變へようとした努力をしたかどうかといふと、殊に君の若い時分に於ては、さういふ努力が可なりになされた事を我々は認めざるを得ない。けれども、それがために變つたかとも思はれる部分は、島崎君の性格のほんの一部分であつて、大部分は卽ち根本的な部分は刎論變つてゐない。島崎君は、昔から自分の人生に對する計畫を立てる人であつた。自分の人生に將する計畫については、可なり綿密に注意をはらふ人であつた。從つて、自分のもたざるものゝ上に計畫を立てられる筈はなかつたらうと思はれる。さういふ生活方法に於ける島崎君は、自己の變革若くは進歩を計ることに於て、己れをそして己れの持てるものを土臺にして進んで行くといふことになつたのであらう。それが意識的であるか無意識的であるか、ある時は意識的であり、ある時は無意識的であつたのである。或はある部分に對しては意識的であり、ある部分に對しては無意識的であつたといふ風であつたのか、さういふ點に對しては立ち入つて考へてみないにしても、我々が知つた時分からの島崎君の來路が、島崎君自身の根本的な人となりを自ら守り、且つこれを發展させたことになつてゐることはたしかである。

僕は今いち〳〵例證を擧げて、さういふ當然なことを論定しようとは思はない。たゞこゝでは、僕が知つてゐる島崎君の生活の一部分を語つて讀者の參考に供さうと思ふ。

二

島崎君は、名を春樹といふ。信濃の中仙道にあたる木曾の馬籠といふところで生れた人である。木曾には吾妻橋から美濃の落合まで新道がよほど前に出來たのであるから、或はまた、中央線の鐵道の木曾を通る汽車も落合から新道の方へ近く通じてゐるのであるから、今日では馬籠のある舊道を通る旅人はなからうと思ふ。馬籠は吾妻橋と落合の間の舊中仙道にある一驛だと聞いてゐる。島崎家は、土地でも可なりの資産家で可なりの名望のある家であつたらしい。お父さんは國學者で、神道の信仰家でよほどの憂世者であつたらしい。亡くなつたのは島崎君の極く若い時分であつたらうと思ふ。お母さんの方には僕は數回會つたことがあるが、これはごく落ちついた物固い田舍の婦人のやうに見受けられた。そのお母さんは明治三十年頃に本郷の森川町の島崎君の兄さんの家で歿くなられたと記憶する。島崎君には兄さんが三人ほどあり、姉さんが二人ほどあつたと思ふ。大抵みな存生中であらうと思ふ。島崎君は、小學教育を、大部分を東京で受けられたのでないにしても、その一部分は東京で受けられたらしいのである。多分よほど早く東京へ出て來られたのであらうと思ふ。或は十歳にならないうちであつたかもしれない。親類ではなかつたのであらうが、可なり親密

な間柄の家に吉村氏といふのがあつて、行く行くは、そこの養子になるといふやうな話であつた。その吉村家へ一番上の兄さんにつれられて來たやうに聞いてゐる。小學校は京橋の鞆繪小學校であつたのであらう。福田德三君から、島崎君と同じ學校にゐたことがあるといふ話を聞いたことがある。尤も、島崎君の方が級が少し上であつたといふ話である。小學校を出てから、島崎君が何所の學校へ入られたかよくは知らないが、一遍は三田英語學校とかいふ私立の英語學校に通ひ、そこで今三菱會社の主要な位置に居られる江口定條氏の教をうけたことがある。それから、その後であるか前であるかわからないが、神田淡路町の今の開成中學の前身共立學校にも入つてゐたことがあるといふことを、島崎君自身から聞いたことがある。白金の明治學院へ島崎君が入つたのは、二十一年頃であらうかと思はれる。その前に一遍高等學校の試驗を受けたのではなからうかと思はれる。その時分の島崎君の志望は政治家であつたと聞いてゐる。何ういふ關係からであつたか訊いてはみないが、その時分にはもう島崎君は耶蘇教信者になつてゐて、植村正久氏、巖本善治氏といふやうな當時の耶蘇教界の名士と知り合ひになつてゐたやうに考へられる。その時分の島崎君が明治學院でも教會でも可なり才氣煥發な青年と見做されてゐたらしい。島崎君の『春』の中には島崎君は、出過ぎるといふ意味で、鑄掛屋の天秤棒といふ綽名をもらつたといふことを島崎君自身が書いてゐ

る。それは兎に角、明治學院での學生としての成績は、秀れて好くつて、一番か二番位の位置を占めてゐたやうに聞いてゐる。

明治十八年頃から起りかけた當時に於ての新らしい文學運動、主として政治若くは思想の方面では、民友社及び『日本人』の連中に代表された運動、それから純文學の方面では坪内氏の一團、森氏の一團及び硯友社の諸氏によつて起された運動が當時の靑年には可なり影響を與へた。『日本人』に於ける志賀重昂氏の華やかな文章が、若い島崎君に可なりな影響を與へたことは明かである。明治學院では、學生間に二三のグループが出來て、夫々廻覽雜誌を出してゐたのであるが、その一つでは島崎君が主筆の位置であつて、盛んに『日本人』流の文章を發表したといふやうに聞いてゐる。それと同時に硯友社などの文藝も島崎君に可なりな影響を與へたらしく考へられる。小說を書いて巖本氏のところへ持つて行つたが、巖本氏から、こんなものを書いてはいけないと云つて叱られてその原稿をとり上げられさうになつたので、もう決してかういふものは書かないと云つて、その原稿をもらひ下げて來たといふ話を島崎君から聞いたことがある。それは二十一年か二年かのことであらうかと思ふ。

僕は明治二十二年の一月に明治學院の二年級に入つたのであるが、その二月頃かと思ふのである

が、島崎君に紹介されたことがある。それまでは島崎君は學校へは出て來なかつたやうである。今はもう燒けてしまつたが、敷地の北はづれにヘボン館といふ建物があつて、それが寄宿舍になつてゐて、その地下室が食堂になつてゐたのであるが、どこかその入口か何かの少し薄暗いところで島崎君に紹介されたやうにおぼえてゐる。洋服を着た背の低い如何にも氣の利いた顏つきの靑年で、少し前こゞみになつて、少し含羞むだやうに僕に言葉もなく挨拶したのが島崎君であつた。それからずつと一學期の終りまで島崎君は缺席してゐた。

三

九月になると、島崎君がまた學校へ出て來るやうになつた。その時は脚氣だといふので、島崎君は竹の杖をついて教場へも出てゐた。高等學校の試驗を受けたのだが及第しなかつたといふ話である。その前の島崎君はどういふ人であつたか僕は自分では知らなかつたのであるが、評判では才氣喚發的の人であつたといふのであつたに拘らず、九月に出て來た島崎君がその評判とはよほど變つた意氣消沈したやうな、妙に控え目のあるやうな人であつた。しかし、それでゐて時々皮肉なことも云へば、なかなか銳い考も持つてゐるやうであつた。その時分の島崎君は、別にさう自ら進んで

友人をつくらうといふ風でもなかつたやうであつたに拘はらず、僕等二三の者とは何となく親しくなつたやうに考へられる。僕はそれまでの島崎君に關する評判から考へてみて、島崎君の變に控え目な意氣消沈してゐる態度は、高等學校の試驗を通過し得なかつた面目なさを覆ふ手段であるかのやうな氣がしてしかたがなかつた。杖をついて歩いてゐるなども、脚氣は實際それほどひどくないのに拘はらず、それも一種のてれ隱くしのやうなことではないかと云ふやうな氣がするのであつた。然し、それは僕の方の僻見であつて、實際はさうでなかつたらうと思ふのであるが、とにかく島崎君のその時分の態度なり行動なりが、どうも不自然であるやうに僕だけには思へたのだ。僕は忌憚なくそれを云つた。『貴樣は陰險でいけない』と僕が笑ひながら云ふと『陰險だとは隨分ひどいことを云ふ。どこが陰險だ』などゝ島崎君が苦い顔して答へたことなどがある。あんまり僕がつけつけいろ〳〵なことを云ふので、島崎君もむきになつて取組合ひが始まつたことなどもあつた。けれども、たゞ取組合ひだけで、毆ぐり合ひはしなかつたやうにおぼえてゐる。考へてみると、その時分には、もう島崎君に對しては敵意といふものを有つてゐたのではなからうと思ふ。何となく親しくなつて無遠慮にいろ〳〵なことを云ふやうになつてゐたからでもあらうと思はれるのだ。九月に歸つて來てからの島崎君の教場での擧動もよほど變つてゐた。先には非常に成績のいゝ學生であ

つたといふ噂であつたが、九月からの島崎君の擧動は、まるで違つてゐた。その時分の明治學院のやり方は、大抵みな英書であつて、教師はその教科書の中の四頁なり五頁なりを次の日の時間までに、讀んで來いと命ずる。我々の方では、そこを讀んでおいて教師の問ひに答へるといふやり方であつて、大抵の學生は教師の問ひに對しては、少しは答へようと骨折るのであるが、島崎君にはさういふところはちつともなかつた。教師の方から島崎君に命ずると、島崎君はちよつとお叩頭をするだけで一言も答へない。教師も仕方がないから、島崎君のところを通り越して、他の者に問ひをかけるといふ風であつた。最も面白いのは、試驗の時に問題が出てから十分も經たないうちに氣がついてみると、いつの間にか教場から島崎君の影が消えてゐることなどもあつた。ランディスといふ教師は島崎君が答案も出さず、斷はりもせず忽然として教室から姿をかくしたのをみて『義務觀念のない學生は仕樣がない』と憤りを洩したこともある。然しその教師は島崎君をよく理解してゐたとみえて『島崎といふ男は非常によく出來る男だが、非常に怠け者だ』と或る學生に話したことがあるさうである。

二十一年頃の島崎君は、學生中の辯論家であつて、演說なども度々やつたやうであつた。二十二年の秋であつたと思ふが、たつた一遍島崎君の演說を聞いたことがある。下を向いて考へ考へ話す

のであつたが、それでも論理もよく通り發音も明晰であつて、可なり上手な演說振りであつたと記憶するが、演說はたゞそれ一遍切りで、明治學院では演說を聽いたことがない。

そのうちに、島崎君の教場での行動がよほど變になつた。要するに誰とも口を利かなかつた。授業が始まると、どこからともなく忽然と教場へ出て來るのであるが、授業がしまふとどこかへ見えなくなつてしまふ。時間の間の十分か十五分の休憩時間に我々は雜談をするのであるが、島崎君がその間どこに居るのかわからなかつた。時たま遠くの方を步いてゐる島崎君の影を見かけて話でも仕かけようと思つて、その方へ步いて行かうとすると、何時の間にか姿が見えなくなつてしまふ。その時分、僕は博文館から『歌學全集』といふ叢書が每月一册宛出るのを買つてくれと云つて、島崎君から何册分かの金を托されてゐたのであるが、その本を買つて來ても、島崎君に手渡しをする機會がなかつた。仕方がないから、島崎君の荷物のおいてある座席へその本をおいておくと、授業の始まる間際になつて、島崎君がどこからともなく這入つて來て、その本をみると僕の方を向いて默つて目禮をするといふ、たゞそれだけであつた。

二十三年の夏頃までは、我々は大抵前に云つたヘボン館の寄宿舍に居たのであるが、島崎君も僕もそのうち寄宿舍を出てしまつた。島崎君は多分學校の近邊の素人家か何かに下宿したのであつたの

だと思ふ。けれども、どこにゐるのだか誰も知つてゐるものはなかつた。さういふ風であつたに拘はらず、島崎君は學校の教科書の方こそ顧みないやうに見えたが、之に反して一般的の勉強は怠らずいろ／＼な本を讀んで居つたやうである。二十三年のことか二十四年のことか今はよくおぼえないが、モオレエの英國文人傳のうちのポープ傳を全部飜譯した原稿を僕に見せたことがある。それは茶褐色の肉で刷つた半紙の罫紙へ書いた原稿であつたと思ふ。その罫紙は島崎君が自分で刷つたといふ話であつた。――ところで、島崎君の我々と口を利かなくなつた時代は何時頃であつたらうかと考へてみると、どうも二十三年の暮から二十四年へかけてのことであつたやうな氣がする。二十三年、即ち吾々の三年級の時分には、學校にジュニア・コンテストといふ演說の競技會があつて、それに一等へは十圓二等へは五圓といふ賞金が出ることになつてゐて、それは英語演說であるので原稿を豫め教師の許へ出して、その中から八人ほど選定されて、その八人が競技に加はるといふことになつてゐたのであつたが、島崎君は無論その中などには加はらないで、まるで權利を放棄した形でポンチなどを描いて吾々を冷かしたことがある。さういふことから考へてみると、島崎君のミサンスロピック時代もおよそ推定出來るのである。

二十四年の六月、即ち卒業時代に近くなつて來ると、島崎君のさういふ、云はゞ厭人的な態度も

變つて來て、我々とも可なり親しく口をきき合ふやうになつた。卒業してから可なり後になつて聞いたことであるが、島崎君が我々を絶對避けるやうになつた時分の心持は、凡そ次のやうなものであつたといふのである。

自分は人から才人だの、出過ぎ者だのと云はれる。實際どうも人と話をすると、吾れ知らずお座なりのことを云つたり、自分のほんとうに思つてゐない事を云ふやうに感じる。で、さういふことをいはない樣にするには人と一切話をしないに限る。さういふ風に思つたので、誰れにも知らせずに或素人家に下宿して、絶對沈默を守ることを試みてみたのであるが、なかなか口を利かずにゐることは苦しくつて仕方がない。そこで對手が人間だから、こつちから何か話しかければ向ふからも何かいふ、それで向ふのいふことに釣込まれて、こちらもいゝ加減なことをいふわけなのだが、若し向ふが人間でなければ、向ふからは何もいはないわけであるのだから、こちらが要心して、ほんとうのことさへいふことにすれば仔細はないわけだ。絶對に默つてゐることが出來ないとするならば、さういふ方法を取るより外仕方がないと考へた。ところが、魚籃坂あたりの或寺に西行か何かの木像があつた。で、その寺へ行つてその木像に話すことにした。それを幾日もやつてゐるうちに、ふと氣がついてみると、絶對に默つてゐることが出來ないとするならば、木像に向つて話をす

るのも、人間に向つて話をするのも、別に變りはないわけである。自分の考へが間違つてゐれば、木像に對してゞも間違つたことをいふわけである。人に向つては間違つたことをいつてはいけないが木像に向つてなら間違つたことをいつてもよいといふ理由はない。また、木像に向つてならば間違つたことをいはずにゐられるといふのなら、人間に對してもこちらの心次第で間違つたことをいはずにすむわけである。だからこれは人間に對しても、間違つたことをいはない様な修業をしなければ、何んの役にも立たない。だから自分はこれからは、人間に對して話をする際に、充分に要心して間違つたことはいはない様にすべきであつて、自分が間違ひをしない爲めに人を避けるといふのでは意味をなさない。

まづ、凡そさういふ風に考へて、人を避ける態度をやめて、普通に吾々ともロをきゝ交際する様になつたのだと、島崎君が話して『イヤ、僕はこんな簡單なことをさういふ風に手數を掛けなければ解決出來ない人間なんだからね』といつて少し苦い笑ひを洩らしたことがある。

そんな風に人には會はずにものを考へてゐると、變なもので、時々妙な幻覺をみる様なこともあつた。下宿の庭先へ鶴が來て、ひよいと立つてゐる様な心持ちのしたこともある。また、夜横濱まで歩いていつたことがあるのだが、川崎か鶴見あたりで眞夜中になつて、線路の方をみると、車も

何もすつかり火の汽車が線路の上をあつちへいつたりこつちへいつたりするのが見えたことなどもある。

そんな話を島崎君がしたことがある。

四

二十四年の六月に明治學院を卒業してからは、島崎君は濱町の吉村家に居た。前に云つた通り、その吉村家の主人は、島崎君を養子に仕様かといふやうな考もあつたらしく、島崎君の學資などは少くとも大分補助したらしかつた。それで、學校卒業後の島崎君の職業に就いても、可なり意見を持つてゐたのではなかつたらうかと思はれる。どうも、島崎君が文學の方へ進んで行かうとする傾向をもつてゐるのに對しては、吉村家では賛成ではなかつたらしい。文學が職業にする價値のあるものだといふやうな考は、當時の普通人の考からは非常に遠いものであつたので、吉村家の主人は、島崎君の傾向を喜ばなかつたものと考へてよろしからうと思ふ。

島崎君は、その前の年あたりから、前に云つたポープ傳の飜譯や、その他大分書いたものがあつたらしいのであるが、それをみんな燒いてしまつたといふことを聞いたのは、學校卒業後間もない

ことであつたやうに思ふ。『すこし考へることがあつたので、書いておいたものを、藏の前でみんな燒いてしまつた。家のものにどうしたのだと訊かれたので、書いたものをみんな燒いてしまつたと云つたところが、何故そんな勿體ないことをすると云つて叱られた』と島崎君が話したことをおぼえてゐる。

その吉村といふ人の家へは、僕も數回訪ねて行つたことがあるが、その家の主人は、明治座の芝居茶屋に金を貸すといふやうな人であつたさうで、ちよつと、隱居所とでも云ひさうな洒落れた住居の家であつた。一遍はそこの二階へ泊めてもらつたこともある。

或日島崎君に逢つたが、島崎君がかういふ話をした。『僕は君達と違つて、九ツの時から他人の仲へ這入つてゐて、自分の家庭といふものを知らなかつたので、それが僕の性格に大分影響したと思ふ。たとへば、變に控へ目なところのあるのなども、その一例だらう。僕は、自分のさういふ性格の殼を破り度い破り度いと思つてゐるものだから、此れまで度々不自然に見えるやうな方向へ走つたことがあるんだ。母親などが東京へ出て來て、それと一緒に住まふやうになつてから、はじめて自分の家といふものが出來たといふ形なんだ』

島崎君は、俳諧、淨瑠璃、小說などの德川文學を可なり讀んでゐた。矢の倉の方から入つて行く

濱町の横町の角位なところに、古い和書を賣つてゐる京常といふ小さい本屋があつて、主人は小男の愛嬌のない爺さんであつたが、島崎君はその店で八文字屋ものなども可なり買つて讀んだやうであつた。僕は西鶴の『武道傳來記』を、島崎君から貰つて今も保存してゐるのだが、その本なども、島崎君がその店から得られたのではなからうかと思ふ。

西鶴の所謂る好色本が、淡島寒月氏によつて硯友社の人々へ紹介され、それから硯友社の人々によつて廣く讀書界へ紹介されたのは、明治二十三年頃であつたかと思ふのであるが、西鶴の原本は今日ほどではなくとも、その當時でも可なり珍書であつたらしい。五冊位になつてゐる一代女などが五圓ほどだといふのであつた。その時分の五圓は、學生の一ヶ月の下宿料と小使を合はせたほどのものであつたので、吾々にとつては可なりの大金であつた。だから、島崎君も或は西鶴本の一二種位を、その爺さんの店から買つたかも知れないが、西鶴ものをさう幾種もその店から買つたわけではなからうと思ふ。代價はとにかくとして、その爺さんもさう幾種も揃へ得ることは出來なかつたらうと思はれるからである。その時分、湯島の聖堂裏の處に、武藏屋といふ小さい本屋があつて、そこから近松の飜刻が大分出た。それから續いて、西鶴の『五人女』『一代男』の飜刻がそこから出、それから、どこか他の本屋から『一代女』が出、春陽堂から尾崎紅葉の校訂で『本朝若風俗』が出た。島

崎君も吾々と同樣に、近松ものや西鶴ものは大部分さういふ飜刻もので讀んだのであらうと思ふ。

五

學校卒業間もなく、島崎君は巖本善治氏の『女學雜誌』へ飜譯を載せはじめた。一番初めは、アディソンの『ヴイジョン・オフ・マアザ』の飜譯であつた。その次のは、セキスピアーの『ヴイナス・アンド・アドォニス』の飜譯であつた。これは近松式の淨瑠璃風な文體で譯したもので、可なり巧いものであつた。今讀んでみても矢張り巧いものであらうと思ふ。今の二十一二の青年には、迚もあれだけのものは書けなからうと思ふ。島崎君はスタイリストである。今も勿論さうであるが、昔は尙一層さうであつた。文學界のはじめの方に出た、島崎君の諸作を見るならば、何人もそれがスタイリストの筆になつたことを認めざるを得なからうと思ふのであるが、ごく初期のもの即ち前記の飜譯に於てさへ、島崎君のスタイリストであることは疑もなく明かに表はれてゐる。勿論、その時代には我々の書くものは、言文一致でなく、所謂文章であつたのであるから、誰も彼れもみなスタイルを重んじたのではあるが、その中で少くとも吾々の中では一番スタイリストであつた。

僕のところに、島崎君が栗本鋤雲翁の詩を寫した罫紙十枚ほどのものが保存してあるのだが、そ

の栗本翁のところへは島崎君は漢學を習ひに行つた。それは『女學雜誌』時代の頃ではなかつたらうかと思ふ。木村熊次氏の夫人であつたらうと思ふのだが、木村鐙子といふ人があつて、明治女學校はその人の力で出來たのだといふ風に聞いてゐるが、木村氏が幕末の人々と親しかつたので、巖本氏、木村氏といふやうな路を通つて島崎君が栗本翁に師事したのであらうと思ふ。その他島崎君が田邊氏――號を蓮舟と云つたかと思ふ――のところへも漢詩か漢文を習ひに行つたことも聞いてゐる。田邊氏は今の三宅夫人龍子氏のお父さんであつて、元老院議官かなんかであつた人であると思ふ。幕臣のなかでは、勝海舟、木村芥舟、高橋泥舟、所謂る幕末の三舟と云はれた人々に次いで才名の高かつた人である。――僕は二十四年の十二月から、高知の英語學校を教へに行つたので、島崎君の二十五年中の生活はあまり知らないが、島崎君は二十四年か五年かに巖本氏の明治女學校の英語教師になつた。僕は二十五年の八月の夏休みに東京へ歸つて來て、眼病にかゝつて九月の末頃まで東京にゐた。その間、島崎君には二三度會つたには違ひないが、その時分島崎君がどういふ風であつたか、どういふ話をしあつたか今は少しも記憶がいな。

僕はまた高知へ行つてから、二十五年の秋かと思ふが、島崎君から來た手紙には『この頃蓬萊曲の著者北村透谷といふ人と知り合ひになつたが、熱情のある、考の深い人で、大いに益を得た』と

いふ一節があつた。

六

二十五年中、巖本氏の女學雜誌が大分文學的色彩が深くなつて來出した。もうその時分には、その當時名をなしてゐた文學者のグループ以外に、さういふ人々の文學に飽き足らない、謂はゞ新らしい考をもつてゐる青年文士が、現はれかけやうとしてゐる時分であつた。さういふ人々の一部が『女學雜誌』に集つてゐたのであつた。

參考のために當時の文學者の分野といふものを大體いふと、その時分の紳士團體の方では、森田思軒、條野採菊、前田曙雪、饗庭篁村、南新二といふやうな人々が、凡そ一團をなしてをり、それに對して新聞派とでも云ふべき半井桃水、右田寅彥、野崎左文といふやうな人々が、また一團をなしてゐるやうな形であつたが、それらの人々はみな、謂はゞ半舊半新といふやうな人々であつて、別に團結としての結束があつたわけではなかつた。團結としては、まづ硯友社の一派、その次には民友社の山路愛山、人見一太郎、塚越停春樓その他の人々、その次ぎは早稻田文學の坪內氏を中心にしてゐた後藤宙外、水谷不倒、島村抱月の人々といふ風で、その他に內田魯庵、幸田露伴、山田

美妙齋などといふやうな人々はみな遊星であつて、森鷗外氏の如きも、多少團體を支配してゐる傾きはあつたかもしれないが、どちらかと云へば遊星の中へ數へ込むべき人であつた。

ところで、紳士派、新聞派は勿論のこと、當時の純文學の方で一大勢力であつた硯友社の作物は、吾々からみればよほど職業的なもののやうに見え、謂はゞ世間慣れた人の態度で、從來からありのまゝの世相を描かうとしてゐるらしく思はれて、當時の若いものゝ思想感情に觸れるところが少ないやうに思はれた。民友社の人々の進む路もクリスト教的道念と、儒教的道念とを折衷したやうな主張であつて、これもまた、人間味をはなれた方向のやうに思はれた。早稲田の方はどうかといふに、そこには學者的研究的の空氣はあるが、若いものが赤裸々になつて人間味を發揮するといふやうな勢は認められなかつた。その他種々な遊星諸氏の作品も、中には吾々の共鳴を禁じ得ないやうなものが、あるにはあつたが、總括して云へば、矢張り當時のローマンティックな文學志望者の心を惹きつけるには足りなかつた。

二十五年頃はまだ文學及び思想の勃興時代であつたので、文學の平野の中のまだ耕されざる部分が大分多かつた。なんとなくそれに氣がついて、その方へ飛び出して行きたがつてゐた青年にとつては、自分の志す方向にあるものの他のものは、なにも眼につかなかつた。一言にして云へば、他

人のすることはみんな氣に入らなかつたのだ。
勿論、當時の文學志願の青年の考も決して無意味ではなく、眼を自分の奥の方へ向けるとか、人生の根底に横はる何物かを摑むといふやうな目的で進まうとしたのではあるが、何にしろ側眼もふらずに自分の目的に向つて進まうとした熱心焦燥な態度は、前節に云つたやうな通りであつた。
さういふやうな文學志望の青年達が、『女學雜誌』に集つたのであつた。これは偶然といふよりは、當時クリスト教界に於ての名士の一人であつた巖本善治氏が、民友社に對して『女學雜誌』を當時の新人の團體としたいといふ考があつて、それでさういふ新らしい文學を興さうといふ靑年達を、『女學雜誌』へ歡迎して引き寄せたのであらうと思ふ。これはたゞ、巖本氏が德富氏と同じやうに青年文士の首領にならうとか、『女學雜誌』をもつて『國民の友』と同樣に、當時の出版界の勢力たらしめようといふ考からであつたのではなく、巖本氏自身もどちらかと云へば、情の人であつて當時『女學雜誌』を繞つてゐた若い人々のローマンテイシクな氣分と何等かの共鳴をなしてゐたからであつたものと思ふ。兎に角、『女學雜誌』は文學欄といふやうなものを設けて、そこへ島崎君始め、若い人々の作物を載せはじめた。
『女學雜誌』のさういふ計畫に對して、非常に力になつたのは、星野天知氏であつた。星野氏は日

本橋本町三丁目の、近頃まであつた博文館編輯局の眞向にあつた砂糖問屋の若主人であつた。駒場の農林學校の別科かなにかを出た人であるが、擊劍だの薙刀などの稽古をしたとみえて、明治女學校へ武術を敎へに行つてゐた。星野君の家の商賣は、叔父さんかなにかゞやつてゐたので、星野君は云はば若隱居の形で、文章などを書いてゐることが出來たのであるらしい。

そこで、星野君、島崎君、北村透谷君、戸川秋骨君、平田禿木君とそれに戸川殘花君を加へて、それらの人々が『女學雜誌』の文學欄へ力をつくすことになつた。それらの人々は、みな一度はクリスト敎信者であつたのであるが、文學をやり出してからは、クリスト敎の信仰とか、クリスト敎的な道德とかいふやうなものゝ範圍外へ、だん〳〵思想が踏み出すやうになつて、それらの人々の作物が、卽ち殆ど反クリスト敎的思想を帶びた主張を含むだやうな作品が『女學雜誌』へ載ることはクリスト敎界の名士であつた巖本君の立場と衝突することが起つて來出した。

それで一時は『女學雜誌』の文學欄を盛にするといふ計畫で進んだものが、そこで一頓挫を來して若い人々の方では、これは何とかしなければならぬといふ考が起つた。若い人々のことであるから遠慮して、おとなしいものを書くことは厭であるし、さればと云つて、充分に氣焰を上げては、實際巖本氏に氣の毒だからといふので、これは、いつそのこと別に雜誌を興さうぢやないかといふ

相談が、前記の若い數氏の間に起つて、とう／＼別な雜誌を發行することになつた。出資及び經營は、星野君及星野君の弟の男三郎君（夕影君）が引きうけることになつた。それは二十五年の末頃であつたらうと思ふ。

島崎君はその前後に、明治女學院の教師をやめて、その後へ北村透谷君が入つた。島崎君の推薦であつたと聞いてゐる。

七

それで『文學界』の初號の出たのは、二十六年の一月の下旬であつた。初號には島崎君の『悲曲琵琶法師』六齣が載つた。固より若い人の作なのだから、筋も思想も極めて單純なものであるが、全部に渉つて何か新らしいもの、何か新らしい主張を提出しようとした努力は、否むことの出來ぬものであつた。『琵琶法師』は一行一行別に分けた韻文體の戯曲であつたが、各行の字數は一定してゐない自由なものであつたけれども、ところどころに十七字の行がおいてあるのであつた。それでさういふ所で調子を締めて行くつもりであつたのだらう。二十三四年頃から、島崎君が元祿時代の俳句や俳文を研究してゐたので、十七字の句を詩の中へ取り入れることを試みるやうになつたので

あらうと思ふ。斷言はし兼ねるが、『琵琶法師』は透谷の『蓬萊曲』からは可なりの暗示を受けたのではなからうかとも思はれる。その他この作には近松の淨瑠璃から受けた感化も可なり表はれてゐるやうに見える。形式の上から見れば、まだ試みの階段にあるのであるから、只管傳統を守つた完成的作品をのみ尊ぶ人々から見ると『琵琶法師』の如きは如何にも半可通の作品のやうに思はれて同情を以て迎へられない作品であるに相違なかつたが、習俗的に辿られた傳統の路を離れて、自分達の心と直ちに共鳴する古い文學のうちの或る部分の精神を復活させようと力めた心持は、充分そこに表はれてゐると思ふ。三四號後になつて出た『茶のけむり』などは早稻田文學には『枯れ尾花』といふパロデイイが出て、ひどく冷かしてあつたが、さういふ印象を與へるやうな部分のあつたことは否み難いけれども、全體の精神若くは作者の所期から云へば、決して笑殺してしまふ可きものではなかつたことは明かである。

先日、島崎君が『蜘蛛』に出てゐる僕のこの話を見て『あの時分の僕は自分が何を書いてゐるのだかよくわからなかつた。何ういふ風にすればいゝのか、自分には分らなかつた。要するに、自分のものといふものを、何も持つてゐなかつたのだ。それから見ると他の諸君の方が、確かに自分のものといふものを書いてゐた』と云ふ樣な意味のことを云つた。勿論、さういふ樣な所はあつたに相

達なからうが、これを他の方面から見れば、さういふ所が反つて島崎君の强味であつたと思ふ。自分の持つてゐない何物かを求めようとする、言葉を換へて云へば、自分の持つてゐる何物かをしつかりと捉へ得るようにならうとする努力、さういふ努力のために作者の全人格が甚だしく動搖してゐるといふ所が島崎君の初期の作物からは明かに看取せられると思ふ。即ち、生まんとする悶へ、作り出さんとする踠きがそれらの作品の大部分で認め得られる。

『文學界』の連中の藝術的の方面の目的といふのは、今の言葉で云ふならば、各自の個性、少くとも主觀をば充分に且つ明かに役影した作品を發表しようと云ふのであつた。然し、當時の文壇に現はれた先輩の作品は吾々のさういふ心持から見て模範にすることの出來るやうなものは殆どないと云つてよかつた。そこで、さういふ目的をもつてゐる者共は、自ら敢然起つて自分達にとつて技もコンジニアルな形式なり、精神なりのものを、何か作り出さなければならなかつた。その當時吾々の間には、ジエニユインなものを作りたいといふ言葉をよく用ひた。即ち、純なものを作りたいといふのである。今日の言葉で云へば、充分個性の表はれたものを作るといふ意味になる。島崎君がさういふ純なものを作り出さうと、最も多く努力した人の一人であることは疑ひがない。

さういふ生みの苦しみ、創造の努力の、島崎君に於て非常に大きいものであつたことは勿論否み

難いのであるが、然し、また一方から云ふと、さういふ努力をしなければならない位置に島崎君が自然と置かれてゐたことも認めないわけにはいくまいと思ふ。それに就いては二つの見方がある。

一つは、少くとも當時の文壇全體の有様に對する島崎君――並びに藝術の新らしい傾向を作り出さうとする人々――の位置である。前にも一寸云つた通り、所謂個性を充分に發揮するといふ様な作品の模範は、少なくとも充分な模範は、當時の文壇には存在してゐなかつた。それで、自分に最も適した傾向のものを作らうといふには、その形式からして各自が自分で作り出さなければならなかつた。故に當時の吾々は、何等かせめて形式だけに於てさへも新らしいものを作り出さなければならなかつたのである。謂はゞ、何等か新らしいものを作り出すことを周圍から催促された形になつてゐたのである。島崎君が獨創的天分を多量に持つてゐた人であることは疑ひなしとするも、周圍の狀態がさういふ獨創力の發揮に可なりな衝動を與へたことは疑ひないであらう。

今一つは、島崎君自身の生ひ立ちの境遇である。もうたしかに十年程も前だと思ふのだが、島崎君が淺草の新片町に住つてゐる時分に、或る日何かの話の序に『僕などは、馬場君とは大變生ひ立ちが異ふ。君は中流以上の階級に生れた人なのだが、僕はローアー・ピープルの中から出たものなんだからね』と云つたことがある。これは勿論島崎君が自ら卑下した言葉であつたらうと思ふのだ

が、今考へてみると、その言葉には餘程意味があると思ふ。島崎君の所謂中流以上の階級の方は、古い道德律、古い因習、古い傳統といふやうなものに縛られてゐることが多いのであるが、島崎君の所謂ローアー・ピープルの方は、さういふ點が餘程自由であつたと見てよからうと思ふ。然うすれば、さういふ階級から出た人は古い習俗に煩はさるゝことが、少くとも餘程少ないものと見ることが出來るであらうと思ふ。さういふ階級から出た人々は、中流以上の階級の古い習俗、古い傳統をば充分に批判することが出來る位置に立つてゐると思ふ。島崎君は眞の意味でのローアー・ピープルの出ではないと思ふのだが、それにしても古い習俗、古い傳統に對して、誤らざる批判をなし得るチヤンスが、吾々よりは多かつたものと見ることが出來やうと思ふ。島崎君の境遇が、島崎君が新らしき路へ進むことに對して何分か有利なものであつたとするならば、島崎君の生れた階級に就いて島崎君自身が云つたやうな考察をするのも一つの見方であらう。第二には、文字とか藝術とか云ふものについて、古くから幾分かの傳統を有つてゐるやうな家庭に育つた者がある。例へば、父祖の時代から、日本の純文學に對する嗜好が可なりあつて、既う十二三の時分から文政時代以降の文學には可なり親しんでゐて、文學のさういふ形式が可なり頭に染み込んでゐるやうな青年があるのであるが、島崎君の育つた境遇はさういふ青年とは少し違つてゐたかと思ふ。島崎君は、吾々

よりは少し大人に近くなつてから、日本の文學に接するやうになつたのではなからうかと思ふ。島崎君が文政以後の德川文學よりは、それ以前の德川文學の方に多く接觸したのではなからうかと思ふ。若し、さうだとすると、日本の近代文學の傳統習俗といふやうなものに感染することが、吾々よりは餘程少くなかつたのではなからうかと思ふ。吾々の方は、文政以後の古い文學の習俗傳統で頭を固められて、後で元祿文學を知つたのであるから、その兩時代の文學の間の共通點を見たのみで滿足して、元祿文學そのものから強い感化を受けることが出來なかつたのであるが、文政以後の文學にあまり親みを持つてゐなかつた島崎君は、元祿文學それ自身について、直ちに自己と共通な點を捉へることが出來たのであつたかと思ふ。さういふ點も新らしい路に突進した當時の島崎君を見るためには、一應考慮すべきところであらうと思ふ。

文學者と講演

上

近頃の『隨筆』に高須梅溪氏は文壇今昔話といふやうなもの丶なかで、文學者にして講演をなす人々のことを書いて居られるのだが、氏のさういふ方面に關する考は僕など丶は大分違うやうに思はれる。文壇の人々でも講演のうまい人は可なりあり、又今もあるだらうと思はれるのだが、高須氏の觀察は一向その方面に及んでゐなかつたのは、如何にも殘念である。

高須氏は戸張竹風君を單に座談の雄としてのみ擧げられたのだが、僕は戸張君の講演はたつた一度聞いたのみであるやうに記憶するが、しかし、確にうまいと思つた。少し舊式の演說口調の不自然なところもあつたにはあつたけれども、戸張君が能辯の士であることは明に知り得られたのであつた。僕は戸張君を座談の雄といふよりは演壇の雄として擧げ度いと思ふ。

高須君の文中に擧げられてゐない人々のうち、故人では、上田敏君は講演がうまかつた。これは

戸張君の演說式とは違つて、普通の講演式とでもいふべき幾分おとなしい風の講演振りであつたが、しかし、それでも、よく意を盡くし情を盡くすといふやうな親切な面白い話振りであつた。座談ほどには、氣焰は擧がらなかつたやうであるが、そこに反つて落着きがあつて、よろしかつた。けれども、活氣のない顏ではなかつたので、聽衆は何時でも可なり受けたものであつた。

夏目漱石君の講演も面白かつたと傳へられて居るのだが、殘念ながら、夏目君の講演を聞くの機會を得なかつた。唯上田敏君の洋行送別會の席上で夏目君は短い卓上演說をせられたのであつたが、飄逸な口調で機智に富んだものであつた。あとで森鷗外大人がひどく感服して歸られたといふ話であつた。その短いテーブル・スピーチや座談の具合などから考へ合すと、夏目君の廣い場所での講演は可なりうまかつたらうと想像しても間違ひはなかつたであらうと思ふ。

自然主義提唱以前の島村抱月君の講演振りには少し熱が足りなかつたかとも思はれるのだが、主義の闘將の一人として立たれてからは、島村君の講演には可なりな熱が加はつたやうに思ふ。けれども、島村君の講演は先づ內容の方で聞かせるといふ性質のものであつたらう。下手とはいへぬが上手な講演者とは云ひ兼ねたと思ふ。

岩野泡鳴君も講演好きであつたやうたが、品格が缺けてゐたのと、論旨にも、引例などにもとか

くョタが多かつたので、聽衆が唯彌次氣分で面白づくに聞いて居るやうに見受けられた。

吾々同年配の連中では、島崎藤村君が學校時代には、なか／＼うまい演說者であつた。二十餘年以前までは、時々島崎君の講演を聞いたことがあるが、巧むところの殆どない自然な講演振りで、甚だ結構であつたと思ふ。尤も、論の構造振りは、君の作品と同じやうになか／＼手の込んだものではあつた。戸川秋骨君の講演も決してまづくはない。殊に一寸とした警句の出るところが如何にも愛嬌があつて結構である。たゞ時々早口になり過ぎる。それから、もう少し話術に身を入れられれば更に結構だと思ふ。

吾々より若い人々のなかでは、生田長江君は確に講演がうまかつた。文學者、學者といふやうな連中には、講演は旨いが、演說になると不出來だといふ人が多いと思うのだが、生田君ならば演說も旨からうと思つた。確に生田君は文壇雄辯家の一人として數へ得られたと思ふ。唯だ少し調子が澄み過ぎるのと、ピッチがやゝ遲めなので、あまり雜駁な、廣い會場では少し損であらうかとも思はれた。三四百人程度で、相當教養のある聽衆に對しての講演ならば、生田君の講演は實に美事なものであつた。論旨はよく透るし、聲は澄み渡つた力の籠もつたものであるし、整々として論步は進んで行くのであつたから、講演としては間然するところがなかつた。森田草平君は可なり聲量が

あるから、講演はできぬことはないと勸めたことがあつたが、此頃では大分演壇に馴れて來たやうに見受けられる。思想の豊な人であるのだから、自分でやる氣になりさへすれば、善き講演者になり得ることは疑ひがないと思ふ。

下

小山内薫君はさらに氣取らずに、意を盡くすことを主とする講演者であつた。極く眞面目なところが結構であつた。上手な講演者のなかへ數へ込まるゝ人であつたことは疑ひがない。

安成貞雄君も可なり雄辯であつた。聲量があつたので、聞きごたへがあつた。論理も透り、機智もあり、今少し圓熟すれば、文壇の人としては有數な講演者になるべき資格があつたと思ふ。

生方敏郎君の講演を此頃時々聞く機會を持つのだが、生方君の講演振りは、如何にも愛嬌があつて結構である。餘り廣いところでは何うかと思ふが、頃合ひの場席でならば、聽衆を喜ばすことであらうと思ふ。

沖野岩三郎君は、元が教壇の人であるのだから、講演の旨いのに不思議はないのだが、牧師さんであつても皆が皆同様に話術が巧みだといふわけには行かぬのだから、沖野君は殆ど先天的に話し

方のうまい人であらうと思ふ。

その外、高須君の激稱せられた才辯家菊池、久米兩氏を始めとして所謂る人間社派の諸才人の雄辯は、不幸にして拜聽の機を得ないから、何とも許しやうがない。

倘書漏らしたが、姉崎嘲風君の講演を一遍聞いたことがある。堂々たる講演振りで至極結構だと思つた。内田魯庵君も講演はうまい方であつたと思ふ。長谷川如是閑君の講演は手廣い論陣を張つて堂々と論じ進まるゝところが、聞きものである。長谷川君は俗耳に訴へるやうな機智も十分に有して居らるゝやうに思ふ。巖谷小波君はその方の專門家であつたのだから、無論まずからう筈はないのだが、拜聽の機を得なかつたのは殘念である。與謝野寬君も時々講壇に立たれたのであるが、少々早口に過ぎたかと思ふ。ヘンにからだを動かさるゝところなども缺點であつたらうと思ふ。大町桂月君も講演好きであつたらうかと思うのだが、何うも餘りうまくなさゝうであつた。之を要するに、文學者の講演は專門ではないのだから、それを職にして居る人々のに比ぶれば、話といふ方からは誰のもいふに足らぬものかも知れぬのだが、吾々の方から云へば、文學者の講演は內容が主であつて、講演振り卽ち話術の方などは何うでもいゝといふ覺悟で壇に上ぼる譯なのだ。聽く方も話し方を目的ではなく、講演の內容をめあてに聽きに來てくれられることゝ思ふ。さうすれば、文學

者の講演などは、此方で云はうと思つて居ることが、何うにか云へてしまへれば、それで宜しいわけである。聽衆を感動させるとか、感慨させるとかいふやうな必要は先づないものと見て宜しからう。さて、それだけのことなれば、なみの對話のできる人ならば、誰にでもできるわけだと思ふ。唯場なれの差違は多少はあるであらうが、さう人によつての差違はないわけである。文學者の講演は專門家の講演のやうに同じ意味で旨くなくともいゝものである。のみならず、話術の方が內容に勝つといふ場合などは、心ある者が聞くと、甚だ聞苦しいものである。文學者の講演の場合では、殊にさうである。講演者自身の方でも、つまらぬ事がらをば話し方ばかりでつないで行くのなどは、それに氣がつけば、隨分やり憎いイヤなものである。

文學者の講演は內容を主とすべきである。講演法などは何うでも宜しい。それに、講演とか、演說とかいふやうな身體を以つてする仕事にあつては、生れながらの體的要素に俟つところが甚だ多い。卽ち、聲がいゝとか、辯舌が爽やかであるとか、聲量があるとか、さういふやうな先天的の要素に俟つところが多いのだ。さうすれば、さういふ天賦のない者には非常な損になる譯だ。

されば、旨かつたところで、生れつきだとすれば、そんなに誇るに足りないし、下手だとなつた

ところで、生れながらに損をしてゐるといふ譯ならば、さう悲しむには及ばない。

大部分努力でのみエラクくなるといふ仕事ならば、面白いけれども、生れつきさうできてゐるといふのでひとりでにうまくなるといふのでは、エラくなり榮えがしないやうに思ふ。又、先天的に資格が極まつて居るものとすれば、その資格に惠まれてゐないものに取つて、殆んどむだな努力をする位馬鹿氣たことはないわけだ。それも本職の上ならば是非もないのだが、全く餘伎である場合などには、そんな見込みのないことに本氣で骨を折るものはないわけである。

更に繰り返していふ、文學者の講演は、その內容と論旨さへよければ、話術としての講演振りなどは、何うでも宜しいものである。文學者の講演は、唯だその時ぎりの人面白がらせだけにをはつてしまうべきではない。何事かを人に教ゆるところがなければならぬ。低級な政客などの一時的の政略、黨略を目的とする演說とは違う。或は又、或る御用的思想家などの青年會向きの講演などゝも同樣に取り扱はれるのも眞つ平である。

文學者服裝の今昔

誰でもよく知つて居る通り、文學者とか藝術家とかいふ人々の生活は、世間の他の職業の人々の生活と比較して見ると決して裕福ではない。で、從つてその服裝なども、大して贅澤が出來るわけがない。まあ一口にいへば、文學者の服裝は銘仙程度より出て居ないといつてもよいと思ふ。かう一概に定めてしまつては失禮かも知れないが、銘仙程度を目安にしても、昔から今まで、文學者の服裝を考へて見ると、そこに生活の相違もあらうが、趣味の推移が明かに分り、また、思想の變遷などもよく見えて面白い。

先づ、古いところからいつて、硯友社の人々を見ると、尾崎紅葉君を始め、川上眉山君、廣津柳浪君、石橋思案君、泉鏡花君などといふ諸君はいづれも着物に趣味をもつて居て、服裝には可なり注意して居たものである。しかし硯友社一派の人々は皆通であつて、それぞれかういふ縞柄にはかういふ羽織がよいといふやうに趣味だけは十分あつたにしろ、金のない連中は、相當の大家と稱せられるまでは、あまりいゝ着物は着て居なかつた。小栗風葉君などは、昔は隨分いかがはしいもの

を着て居たやうに思ふ。紅葉君、眉山君などは相當に凝つた風をして居たやうに思はれる。齋藤綠雨君などは大通の方のやうに見えたが、あまり金がなかつたので、いゝ着物は着て居なかつた。なんでも黑の紋付のやうなものゝ紋のない奴を始終着て居た。綠雨の覺え帳の中に、ある料理屋で、隣り座敷で『われこそは正直正太夫なり』と名乘り上げて、藝妓に取りまかれて大騷ぎをして居る奴があるのに驚いて逃げて歸つたことが書いてあるが、その述懷に、その男たしかにわれよりよき衣着たりと覺ゆ云々と云つて居る。

尤もあの時代の文學者は、世事に通じてもゐなければならなかつた。所謂下情に通じて居なければならなかつた。着物のこともよく知らねばならず、花柳界の事情も知らなければ小說が書けないといふ風であつたから、從つて自分の服裝などにも亦相當に注意したのは當然の話である。

しかし、當人は通であつたと思つても、本當に通だつたかどうかは頗る怪しいもので、或は半可通であつたかも知れない。半可通であつてもよかつたのだ。それでないと通らない世の中であつたのだから。ところが、今の文學者は半可通の必要がなくなつた。着物の知識が少しもなくとも、藝妓買をしたことがなくても、小說は書けるといふ時代になつたのだから、着物の通も入らなくなつた。

つまり、通である事が不用な時代に移つて來たので、明治三十年頃、『紅葉の小說に想なし』とい

ふ聲を魁に、自然主義が勃興して來てからこの方である。

要するに文學者の思想が變り、小說の內容が變つて來ると同時に、その生活も變つたわけで、島崎藤村君、田山花袋君などから、服裝などは一向かまはないといふ風になつて來た。尤も藤村君などは着物に對する趣味だけはあるに違ひないが、それが服裝に出ては居なかつた。

德田秋聲君なども、此頃はどうか知らないが、あまり着物に注意する方ではなかつた。

自然主義時代から、着物の通がなくなつたとはいへ、僕等時代の人々は、今の文學者よりはいくらか趣味をもつて居たやうに思はれる。要するに、今の文學者の生活はさう吞氣なものでない。着物などには關つて居られないほど餘裕がなくなつたのである。

今の文學者を見ると、所謂大家といふ人々でも、生田長江君にしろ、森田草平君にしろ凝つた着物など着たのを見たことがない。例外もあらうが多くの人々はまあ、文學者の生活相當の銘仙程度を越えて居ない。話が前後になるが故人の夏目漱石君などは、よく注意の行屆いたさつぱりした風をしてゐたやうに思ふ。

それといふのも、今では、洋服が多くなつたからもある。着物などを云々して居るよりも、手つ取り早く背廣の一着もあれば、何處でも押し通せる世の中になつたので、自然文學者の頭から着物

の趣味などは消へ去るのである。

ところで、今の若い文學者には着物に對する趣味がない。さうして簡易な生活をする。と、金でも一寸入ると、まあ木綿ものよりはといふ洒落氣から、絹物を買つて見やうといふので、新何とかお召とか、新大島とかいふものにちよいと手が出るといふわけで、近來若い人々のなかには、可なりけばけばしい服裝を見かけて驚くことがある。これはあまり見よいものではない。

大體、以上のやうな意味の話を或る人が筆記して行つたのは、もう二十年ぐらゐ前のことのやうに思ふ。現代の若い文學者諸君は皆收入が豐であるのだから、誰も彼れも立派な服裝で居られるやうになつたのは何とも喜ばしい。

服裝といへば、こゝにかういふ話がある。いつか、安成貞雄君が『僕は墨繪の山水だ』といふと堺利彦君が側から『墨繪の山水はいゝが、もう少し表裝をどうかしなければ』といつて大笑ひになつたことがある。

英語を學び始めてから

一　三田の幼稚舍

僕が始めてアルフアベツトの文字を眼にしたのは隨分古い事で、今はもう殆ど夢のやうな、唯だ朧氣な記憶しきや殘つてゐない。然し、それは僕の英語の學び始めとは云へ無いのだ。一寸ヘンな云ひ廻はしのやうに聞えるかも知れ無いが、全く斯うといふより外にし方が無い。

それから、又此れも一寸と不思議に聞えるであらうが、僕が一番始めに學ばせられた文字は、アルフアベツトであつた。

此の二つの不思議らしく見える點を左に說明する。

僕は幼年の時分は極く病身であつたので、十歲になるまで、學校へは上がら無かつた。十歲になつた年の夏、兩親と共に東京へ出て來たのであるが、所謂る草鞋を脫いだ家が、三田の慶應義塾構內に在つた義兄の住居であつたので、僕は其處へ着いてから間も無く、慶應義塾の幼稚舍へ通はせ

られた。いろはさへ知ら無かつた僕には、教師からAからHまでを二三度讀んで貰らつた位では何が何だか薩張り分らずに、唯全くめんくらつて了まつて、學問といふものは、實に六づかしいもので、此れではとても自分などに出來るものでは無いと思つてしまつた。教師の顏付きやその他から推定すると、アルフアベツトの七八字位は一二度讀んでやれば、小兒は直ぐ覺えてしまうものだと信じ切つて居るらしいやうであつたので、七八字はさて置きそのうちの一字さへ覺え兼ねるのだとは、さういふやうな教師に向つては面目無くつて、とても云ひ得ることでは無かつた。最初の日は宜い加減にして貰らつて歸つて來たのだが、その次ぎの日からは、何うしたものであらうかと、全く途方に暮れてしまつた。教師は多分前の日のところはもう僕が覺えてしまつたものと極めてしまつて、前の日の分より先き、卽ち、Hから先きを敎へようとするであらう。それも、宜い加減にして貰らつて歸つて來るとする。さうすると、又その次ぎの日は、その先きを敎へられる。が、それも矢張り前二日と同じやうに覺えられる氣遣ひは無い。果してその通りだとするならば、自分は每日學校へ行くが爲めに、一日每に覺えられ無い物がふえて行く譯だ。此れでは、何時まで經つても學問の覺えられつこは無い。畢竟するところ、此れでは、學校へ行くだけが無駄なのだ。全く斯ういふ順序で考へたか何うだか、今は明かに記憶してゐ無いが、先づ大凡そんなやうな考からであつ

たらうかと思ふのだが、僕は明くる日から、頭が痛いの、腹が痛いのと云つて、幼稚舍へは行かなかつた。義兄からも姉からももつと嚴しく云つて學校へ行かせるやうにしろと、兩親へは勸告があつたやうであつたが、肝腎の僕が何うしても學校へ行くことを承知し無かつたので、何時の間にか誰も小言を云は無くなつた。さういふ譯で、僕は三田の幼稚舍へは精々で二日位しきや通は無かつたと思ふ。

當時、僕としては、もう少し年が行か無かつたのであつたら、覺えられ無くつても何でも、無邪氣に學校へ通うことができたのでは無かつたらうかと思ふ。文字こそいろはのいの字も知ら無かつたのであるが、物心は相當付いて居たのであるから、一方では、覺えられ無くては面目無いといふ心持、他方では、斯んな事では結果が何うなるだらうかといふやうな幾らか前途を考へるやうな念などがあつたが爲めに、たうとう三田の幼稚舍には通はなくなつてしまつたのである。

就學の後れた少年などを敎えるにはさういふ少年のさういふ心持を理解することが肝要だと思はれるし、晩學の人々の物を學ぶ苦しさも、さういふ自分の經驗から察せられぬことは無いやうに思はれるのである。

然し、今思ふと、僕は一人か二人の少年と一緒に一室で敎へられたやうであつたのだから、それ

は特別教授のやうなものであり、又、教師の方でも何うせ僕には急には覺えられないと察して、一度に同じところをさう幾度もは讀んで吳れなかつたのかも知れぬのである。

僕は小學教育を受け始めたのは、十一歳の時である。學校は、下谷茅町の忍岡小學校である。習字を除いた外の課目では何うやら斯うやら人並みの成績であつたが、市川といふ教師が、僕の就學の後れて居たことを憐れんで吳れて、一遍に三級程の試驗をして、僕と同年配位な連中の級へ進級させて吳れた。それは、忍岡小學校へ入學してから、二年位經つての後かと思ふ。その時分には一學年が前期と後期に別たれて居つて、半年毎に試驗があつて、進級することになつて居たやうに思ふ。

僕は、何でも小學校に高等科といふのが出來てから、二年程經つて、忍岡小學校を退學したかと記憶する。その時分の高等科では『十八史略』『孝經』『小學』などが讀書の教科書であつた。

二　三菱商業學校——明治義塾

三菱商業學校は、今の中央大學の基礎であると云ひ得ようと思ふ。兎に角、後の中央大學の所にあつた學校である。建物は、大きな旗本か何かの邸であつたらしく、大きい式臺らしいところや、

書院らしいところが殘つて居る可なり廣い家であつた。其所へ僕が入學したのは、何でも明治十六年頃であつたらうかと思ふ。

所が、三田の幼稚舍では、僕は大抵の生徒より年上であつたのだが、三菱商業學校では、それとは全く反對で、生徒――それも僕の級では四五人位であつた――のなかでは、僕が一番年少であつた。敎師は上級の生徒位なものであつたらうと思ふのだが、皆若い連中であつたので、覺える連中を標準にしてどし／＼進めて行つてしまう。僕がまだろく／＼アルファベツトも覺えきらないうちに、スペリングも、譯讀もヅン／＼進んで行つてしまうのだ。僕の方は少しも進まないのに、他の連中の讀むところはどん／＼進んで行つてしまうのだから、とてもかなはない。僕が入つてから間も無く、三菱商業學校といふ名は改められて、明治義塾となつてしまつたのであるが、矢張り僕などのやうな少年に相當する學級は設けられ無かつた。

唯、樂みであつたのは、午後にある柔術の稽古であつた。敎師は戸田流といふのであつたか、揚心流といふのであつたか、痩形の四十恰好の人であつた。其所では、岩崎久彌君や、故千矢稻男君――後に岩崎家の執事になつた人――や、門田粂君などゝ一緒になつた。勿論それ等の諸君は僕よりもずつと年上の人々であつた。

兎角するうち學課の方では、僕は他の人々とは全く懸け離れてしまつた。僕は何時も零の位置なんだから、時が經てば經つ程、他の人々との隔りが大きくなつて行くのみであつて、僕の方から少しでも追付いて行くといふやうな望みは全く絕えてしまつた。さうなつて來ると、僕は、もう諦めざるを得無かつた。毎日學校へ出ることが全く無意味になつてしまつたのである。

三田の時には全くの少年であつたのだから、自分などにはとても學問などは出來無いと思ふから學校へ行くのは厭なんだと、公然と自分の好き嫌ひを言明するまでに正直であつたのだが、明治義塾時代になつては、僕の如き愚物にも少し智慧が出來てゐた、卽ち、可なり不正直であり得るだけの餘裕が出來てゐたのだ。

共所で、僕は、當時の僕の淺はかな知慧でもくろみ得る唯一の方法に訴へた。それは別段奇拔な方法では無かつた。斯ういふ場合に、不正直な少年がやる普通の方法である。而かも、それは僕だけで見て獨創的のものであつたのでは無く、多分先蹤のあることを傳聞してゐてからのことであらうと思はれるのである。凡庸僕の如きものが、而かも少年の時代に於て、何等の點でも獨創的であり得無いのは勿論當然である。

大分勿體振つたことを云つたので、讀者は、僕が當時何ういふことをしたかに就て、少しは好奇

心を持たれるかも知れぬが、なにそれは全く埒も無い事であつて、僕が以下に告白するところを讀まれるならば、讀者は必らず、なあんだそんな事かと破顔一笑されるに相違無い。

偖て、明治義塾の教場へ出るのが厭さに、僕は何うしたかといふと、僕は本郷に住つて居たのだから、家は學校へ行くやうな顏をして出て、今の帝大の構内の池の傍へ行つて、學校の時間に相當する位の時間を遊び暮らすのであつた。雨の降る日は何うしたのだか、今考へてみても、少しも記憶が喚び起せぬが、晴の日だけは大學の池の傍で遊んで居たことは確である。それは秋から冬へかけてのことであつたらうと思ふ。池の北側にあつた椎の木へ登つて椎の實を喰つたことをよく覺えて居る。或る時などはモオレエの『地理書』と外二冊程の本の包みを何うした拍子だか、池の中へ落してしまつたところが、岸から可なり遠くへまで浮び去つたので、一時は大に狼狽して、萬事休した心持になつて弱り果てゝゐたのだが、やがて、一生の知慧を揮つて、椎の木の枝を折り取つてそれで水を搔いて、岸へと流れを起さして、包をば手元へ浮び寄らせて、やう〳〵拾ひ上げたことなどもあつた。可なり濡れて居たに違ひ無いのだが、それを何うして干かしたのであらうか、それからそれを干かすのに何れだけの時間を掛けたのであらうか、それ等の記憶は今は一切空白である。その『地理書』は明治義塾から借りてゐた本なので、それが濡れて表紙などが滅茶々々になつ

たのが、心配で堪まら無かつた心持などは、今も尙ありありと思ひ浮べ得られる。
明治義塾は、さう長くは續かなかつたやうであるが、それが廢校になるまで僕は其の塾へ學籍を置いて居つたか、何うか、一寸と記憶が明かで無い。けれども、兎に角、胡麻かして學校へ行かぬことなどが、親類の方から分つて來て、僕は自分の學力が明治義塾で學ぶに堪へないといふことを家の者に說明したのでは無からうかと思ふのであるが、母が家へ來る誰かに聞いて本郷の赤門前あたりに下宿して居た若い人のところへ、敎はりに通はせて吳れた。その人は土佐の人であつたかと思ふのだが、大變物和かな人で、まことに親切に敎えて吳れた。其所では、ウイルソン讀本の第二卷位なところの譯讀をして貰らつた。兎に角、明治義塾で英語の觀念だけは極々僅ながら得て居たので、其所では何うやら斯うやら少しづつ覺えられるやうになつた。その前後何れであつたか記憶せぬが、久米正雄君の伯父さんであるところの同苗助三郎君——僕と同年の人——にも英語を少し敎えて貰らつたことを記憶する。赤門前の人のところへ行かなくなつたのは、何ういふ事からであつたらうか、今少しも覺えて居ない。恐らくは、先方が唯親切づくで敎えて吳れて居たのであるから、何か先方に差支が起つたので、敎はりに行け無いやうになつたのであらうと思ふ。赤門前の人のところへ敎はりに行か無くなつたのは、さういふやうな先方の都合か何かであつたやうである。

其所だけは、僕の横着から廢校したのでは無かつたやうに思ふのである。

因みに記して置くが、前記の三菱商業學校及び明治義塾には、教師としては馬場辰猪もゐた。山本達雄氏も其所に教師であつたかと思ふ。馬場愿治氏の名も明治義塾の講師の中にあつたかと思ふ。それ等の人々は皆上級の教師であつたのだから、即ち、法律とか、經濟とかいふやうな專門を教へてゐたのだから、僕等の教場へは出て呉れる人々では無かつたことは勿論である。

故大石正巳、故垣内正輔氏なども、明治義塾で教えたことがあるかも知れぬ。大石氏がマン・オヴ・ウオーへ軍人といふ譯をつけたといふ笑話を、新聞か雜誌かで何時であつたか、讀んだことがある。何だかわざ〳〵拵らへたやうな話であるが、思ひ出すまゝに附記して置く。

確か、大町桂月君も給仕兼學生として明治義塾にゐたといふやうな話を聞いたやうな氣がする。今三菱の重鎭であるところの江口定條、桐島像一の兩君も、三菱商業學校か明治義塾かに學んだことのある人々だと思ふ。

それから、學校の歷史をいふと、明治義塾のあとが、上級は英吉利法律學校となり、豫科の方は東京英語學校となり、次いで、前者は東京法學院となり、遂に今の中央大學となつたのであるが、後者の方は今の日本中學の前身だと思ふ。それから、法學院時代に東京文學院といふのが置かれた

やうである。教師のなかには故千頭淸臣君、故福富孝季君などの名があつたやうに記憶する。唯文學院講義錄といふのが共所から出てゐたのである。それで、英吉利法律學校の方は、主として增島六一郞氏などが骨を折り、東京？　或ひは日本？　英語學校の方は故杉浦重剛氏が主宰されたのであらうかと思ふ。

要するに、三菱の持物であつたので、始めのうちは、三菱系、土佐系の人々に依つて、經營も發展も主として畫されたのであつた。

僕の記憶するところでは、上田敏君が（東京？）英語學校を經て、帝大を出た人である。それ等は皆、僕が明治義塾から退學してからずつと後のことである。

三　共　立　學　校

神田淡路町に在る今の開成中學は元は共立學校と云つて、大學豫備門――高等中學校への入學準備の英語學校であつた。

創立は明治五年三月だといふのであるが、高橋是淸、大岡育造、森淸春、鈴木知雄などの諸氏が古い時分の主腦者であつたのであらう。

僕の友達のなかでは、大石良丸、服部松吉などが、共立學校へ通つて居た。大石は正已氏の甥で服部は春木町――今の電車通り――の解明堂といふ繪雙紙屋の二男であつた。

僕が共立學校へ入學したのは、明治十八年の秋頃かと思ふのだが、年月は餘り確では無い。その時分には駿河臺に成立舍といふのもあつたが、共立學校の方が盛で人氣があつた。それが僕が共立學校へ入學した重な理由なのではあるが、前記の友達が二人既に入學して居る學校であつたので、入學した時は非常に心持が好かつた。

極く下の級から始めたのであるが、その時の教師では、田邊新之助氏の顏は今でも忘れ無いで居る。教科書は何ういふものであつたか、確な記憶は無い。何かスペルリングの本と、ウイルソンの讀本の第二卷位であつたらうかと思ふ。

一年が前期と後期の二學級に分たれてゐて、試驗の成績が好いと、學級一つ飛び越して行けることになつて居た。僕の如きさへ、運好くそんな事が二度程あつたやうに記憶する。

ナショナル讀本を吾々が讀んだのは、恐らくそれが輸入され始めてから、間も無い時分であつたらう。第三卷から讀み始めたのだが、並の書店には無くつて、わざ〳〵築地のエフ・シュロダアといふ人の家まで買ひに行つた。代價は何でも五十錢位であつたかと思ふ。大通りだけは鐵道馬車が

あつた時分であつた。

パアレエの萬國史を讀んだ記憶がある。飜刻本であつたやうに思ふ。地理書も何か大形な本で讀んだ。但しモオレエでは無かつたことは確である。ナショナルの第四卷を鈴木知雄氏に讀んで貰つたことを覺えて居る。

共立學校へ入學してから、半年程經つて、教はるやうになつた深澤要橋氏の親切な教授振りと、その温藉な人格とは、今も忘れざるところである。

カツケンボスの小文典、同じ著者の米國史、グードリツチの英國史、スウイントンの英國史などを讀んだことを覺えて居る。日置益氏からはスウイントン讀本の第四卷を教はつた。宮岡恒次郎氏からはスウイントンの小文典を教はつた。木村熊二氏からは『クライヴ傳』を教はり、『ヘスティングス傳』は大浦佐助氏から教はつた。ジョンソンの『ラセラス』は戸田恒太郎氏から教はり、アーヴィングの『スケツチ・ブツク』は辰己小次郎氏から教はつた。アディソンの『サア・ロオジヤア・ド・カヴアレエ』も教はつたに違ひ無いのだが、教師の名を今一寸憶ひ出せ無い。戸澤鼎氏のことは明に記憶して居るのだが、何を教はつたかは、今覺えてゐ無い。

外國人では、コツクス、ガアヂナア、スミスの三氏のを記憶して居るが、コツクス氏の和文英譯

の敎授振りの如何にも巧みであつたことは、今も忘れない。今ならば小學校式だといふやうな非難が出るかも知れないが、コツクス氏のやうな身振りや、聲の調子で、生徒の考を引き出して行くやうな敎え方は、老巧な敎師にあらずんば、決してできるものではないと思ふ。

算術の始めの方は何ういふ風に習つたのだか、少しも記憶が無い。代數トドハンタアから始め。後でスミスの『アルジエブラ』で習つたやうに思ふ。幾何の敎科書は忘れて了まつた。敎師は長澤市藏氏、谷村太刀馬氏、三輪桓一郎氏、大森俊次氏、丸山軒義氏などで、丸山氏からは算術の原理の講義を聞いた。

畫學は山田成章氏に敎はり、體操は細井岳彌氏に習つた。その時分――明治二十年頃――はまだ號令は外國語を用ゐて居たやうだ。『全隊ハル』などゝいふ號令を聞いたことがある。ハルはhalt（ホールト）であらう。

畫學だの、體操などが學科中に入るやうになつたのは、高等中學の豫備校として、生徒の受驗資格を得る爲めか、何かで、さういふ必要ができたからであらうが、動植物の講義も二十年頃から加はつたと思ふ。岡村金太郎氏の動物學の講義を聞いたことを覺えて居る。

當時の學生のなかに居た人々で、今何うなつて居るか分らぬのが隨分多いのであるが、今知名な

人々で、僕が顔を覺えて居るのも少くない。上級の人々のなかでは田島錦治氏を覺えて居る。背の低い田島氏が腕まくりか何かで、校庭でハイ・ジャンプの稽古をして居た光景が、今眼前にある心地がする。高野岩三郎氏、故片山貞次郎氏なども、少し上級であつたかと思ふ。片山氏は病氣の爲め休學して居たので、後では同級になつて、同室で學んだ。立作太郎、桑木嚴翼、瀧精一、幸田成友、諸井六郎、小原駩吉の諸氏は同級であつた。平田喜一（禿木）氏とも同級であつた。

堺利彦氏も二十一年頃までは共立學校に居たさうであるが、顏は覺えて居無い。名簿を見ると、中村利彦（福島）とある。それが堺氏であつて、福島は福岡の誤植である。

島崎藤村（春樹）氏もその頃在學者だといふのだが、島崎氏の共立學校時代を僕は覺えて居無い。その時分の同學のなかで、田村寛治といふ人は、基督敎信者であつたやうに思ふのだが、文章の書ける面白い人であつたが、何うなつたであらうか。

僕は明治十九年及び二十年に、高等中學の試驗を受けたのだが、二度ともまるで物にならなかつた。高等中學が本鄕へ引越さ無かつたうちなので、一つ橋の今の商科大學の向ふ側あたりの校舍で試驗を受けたのだと思ふ。

二十一年の夏には、兄が米國で重病に罹つて、本復の望みが絶えて居るといふ報知が來たので、

成るべく早く學業を終はるやうにし無ければならぬといふので、その時分はまだお茶の水に在つた高等師範の入學試驗をその年の秋受けたのだが、一緒に受驗した中山民生氏は入學ができたが、僕は最初の日の數學——然かも容易な原理——が少しもでき無かつたので、無論だめであつた。

四　明治學院

白金の明治學院へ行つたのは、二十二年の一月で、第二年級の第二學期からであつた。本郷からでは遠いからといふので、寄宿舍へ入つたのだが、初めのうちは、毎週の金曜日の午後が待ち遠しくつて堪まら無かつた。明治學院は基督教主義の學校なので、土曜日も休みであつて、金曜日の夕方からは家へ歸れるからであつたのだ。

明治學院では、敎師は大部分外國人で、和文、譯讀、數學位なものが、日本人の敎師によつて敎えられたのみに過ぎ無かつた。

學科は、歷史、物理、化學、生理、論理、心理、星學、理財、語學（パラフレエージング及びエロキユーシヨン）、和文、譯讀、數學といふやうなものであつた。

歷史の教科書は、モントゴメリイの英國史、フリイマンの歐洲史略、フイツシヤアの萬國史、グ

リインの英國民史などであつた。教師はマコオレエ氏であつた。
理財はド・ラヴエレエの理財學初歩であつた。心理はマコツシとかいふ人の心理學、星學で、生理などは、米國のカレエヂで使ふらしい簡單な教科書であつた。
譯讀は故石本三十郎氏にゴオルド・スミスの『デサアテツド・ヴィレエジ』を教はり、井深梶之助氏にスウイントンの『英文學』を教はつた。
和文では、『土佐日記』、『竹取物語』、最後に『源氏』の『桐壺』と『はゝき木』の講義を聽いた。教師は近藤といふ人であつた。
物理はワイコフ氏。論理。心理はランディス氏。星學はジョン・バラ氏。理財はマクネア氏であつた。
生理と化學は、支那に長く居たといふ米國人であつたが、その養女の支那婦人と共にやつて來て猫の解剖などをして呉れた。
ハリスといふ教師は、文法、パラフレエジング、作文、演說等を教へて呉れた。文法はスウィントンの大文典を讀んだかと思ふ。『マアチヤント・オブ・ヴエニス』『エンシェント・マリナア』などをパラフレエズしたことを覺えて居る。演說は二年級では、デクラメエションの稽古をし、三年級

では、作文を出して直して貰らひ、それを暗記して、演說するのであつた。

數學は代數は何うであつたか知れぬが、幾何は確にやつた。今高知教會の牧師になつて居る多田素氏が、敎へて吳れた。山田嵩太郎氏からはツリゴノメツリイを習つた。立體幾何も少し習つたかと思ふ。

僕が入學した當分は上級の富安保太郎氏に非常に世話になつた。富安氏は、僕に基督敎信者になれと云つて、外國人の敎師のところへ伴れて行つて吳れたし、唯だ敎科書だけ讀んで居たのではカが付か無いから、成るべく多く參考書を讀めといふ忠告を與へて吳れた。

然かし、明治學院の敎授の方法は、敎科書中の十頁ほどを宿題として豫習せしめ、次の授業時間に其所を試問するといふやり方であつたので、僕などに取つては、その宿題が每日三つもあると、可なりの重荷で、それだけやるのが殆ど精一杯であつて、その他の讀書をする機會を作り得なかつた。今にして思へば、當時富安氏の忠告に從つて、十分讀書して置たなら、今程無學にならずに濟んだのであらうと思ふ。まことに汗顏の至りである。

木村鷹太郎氏は、僕等より一つ上の級であつたが、學校で下宿を許さぬ校規を設けたので、それに反對して、同志數人と退學してしまつた。

僕と同級には、島崎藤村氏、戸川秋骨氏が居た。共に二十四年の卒業生である。松浦五平氏も同級であつた。

和田英作、三宅克己、岩野泡鳴の諸氏は僕等より下の級であつたらう。

岡田三郎助氏は、明治學院の分校が九段の坂上にあつた時分に在學したのだとか聞いた。

明治學院で特に嬉れしいと思つたのは、學生の間にある呑氣な氣風であつた。

必要に迫まられて學問をする人が今日程多くなかつた時代なので、何處の學校でも可なり呑ん氣ではあつたのであるが、それでも、共立學校などでは、高等中學へ入るといふ仕事が前途にあつたので、學生の神經が幾分か緊張して居たのであるが、それが、明治學院などになると、學年試驗も大抵落第する氣遣ひは無いし、卒業は殆ど既定の事實のやうな氣さへするのであつたから、少數の謂はゞ趣味から勉强するといふやうな者どもを除いては、多數は唯毎日教室へ出て行くといふだけのことであつた。さういふ風で、教室での日々の成績などといふものは、多數が何とも思つて居無かつた。

教師は大部分外國人なのだから、教場で小言を云はれる場合――さういふ場合は殆ど無い位であつたのだが――などでも、日本語で云はれるよりは、何だか講義の一部分でゞもあるやうな氣がし

て、吾々にはそれ程こたへなかつた。

僕に取つては尙一層さういふ氣風が快かつた。何となれば、同級の多數者が殆ど豫習などをし無いといふ風であつたので、僕の如き鈍才でも、一生懸命に豫習さへすれば、敢て人後に落ちずに濟むのであつたからである。

試驗の時などの呑氣さといふものは、話にならな無かつた。敎師は問題を出すと、敎場を出て行つてしまうので、そのあとは、吾々は何の遠慮も無く、敎科書を廣げて讀んで、それで答案を書くのであつた。然かし、誰でも同じやうに敎科書を見て書くのであるから、自力の差は反つてさういふ答案では明に識別せられるのであつたかも知れぬ。その證據には、試驗の成績は大抵各人の自力の順になつて居た。

それから、外國人の敎師諸氏は吾々の答案を何れだけ叮寧に見て吳れたものであらうか。その點は甚だ疑問だと思ふ。或は、平常から各生徒の力を大凡知つて居て、答案などには重きを措かずに點を附けて吳れたのでは無かつたらうか。

さういふところも、餘り惡るい點を貰は無いで濟んだ僕等に取つては、心持ちの好いことであつた。

今日では少し良い學校では學生の所謂るカンニングを、學校に於ける生徒の犯罪として取扱つて居る。放任しては、際限の無いことにもならうから、自然さういふことになるのであらうが、取り締まれば取り締る程生徒の方でも巧妙な手段を回ぐらすことになるのであらうから、試驗法を變へるといふやうな工夫の必要は無いであらうか。

大學豫科といふやうなところを敎へた經驗は僕にもあるのだが、幾ら取締り方法を理事者から命ぜられても、餘まり鵜の目、鷹の目で居るのは、自分の品を下げることのやうに思はれて、いやなことであるし、第一、吾々は元來が遲鈍な人間なので、つい注意が續か無いで、生徒の方へ後を向けるとか怨外の樹木などにじつと見入つたりすることなどがあつて、犯罪見張り人としては、更にその資格が無かつた。

明治學院は、確に英語を學び得る學校であつた。其所で學んで、英語のろくに出來無いのは、僕の罪であつて、決して學校の罪では無い、學校の方では、覺え度ければ、覺えろ、覺え度く無ければ何うでも宜しいといふ、迫らざる態度であつたと思ふ。

魯鈍僕の如きは、官立學校へ入學し無ければならんといふのであつたら、幾年かゝつても入學はでき無かつたらう。從つて永久に學問の道から離れて了まつたのであらう。

明治學院の如き、呑ん氣な學校が學界の片隅に靜に立つて居て與れたのは、僕に取つては、實に幸なことであつた。

今日では、少し名のある大學程度の學校は入學試驗が六づかしくつて、中以下の中學卒業者は入學でき無いやうに聞くのだが、斯ういふ時代に當つて、極めて呑ん氣な學校を設ける必要は無いのであらうか。學生の趣味で勉强させるやうな方法が、何とか設けられ無いものであらうか。

大分話が横道へ入つたが、明治學院のことに立ち戻つて云ふと、明治學院では、三年級の終には、ジユーニアー・コンテストと云つて、英語演説の競技があつた。一等賞が拾圓で、貳等賞が五圓であつた。僕もそれに加はつて、幸に貳等賞を貰つた。又卒業の時は、英語の卒業論文を出して、學校の指定を受けたものは、それを卒業式で演説することになつて居た。僕等より一年前の卒業生位では、演説は英語に限られて居たやうであつたが、僕等の卒業の年即ち二十四年からは、演説だけは英語でも日本語でも何ちらでも宜いことになつたやうに思ふ。その外、麻布の英和學校、築地の立教學校と併合して、年に一回か二回順番でそれ〳〵の學校の講堂で、演説會を開くことになつて居た。これも日本語と英語と何ちらでも、演説者の選擇にまかせることになつて居た。僕も一度英語演説の方を命ぜられたことがある。戸川君も一度選まれて、麻布か何處かへ行つたことがあると

思ふ。

僕が明治學院を卒業したのは、明治二十四年の六月である。

ところで、その當時の吾々の英語の讀書力なるものが今の私立大學の卒業そこ〳〵の諸君の力に比らべて何うだらうかといふに、何うも、今の諸君の方に吾々よりも力のある人が多からうかと思はれる。吾々の時代には英語の研究法などが進んで居無かつたので、唯だ讀む本の數が重なるに從つて、ひとりでに本が讀めるやうになつて行くだけであつた。而かも、その本なるものが、日本へさう渡つて來無かつた時代――それは明治二十六七年頃でもさうであつた――ので、今日の諸君のやうに、さま〳〵な英語の本に接觸する機會が無かつた。實を云ふと、今日の諸君より吾々の方が英語が讀めたのでは無かつたらうかといふやうな氣がし無い譯では無いのだが、何うも、實際は今の諸君より優つては居無かつたらうと考へざるを得無い。

唯、然し、吾々の時代には、外國語そのものを學ぶのが、學問であつた、いや、もつと正確に云へば外國語を知ら無ければ、一切學問はでき無いといふ時代であつた。前にも云つた通り、吾々の場合などでは、中等以上の教科書は皆英語書ばかりであつたのだ。だから、吾々は一日中英語を習つて居た譯である。作文などは、今のやうな和文英譯では無く、行きなり英語で自分の考を書くと

いふ風であつた。明治學院の同學のなかで、或る考の緻密な者などは、一遍日本語で書いて置て、それを英語に譯するやうにするのだと云つて居たことはあるのであるが、僕などは行きなり英語でぶつつけたものであつた。それから、教師も幹事も外國人なので、いろ〳〵な用談も英語でやら無ければならら無かつた。

さういふ風で、吾々の方が、今の一般諸君より英語といふ氣分のなかにより多くひたつて居ることができたかと思ふ。吾々の方に幾分有利な點があつたとすれば、重にさういふところであつたらうと思ふ。但し、それにしては、お前たちは、英語が餘まりでき無さ過ぎると云はれゝば、閉口頓首に及ぶより外は無い。〆

此の稿は、もつと近頃までのことを書いて、讀者のお笑ひを誘ふやうなことにも記し及び度いと思つて居つたのであるが、偖書き出してみると、何だか僕の自傳のやうなものになつてしまひ、その上、教科書だとか、昔の同窓だとかいふやうなものに、僕だけの追憶がしきりに起つて來て、捨てるに忍び無く、さういふ點に紙を大分費したので、とう〳〵こんなものになつてしまつた。

浦和の思ひ出

私が浦和中學校（當時は埼玉縣立第一尋常中學校と稱したと思ふ）へ雇はれて行つたのは、明治卅年の二月半ば過ぎであつた。

その時分は埼玉縣には中學は、第二中學といふのが熊谷にあつたきりであつたと思ふ。後に貴族院議員になつて亡くなつた千頭淸臣といふ人があつて、此の人が廿五、六年頃に特別の事情で、高知の中學校長を引受けてゐたことがあつたが、その時分に石川一君を高知の中學校教員に連れて行つたのだ。で、その石川氏が浦和中學の初代の校長であつたのだ。

私は千頭氏から推薦されて浦和へ行くことになつたのだ。今明かには覺えて居ないが、同僚は高橋重藏氏が囑託で英語を敎へて居り、圖畫を櫻井節雄氏が受持ち、松永信嗣氏が理科を受持ち、山本庫次郎氏が數學を受持ち、石田道三郎氏が國語を受持ち、水戶の人で敎導團出の體操敎師が居た。といふ位の事であつたと記憶する。

その時分は浦和中學も、熊谷中學も、三年級位までしか出來てゐなかつた。校舍も町を離れた畑

のなかに、只一廓立つてゐるのであつて、實に淋しいものであつた。南の方に校舍が横に長く建てられて居り、その後に講堂があり、又そのずつと後の方に、寄宿舍があるといふやうな建て方のものであつたと記憶する。

さういふ風に、まはりは薩摩芋畑であるのだから、春の初め頃、所謂上州から吹いて來るやうな空つ風の烈しい時は、火事場のやうに朦々とすざまじい位、土煙が立つた。一日中空つ風が吹き荒れたあくる日など、小使が校舍を掃除したら、砂が何升とかあつたとか云つて居たことさへある。

浦和中學は、奈何かした都合であらうが、九月が學年の更り目になつて居たと思ふ。兎に角、四月か五月頃に石川校長が學校へ撃劍を課外に加へることになつたので、僕が使になつて、高野佐三郎さんのところへ行つて、高野さんが今滿洲に居られる茂義氏（當時千種氏）と、長谷川といふ人と、客分の千葉の道場に居たといふ老人とを連れて教へに來て下さつた。

僕は、初め宿屋に居つてから、その後、昔の本陣であつたとかいふ星野といふ家の一室を借りた。その星野は、平田禿木の友達で多少文名のある人であつた。僕のゐるうちに來た教師は、山室といふ漢學の教師と、英語の中西保人とであつた。石川氏が京都の帝大へ轉任することになつて、藤井宣正氏がその後任になつて來たのは、卅年の十月頃であつたらうかと思ふ。

僕は、その十一月辭めて、東京へ歸つて來た。その前に學生と一緒に、修學旅行をしたことがある。どうも十月頃ではなかつたかと思ふ。先づ學校を出て大宮を經、川越へ行き、それから松山の方へ向つて行くところのあるお寺で一泊したと思ふ。

村の有志（多分學生の父兄達であらうと思ふのだが）さういふ連中が四五人、村の料理屋の酌婦らしい女を連れて來て、それに酌をさせて、吾儕に酒食を供して呉れた。ところが、そのうち一人が、それは、五十位な人であつたが酒に心持良く醉つてしまつて『ゆうべのおばさん、いゝおばさん、今夜のおばさんヘナおばさん』と醉ぱらつてよくやる危かしい手つきで、手を打ち合せながら歌の囃子のやうに、幾度も〳〵繰り返していつて、十一時を過ぎてもなか〳〵歸らない。とうとう外の連中が無理矢理に引きずるやうにして歸つて行つた。

それから後は松山まで行つて、これもお寺に泊つたかと思ふ。それから、午前中に、例の吉見の百穴を觀、熊谷へ出たかどうだか記憶しないが、兎に角粕壁のあたりから鳩ケ谷へ出て、浦和まで歸つて來た。その時の記憶によると、川越から松山へまでの道が、いかにも田舍らしい川の土堤などを通つて淋しい、面白い景色であつたと思ふ。今では其のあたりも、電車位は通つてゐるかも知れぬが、暇があつたらもう一度行つて見たいやうな氣がする。

さて、學校のまはりには、ずつと家はなかつたと云つたが、あの土地は、西の方からいふと墓地のやうになつてゐて、學校の前の道を少し西の方へ行くと坂になつて、下が用水沼になつてゐたと思ふ。その先は無論ずつと先まで續いて見渡すかぎりの平野であつた。

校舍に續く高臺の雜木林に、夕映の眞赤な雲がすいて見えるなども、かなり田舍らしい靜かな眺めであつた。鐵道線路より東へ出て、縣道らしい道を南へと辿つて、大田窪へ行つて鰻を食つたことが二度ほどあつた。一度は高野茂義氏と一緒であつたと思ふ。

先達の大常盤の會で、加藤松吉氏が、今でも春泉亭はあるかと、中川君に聞いておゐでゞあつたが、その春泉亭は僕の宿の星野の眞向ひであつたので、よく物を食べに行つた。その時分島崎藤村君がもう信州の小諸へ教師に行つてゐたのだが、出京の序に平田禿木と一諸に訪ねて來て、春泉亭で飯を食つたことを覺えてゐる。

もうその時分を去ること、卅四、五年になるのであるが、私は、奈何も機會が無くて、浦和へは一遍も下車したことがない。然し一度は行つて見たいと思つてゐる。學生のなかでも、最も親しくしてゐるのは、今東京にゐる辻村鑑君である。何時だつたか、北海道へ旅行した時に軍醫をしてゐた天野一麿君に會つた。此頃浦中の會に招かれて行つて見ると、中川君、土屋君、肥留間君等には

かすかながら見覺えがある。

浦中に關係はないが、埼玉縣の人では、栗原元吉君をよく知つてゐる。もう一人、これは、泉州堺の百瀬診療所にゐる小島金三君といふのがある。此の人は浦和の人だといふのであつたから、半折の下の方へ、森と鳥居とを畫いて上へ次のやうな腰折を書き添へて小島君に與へたことがある。

「調宮の木立黄ばみぬ武藏野をかりがね渡る夜となりけり」

浦和の附近は無論とりたてゝいふべき景色のところはない。然し田園といふやうな趣は、かへつてさういふ平凡な田舍にあるやうに思ふ。春の陽の永くなり初めた時分の用水沼のあたりまで、たゞぶら／＼と散歩するのなども、田舍の珍らしい僕などにとつては、寔に心よい慰樂であつた。

浦和は東京へ近い處であるためか、若い時分のことを思ひ出す度に、昔の浦和附近の景色が一番[illegible]んで來る。

賀筵と追憶

一

昭和四年には僕は數へ年丁度六十になつたので、その年の六月九日には、島崎藤村君が、僕の爲めに、星ケ岡茶寮で、知友十三四人を集めて、賀筵を張つてくれた。その席へ集まつた水上、久保田、田中貢太郎、森下岩太郎などの若い人々の間で、僕のために、一般的な賀會を開くといふ相談が出來たといふ話であつた。次いで、高須芳次郎君が幹事になつてやつて居る評論隨筆家協會でも十月二十七日の夜、京橋のエムプレスで僕の爲めに賀會を催してくれた。

ところで、一般的の賀會の方は、泊鷗會といふ僕等の長くやつてゐる雜談會と三田の諸君とが協力して膳立てをしてくれる譯になつたが、僕の誕生日は十一月八日なんだが、その頃には一寸さしつかへができさうであつたので、賀筵の時期は十一月二十日過ぎにして貰らうことにした。十一月になつてから、實行委員といふやうな諸君と打ち合はせの結果、二十四日か二十六日に、記念講演

會を午後二時頃から開き、それが濟み次第、直ぐ賀宴を開くといふことになり、それから諸君の奔走の後で、二十四日、讀賣講堂で講演會、その晩、銀座の松本樓で賀宴といふことにいよ〳〵確定した。もう日數がなかつたので、發起人諸君は、事後承諾で、お名前拜借といふ簡便方法を取り、案内狀の宛先まで、成るべく何等かの緣故のある諸君だけにすることにした。數は二百二三十人になつたかと思ふ。勿論そのなかには親類のものも入つてゐた譯だ。地方在住の人々へも報告の意味で案内狀は發することになつた。

ところが、發送に僕自身も立會へばよかつたのだが、それを怠つたがために、義理の上からは何うしても通知しなければならん先きが大分洩れてゐることを此頃になつて發見した。まことに相濟まん譯ではあるが、僕としては、確に人名簿の原稿には書いてあつたことをこゝに言明して、謝罪の意を表する外はない。

二十四日二時からの講演會には。土岐善麿、戶川秋骨、沖野岩三郎、森田草平、小島政二郎、佐藤春夫の六氏の登壇を得、聽衆も二百人程は確にあつたと思ふ。計らずも、竹馬の友、松永武吉君舊知人磯邊彌一郎氏の來會を得たのは、僕に取つては殊に欣快の至りであつた。松永君は宴會の方へも出席してくれた。

六時からの松本樓の賀宴は全く盛會であつた。出席の諸君の數は僕と娘の晴子とを加へて、約八十人はあつたといふ報告である。席上、森田草平、與謝野寛、松永武吉、茅野蕭々、松居松翁、久保田万太郎、生方敏郎の諸君から極めて興味多き賀詞を頂いたのは、全く光榮の至りである。酌人をも少し呼んだので、會費だけでは足りなかつたのであるが、改造社、博文館、國民文庫刊行會、春陽堂、敎文社から十分な寄附があつたので、殘る方なく愉快な一夕を過ごすことを得たといふ報告である。記して、こゝに右の五社に對して謝意を表して置く。

記念品に對する醵金も可なり多かつたといふ幹事からの報告を得てゐる。これまた感謝に堪へざるところである。

與謝野君御夫婦からは、左の如き賀詞を頂いた。

白菊と共に清きは六十ぢへていよよ澄み入る人の身の秋

わかきより相知る君をうれしくも六十ぢの人として祝ふかな

（以上二首寛君）

野山なる木の葉も手をば叩くなり君をことほく十一月よ

賀をまゐるへし年月にかゝはりのなき夢を見る君と知れども

先生の六十の賀のことをきゝわりなき涙ながれこそすれ
賀の宴に涙しきりにこぼるゝはなほ君のごと若やがぬため
初めより天馬に騎して雲を行く君のためには老の坂なし
今日ののち人と異なる光をばもて悩みなどしたまふな君

（以上六首晶子君）

安成二郎君からは左の賀句を賜はつた。

冬薔薇の一杯に咲きにけり

二

講演會の時に、戸川君は、僕が始めて明治學院の入學試驗を受けに行つた時のことを話して、僕がフロツクコオトを着てゐたと覺へておいでのやうに云はれたが、僕の着てゐたのは、親類の者の古着を貰つたモオニングであつたのだ。何故學生の癖にモオニングなどを着てゐたかと云ふと、その前年（明治二十一年）の秋に、千駄ケ谷の德川さんのお邸に、流鏑馬、騎射の天覧があつて、僕の父親もその騎士の一人に加へられてゐた關係で、僕もその手傳ひに通つてゐた爲め、その時の着

物にと、古いモオ＝ングを貰ひ、明治學院へは外に着て行く着物がなかつたので、件の古服を一着に及んだ譯であつたのだ。

三

森田草平君は、僕が三十五六の時分に、赤い縞の唐棧の上下揃ひの着物を着てゐたといふ話をされたが、これは僕の着物としては餘り粹過ぎる。伊勢崎銘仙の赤い縞の着物を着た覺へはあるが、大方それのことであらう。

戸川君の話といひ、森田君の話といひ、何れにしても、僕が立派に若くはひどく粹ななりをしてゐたことになつてゐるのだが、實際は以上申す通り、選擇の何んのと云ふ話ではなく、唯手當り放題のなりをしたに過ぎないのだ。而るに、それが可なりの服裝の如く諸君に記憶されてゐるのであつて見れば、これも人德の致すところとして有りがたく頂戴して置く。

四

佐藤君は、君が鄕里に引込まれて居る時分、僕の言葉が同君の勵みになつたよしをお述べであつ

たが、同君が若くから囊中の錐であつたことは、君の周圍の人々が大抵認めてゐたことであつた。實は、佐藤君の尊大人豊太郎君の御來訪を受けた際、一再ならず、春夫君の將來の極めて多望なることをお話ししたことも覺へてゐる。しかしそれは勿論僕ばかりの考ではない。君の頭腦の明晰、君が詩想の豊富、忌憚なき物の觀方、これは早くから君の知人の大部分にもよく分つてゐたことであつたと思ふ。僕は、それ等の人々のためのマウスピース（代言者）になつて、尊大人に對し、君の將來を保證するの役目を勤めただけであつて、僕は決して俊才佐藤春夫君の發見者ではない。これは云ふまでもないことだと思ふけれども、佐藤君の謙遜な言葉に對しては、僕としては念の爲めに一言せざるを得ざるところであると思ふ。

佐藤君は又同君の顏と僕の顏とが似て居ることに就て面白い話をされた。即ち、何處かで僕の弟かと問かれたとかで、それで通してしまつたと云ふのだ。佐藤君、福永渙君、僕などは少くとも同じ型の顏だと云へるであらう。島田靑峰君とも僕は似てゐると云はれたことがある。

明治四十二年頃であつたかと思ふのだが、外堀線の電車のなかで（東宮御所の下あたり）『あなたは生田長江さんではないか』と呼びかけられたことがある。先きが眞面目な人であつたので『えゝさうです』といふわけにも行かず、生田氏に非ざるだけを答へた。その人には、僕の名は告げなか

つたかと思ふ。その若い紳士は名刺をくれた。何處かの學校の先生であつた。

或は、それより少し前かと思ふのだが、與謝野君のところで、客に蒲原有明君ではないかときかれたことがある。

これ等の諸君みなそれ〴〵の道に於て俊才である。さうすると僕でも外貌だけで一廉の俊才で通る譯である。

五

かくさま〴〵なことを憶ひ出すにつれて、忍ばるゝのは、先年逝いた安成貞雄君と、鎌倉に隠棲してゐる生田長江君とである。安成君が生きて居り、生田君が健康であつたら、賀宴の席は尚一層の賑ひを増したのであつたらうと思ふ。如何にも華やかなトオカアであつた兩君、一人は我等とは幽明途を異にし、一人は深く晦れて、かゝる席へ誘ふによしもないのだ。さう云へば、如何にも心持好ささうな醉態を見せた若山牧水君の既に故人であるのも、かゝる場合には殊に憶ひ出でらるゝことである。

同輩としては、川上眉山君　上田敏君、大町桂月君、岩野泡鳴君など、酒席での勇者の顔はもう

何うしても見得ないのも、かゝる際一しほの感慨である。夏目漱石君が生きて居られたとしたら、此んな席で何んなことを言はれるのであつたらうか。大杉榮君若し世にあらば、君のあのユーモラスな眼が如何に輝いたらうかといふことも、僕にとつては、少からず興味ある憶ひ出であると共に、それ等の人々に對する追懷の情は湧然として盡くるところを知らぬ。諸君の、特に與謝野君、茅野兩君の賀詞は僕に取つては過當の褒辭であつたことを深謝する。

生方敏郎君が宴席で述べられた、僕（孤蝶）の家に集まつた人々の間には黨派はなかつたといふ言葉をば、森下岩太郎君は『生方君は實にいゝことを云つてくれた』と云つて喜んでゐた。設けるべき城壁の材料をば持ち得なかつた身ではあるが、かう云ふ讃辭に對しては、汗顏ながら、聊か得意ならざるを得ぬ理由もあるかと思ふ。生方君に謝意を表して置く。

六

女婿の阿部彰の負擔で、十時過ぎから下谷の同花で、委員慰勞會のやうなものを催した。兩人は岡野氏の「郊外」の會などで顏見知りになつてゐる八重、市助、加代、美代などいふ連中がやつて來た。蘭秀といふ藝者を見て、安成次郎君が左の即興の賀歌を高吟してくれた。

半襟に菊の花咲き蘭秀と名の子めでたき人に會ひにけり

嘗つて、もう六七年前かと思ふのだが、岡野知十大人を通じて、山彦八重氏に僕の惡作の小唄二什に節づけをして貰つたことがあるので、此んな際にと思ひ、八重氏にそれを彈いて貰らうことを賴み、唄方の福子を待つたけれども、他の座敷のために、來ることが出來なかつたので、八重氏が唄ふ方も一緒にやつてくれた。一首は『戀する身』、一首は『花吹雪』

戀する身ははかなや
うちつけにいふは恥かし
さりとて、いはでやみなん思ひかは
さてさま〴〵悶ゆれど
それとしもなくよそへては
心弱さの水調水。

以上『戀する身』

やるせなのゆふべやな
たれにともなきふみ書きて

幾ひらを風に散らせば
いづ方へ捲て行くらん
折からの花吹雪

以上『花吹雪』

花吹雪の方は、嘗て邦樂座で梅の由兵衛を吉右衛門一座がやる時に、下座の唄に使つてくれたといふのだ。

あとは、生方君の大努力の『紺の前掛』を始め、松崎、吉岡、野尻、邦技氏等の本藝やら、その他の人々の珍藝やらにて、夜半に至るも興少しも盡きず、三氏程を除いての外は、徹夜にて騷ぎ得る所をといふので、自動車數臺を賃して、更け行く街路を走らせた。

（高橋製本）

昭和十一年七月二十日印刷
昭和十一年七月廿四日發行

著者検印

明治文壇回顧
定價壹圓八拾錢

著者　馬場孤蝶
東京市芝區三田豊岡町二番地

發行者　吉村清
東京市神田區神保町三丁目三番地

印刷者　佐久間文雄
東京市牛込區山吹町四ノ二一七

發行所　東京市神田區神保町三丁目三番地
協和書院
電話・九段二五五六番
振替・東京八三二七四番

光嶽印刷所

